多賀城市文化財調査報告書第128集

高 崎 遺 跡 ほか

高崎遺跡第１０２次
山王遺跡第１５０次
山王遺跡第１５２次
留ヶ谷遺跡第８次
新田遺跡第１０７次

平成28年３月

多賀城市教育委員会

序　　文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡や多くの埋蔵文化財包蔵地があり、それらは市域の約４分の１にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であり、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところです。

本書は、平成27年度に受託調査事業として実施した高崎遺跡第102次調査、山王遺跡第150・152次調査、留ヶ谷遺跡第８次調査、新田遺跡第107次調査の発掘調査成果を収録したものです。このうち、山王遺跡第152次調査では、平安時代の南北道路跡を発見しました。今回の発見も多賀城跡の南面に広がるまち並みの一端を知る貴重な成果となりました。

広大な遺跡範囲に対し、調査面積はごくわずかでしたが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の新たな歴史像の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成28年３月

多賀城市教育委員会
教育長　菊　地　昭　吾

例　　言

1　本書は、平成27年度の受託事業による発掘調査５件の成果をまとめたものである。
2　遺構の名称は、各遺跡とも第１次調査からの通し番号である。
3　測量法の改正により、平成14年４月１日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系Ｘ」を用いている。また、本書で報告している調査では、平成23年３月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いている。震災以前の調査成果合成に際しては、座標値を整合させるために、再測量の成果に基づき東に約３ｍ、南に約１ｍの補正をかけている。
4　挿図中の高さは、標高値を示している。
5　土色表記は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
6　執筆は、Ⅰ・Ⅴを熊谷満、Ⅱ・Ⅳを島田敬、Ⅲ・Ⅵを畠山未津留が担当し、編集を熊谷が行った。資料整理及び図版作成は各執筆担当者が行い、遺物の写真撮影は村上詩乃が担当した。
7　調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

Ⅰ　遺跡の地理的環境…… 2
Ⅱ　高崎遺跡第102次調査 …… 3
Ⅲ　山王遺跡第150次調査 …… 33
Ⅳ　山王遺跡第152次調査 …… 45
Ⅴ　留ヶ谷遺跡第８次調査…… 56
Ⅵ　新田遺跡第107次調査 …… 67

調　査　要　項

1　調 査 主 体　多賀城市教育委員会　教育長　菊地昭吾
2　調 査 担 当　多賀城市埋蔵文化財調査センター　所長　板橋秀徳
3　調査担当者　多賀城市埋蔵文化財調査センター
【高崎遺跡第102次】副主幹:島田敬、研究員:石川俊英【山王遺跡第150次】技師:畠山未津留【山王遺跡第152次】副主幹:島田敬【留ヶ谷遺跡第８次】研究員:熊谷満、調査員:茂泉光雄【新田遺跡第107次】技師:畠山未津留
4　調査協力者　スモリ工業株式会社、大東建託株式会社、百年住宅株式会社、株式会社レオパレス２１、ＣＣＰ地域開発コンサルタント
5　調査従事者　【高崎遺跡第102次】渥美静香、阿部信夫、石井眞六、加藤義宏、菊地清喜、工藤敦子、小松まり、小松美樹、西條金三、櫻井良博、佐々木正範、佐藤良雄、志賀定夫、高橋由美子、戸枝瑞恵、根本清、平塚武慶、藤田恵子、星芳子、三浦侑士、矢島恒男、山田理、若生要一【山王遺跡第150次】渥美静香、阿部純一、大泉清吉、小川勝彦、鎌田修一、須田英敏、戸枝瑞恵、中島弘、濱田茂樹、平塚孝志、松川謙二、小針美香、佐藤みゆき【山王遺跡第152次】小松まり、西條金三、佐藤良雄、高橋由美子、藤田恵子、上村博【留ヶ谷遺跡第８次】氏家雅夫、門脇邦夫、白石三枝子、高橋正行、中込弘美、平塚訓章、横山治【新田遺跡第107次】渥美静香、阿部純一、小川勝彦、鎌田修一、須田英敏、高橋由美子、戸枝瑞恵、中込弘美、中島弘、平塚孝志、松川謙二、河東美雄、山田佐男
6　整理従事者　多賀城市埋蔵文化財調査センター　調査員:村上詩乃
赤沼たみ、阿部麻衣子、川名直子、小泉絢子、佐藤ゆかり、千葉都美、千葉貴久江、宮城ひとみ、村上和恵

調査一覧

No.	遺　跡　名	所　在　地	調 査 期 間	調査面積	調査担当者
1	高崎遺跡第102次	高崎一丁目103番1	平成27年4月７日 ～平成27年６月29日	1,730㎡	島田・石川
2	山王遺跡第150次	山王字掃下し2番8、2番24、2番27	平成27年８月18日 ～平成27年10月９日	289㎡	畠山
3	山王遺跡第152次	南宮字八幡143-2	平成27年８月27日 ～平成27年10月27日	80㎡	島田
4	留ヶ谷遺跡第８次	留ヶ谷一丁目353-1	平成27年11月16日 ～平成27年12月21日	980㎡	熊谷・茂泉
5	新田遺跡第107次	新田字北14、14-1、15、15-1、16、16-3	平成27年11月24日 ～平成28年１月21日	487㎡	畠山

凡　　例

１　本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物跡　　ＳＩ：竪穴住居跡　　ＳＤ：溝跡　　ＳＫ：土壙　　Ｐｉｔ：柱穴及び小穴

ＳＸ：その他の遺構

２　奈良･平安時代の土器の分類記号は下記のとおりである。詳細は『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』（多賀城市教育委員会　2003）で報告している。

（１）土師器坏

Ａ類：ロクロ調整を行わないもの

Ｂ類：ロクロ調整を行ったもの

ＢⅠ類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

ＢⅡ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

ＢⅢ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

ＢⅣ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

ＢＶ類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

ＢⅠ・ＢⅡ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをａ、静止糸切りによるものをｂ、回転糸切り（糸切り）によるものをｃとして細分する。

（２）土師器甕

Ａ類：ロクロ調整を行わないもの

Ｂ類：ロクロ調整を行ったもの

（３）須恵器坏

Ⅰ類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

Ⅱ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

Ⅲ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

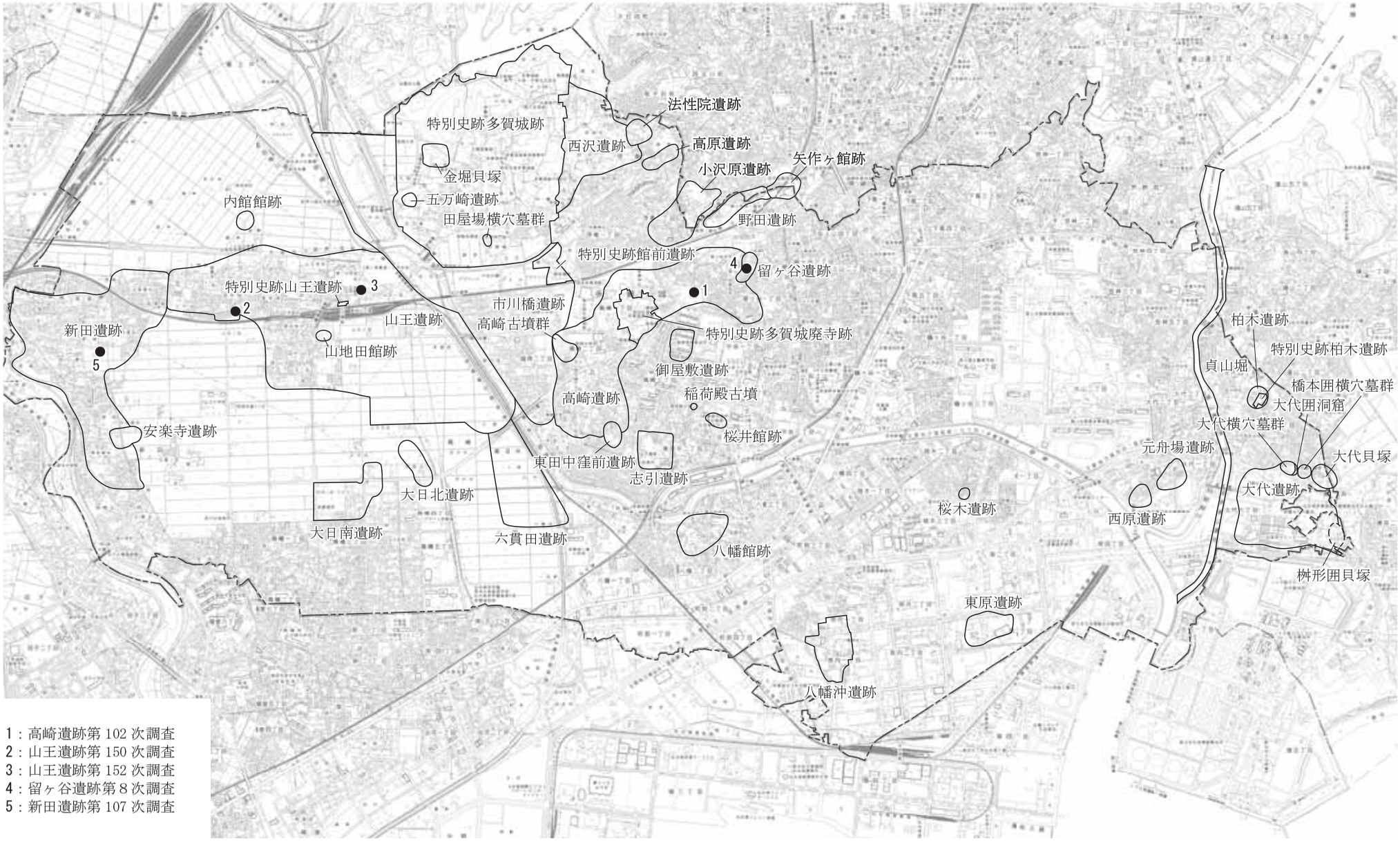
Ⅳ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

Ⅴ類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

Ⅰ・Ⅱ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをａ、静止糸切りによるものをｂ、回転糸切り（糸切り）によるものをｃとして細分する。

３　瓦の分類は「多賀城跡　政庁跡　図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1980）、「多賀城跡　政庁跡　本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1982）の分類基準に従った。

４　本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線Ｃ期存続中に降灰し、承平４年（934年）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907 ～ 934年の間とする考えと、『扶桑略記』延喜15年（915年）７月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10Ｃ頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。本書ではこれらの研究成果を基に、灰白色火山灰を10世紀前葉に降下したものとする。



1：高崎遺跡第 102 次調査
2：山王遺跡第 150 次調査
3：山王遺跡第 152 次調査
4：留ヶ谷遺跡第８次調査
5：新田遺跡第 107 次調査

巻頭図版　多賀城市の遺跡地図と調査区の位置

Ⅰ　遺跡の地理的環境

多賀城市は、宮城県のほぼ中央、仙台市の北東側に位置する。東西7.6km、南北4.2km、周囲29.9kmの規模であり、東側は貞山運河を境界として七ヶ浜町、北西側は加瀬沼を隔てて利府町、北側は塩竈市、南から西にかけては仙台市と隣接する。

市内の地形は、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高５～６ｍの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在しており、その面積は市の面積の約４分の１にも及ぶ。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城や付属寺院の多賀城廃寺と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

以下、今年度に発掘調査を実施した遺跡の概略について述べる。

高崎遺跡は、低丘陵の西端部に立地し、東西約1.3km、南北約１kmの範囲を有する。これまで、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。古代では、多賀城廃寺跡の西側で約70軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸尻地区では大量の灯明皿が一括廃棄された状態で出土し、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

山王遺跡は、標高３～４ｍの微高地に立地し、東西約２km、南北約１kmの範囲を有する。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ１町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいなどを構成する建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

留ヶ谷遺跡は、市中央部にある標高20m前後の丘陵上に立地しており、東西約150m、南北約300mの範囲を有する。平安時代から近世にかけての複合遺跡であり、これまでの調査で平安時代の竪穴住居跡をはじめ、土塁や堀で囲まれた館跡を発見している。

新田遺跡は、標高５～６ｍの微高地に立地し、東西約0.8km、南北約1.6kmの範囲を有する。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画された屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。

Ⅱ　高崎遺跡第102次調査

１　調査に至る経緯と経過

本件は、高崎１丁目地内における宅地造成工事に伴う本発掘調査である。平成26年10月に、地権者である開発業者より、高崎遺跡の北東部に位置する当該地における宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。当該地は緩やかな丘陵部に立地し、一部がグランドとして利用されていた。計画では、対象地のほぼ中央部に４条の道路を設けるほか、中央部と東端部において切土を行うことから、遺跡への影響が懸念された。そのため、遺構の有無を確認し、存在する場合はその分布状況や構成を把握することを目的に試掘・確認調査を行うことにした。平成27年２月14日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、３月３日から３月27日までの期間で現地調査を実施した。

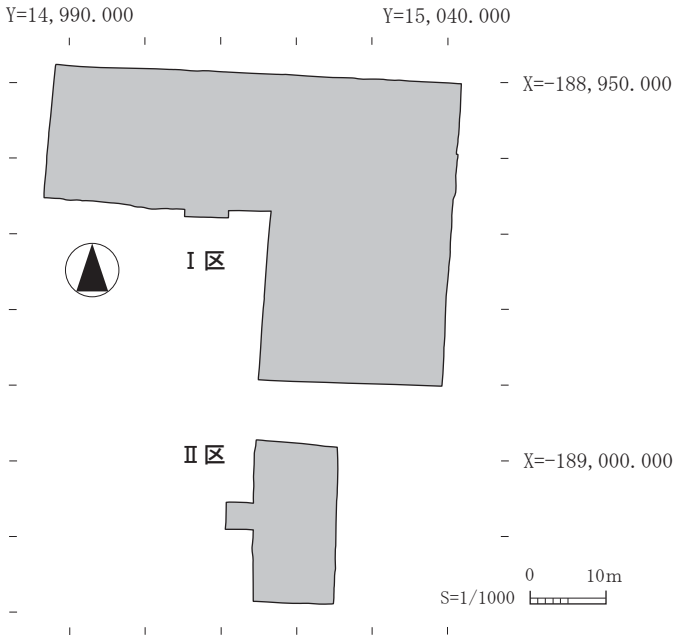
その結果、対象地の北側中央付近を中心に溝跡、柱穴などの遺構を発見したほか、南側中央部の一部の箇所でも溝跡を発見した。これ以外の区域では、遺構は発見されなかった（註１）。

第１図　調査区位置図

これを受けて、開発者に対し本発掘調査を実施する必要があることを回答し、合わせて調査費用の積算の提示を行った。これに対して同意と協力が得られたことから、平成27年４月３日付けで埋蔵文化財発掘調査の委託契約を締結し、４月７日から本発掘調査を実施したものである。

調査においては、試掘・確認調査により遺構が発見された対象地北半部中央付近をⅠ区、南側中央部をⅡ区として調査を実施した。２つの地区を合わせた調査面積は、約1,730㎡（対象面積約6,553㎡）である。はじめに、重機により表土の除去作業を行った。表土及び堆積土は、Ⅰ区の南半部からⅡ区の北側にかけては厚さ10～20㎝と薄いのに対し、Ⅰ区の北壁付近とⅡ区の南西部は厚く、遺構検出面までの深さが約１ｍである。その後、作業員を動員して両地区で併行して精査及び遺構検出作業を行った。その結果、試掘・確認調査の際に対象地の中央付近において唯一検出されていた２条の平行する溝状の落ち込みが、現代のものであることが判明した。これにより、対象地の中央付近は後世の削平によって、遺構はすべて失われていると判断された。引き続き、Ⅰ区北半部を中心に遺構検出作業を行った結果、５月８日までに２軒の竪穴住居跡のほか、溝跡やいくつかの柱列を確認した。一方、Ⅱ区においては、本調査区の南側で実施した高崎遺跡第43次調査（註２）で発見した溝跡の延長部であるＳＤ1791溝跡を精査し、Ⅱ区の北側で削平

によって途切れることを確認した。この溝跡は、規模の大きなもので、22日から掘り下げを開始した。また、Ⅰ区検出の２軒の竪穴住居跡をそれぞれＳⅠ1786住居跡とＳⅠ1787住居跡とし、前者は21日から、後者は６月２日から掘り下げを開始した。なお、ＳⅠ1786住居跡については、建て替えがあることを確認した。その後、Ⅱ区においては、５日にＳＤ1791溝跡の掘り下げを終了して、写真撮影及び平面図作成を行った。また、調査区西壁付近で竪穴住居跡の東辺らしき方形のプランを確認したことから、調査区を西側に拡張した。10日を過ぎて、Ⅰ区の２棟の竪穴住居跡の調査が終盤を迎えるのと併行して、その東側で遺構の精査を行い、検出していた数条の柱列が３間×３間の規模の大きな掘立柱建物跡として組み合うことを確認した。これをＳＢ1789建物跡とし、柱列ごとに断ち割りをかけて、随時写真撮影及び断面図作成を行った。これらの遺構は、19日にＳⅠ1787住居跡とＳＢ1789建物跡、23日にＳⅠ1786住居跡の調査を終了した。一方、Ⅱ区においては、西側拡張区で竪穴住居跡を確認し、ＳⅠ1788住居跡とした。ただし、この住居跡は現代の削平が著しく、カマド部と周溝の存在から竪穴住居跡と判断できたものである。周溝の配置状況から建て替えがあることを確認した。この住居跡の調査は、23日に終了した。調査はその後、Ⅰ区北側で検出した小規模な溝跡や柱穴の掘り下げを実施し、随時写真撮影及び図面作成を行った。そして、26日にⅠ区及びⅡ区の全景写真撮影をもって終了した。翌週の29日には、発掘器材の搬出を行い、本調査の一切を終了した。



第２図　調査区全体図（Ⅰ・Ⅱ区）

２　調査成果

（１）層　序

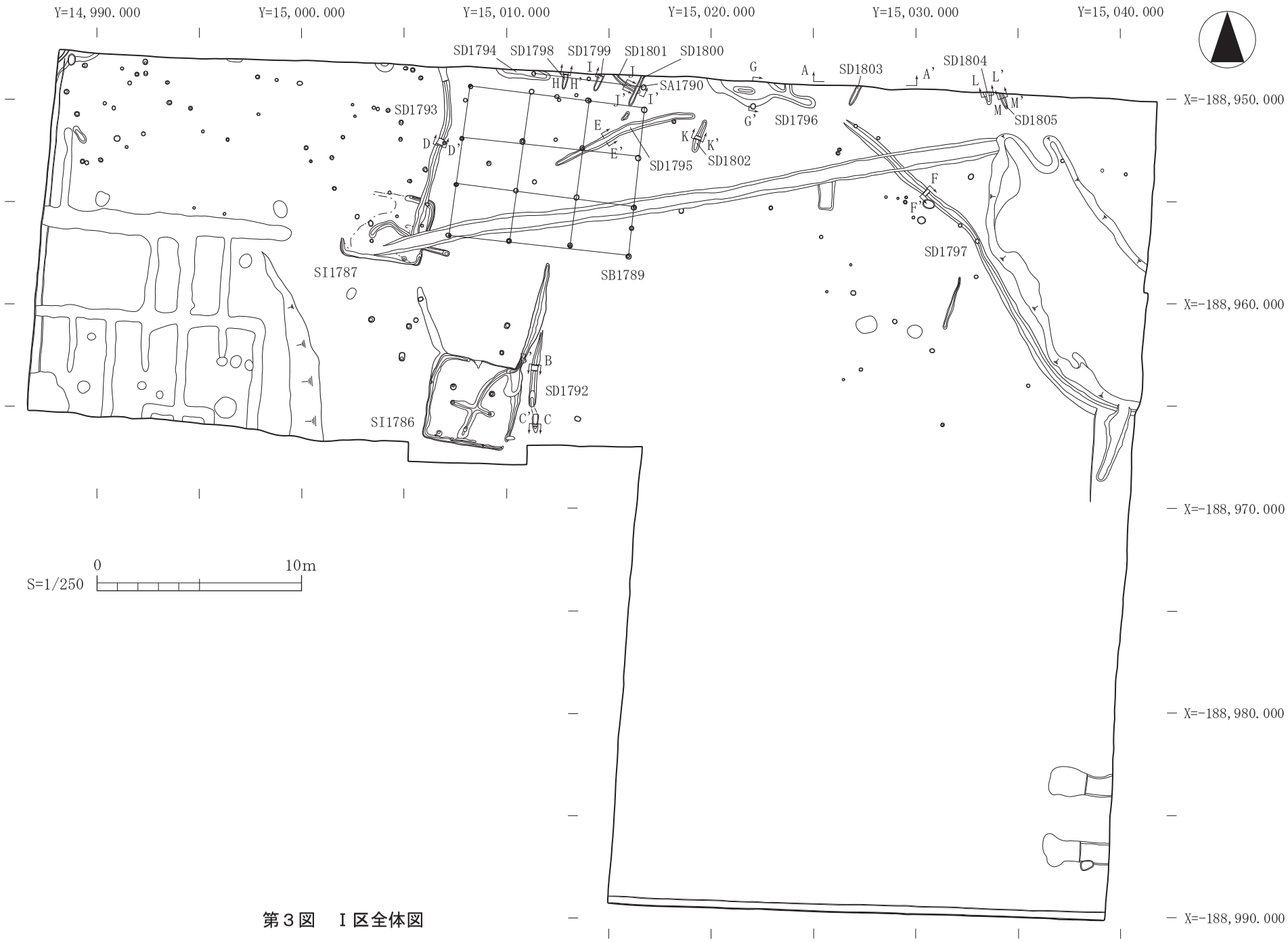
今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

Ⅰ　層：現代の盛土及び堆積土で、厚さはⅠ区の南半部からⅡ区の北側にかけては10～20㎝と薄く、Ⅰ区の調査区北壁付近とⅡ区の南西部では60～80㎝と厚い。Ⅰ区で２層、Ⅱ区で３層に分けられる。

Ⅱａ層：灰黄褐色土で、厚さは5～10㎝である。Ⅰ区の北側に分布する。にぶい黄褐色土を斑状に若干含んでいる。

Ⅱｂ層：にぶい黄褐色土で、厚さは10～15㎝である。Ⅰ区の北側に分布する。色調の異なるにぶい黄褐色土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。

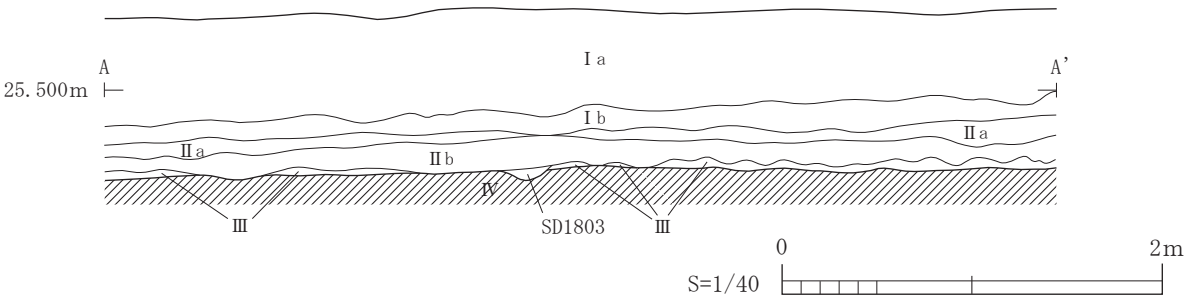
Ⅱｃ層：にぶい黄褐色土で、厚さは10～20㎝である。Ⅱ区の南側に分布する。同色の砂質土を若干混入する。


Y=14,990.000
Y=15,000.000
Y=15,010.000
Y=15,020.000
Y=15,030.000
Y=15,040.000
X=-188,950.000
X=-188,960.000
X=-188,970.000
X=-188,980.000
X=-188,990.000
SD1794
SD1798
SD1799
SD1801
SD1800
SA1790
SD1803
SD1804
SD1805
SD1796
SD1793
SD1795
SD1802
SD1797
SI1787
SB1789
SD1792
SI1786
A
A'
B
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
I
I'
J
J'
K
K'
L
L'
M
M'
0
10m
S=1/250

第３図　Ｉ区全体図

Ⅲ　層：にぶい黄褐色土で、厚さは3～5㎝である。Ⅰ区の北側に分布する。灰黄褐色土を混入する。地山の漸移層で、遺構検出面である。

Ⅳ　層：基盤となる黄褐色土（地山）で、Ⅲ層が認められない区域での遺構検出面である。



第４図　Ⅰ区土層堆積状況断面図

（２）発見遺構と遺物

Ⅰ区

ＳⅠ1786竪穴住居跡

２時期の変遷（Ａ→Ｂ）が確認でき、同位置、同規模で建て替えられている。ただし、外延溝が派生する位置が異なっている。

ＳⅠ1786Ａ竪穴住居跡（第３・５・８図）

【位置】調査区西半部の南壁寄りで発見した竪穴住居跡である。

【残存状態】後続するＢ期と同位置で重複することから、カマド下部の暗渠状施設及び外延溝とその派生部付近の周溝が残存する程度である。

【重複】他の遺構との重複はない。

【平面形・方向】平面形は方形である。方向は北辺でみると東で約13度南に偏している。

【規模】重複するＢ期と同規模と推定すると、北辺が4.4m、西辺が4.3mである。

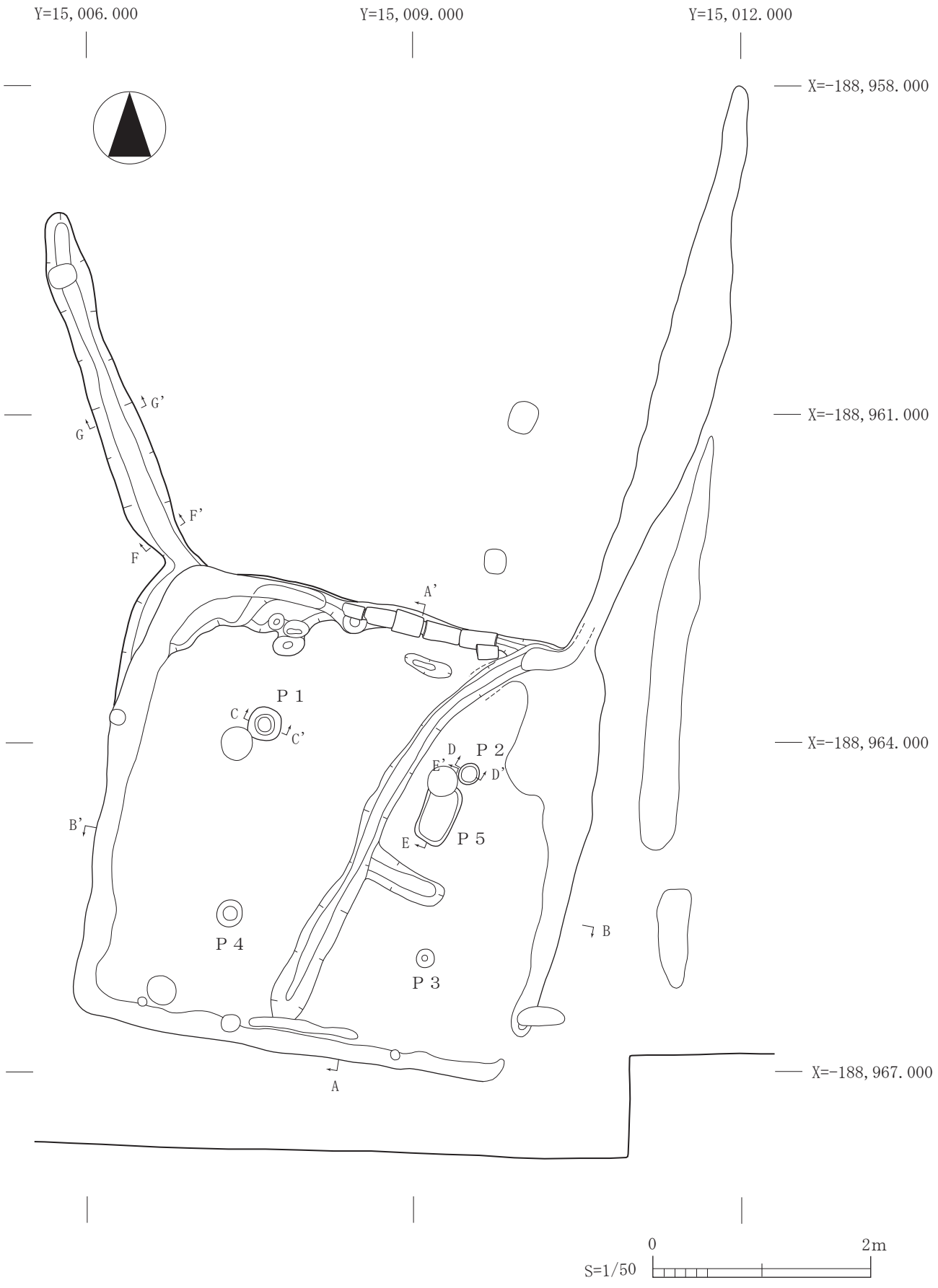
【埋土】北辺中央部のカマド周辺にわずかに残存している。黒褐色土で、木炭粒と焼土塊を多く含んでいる。

【床面の状態】中央のくぼみを埋めるように、ほぼ全面に貼床されている。黄褐色土を斑状及びブロック状に含むにぶい黄橙色土からなり、厚さは3～7㎝である。

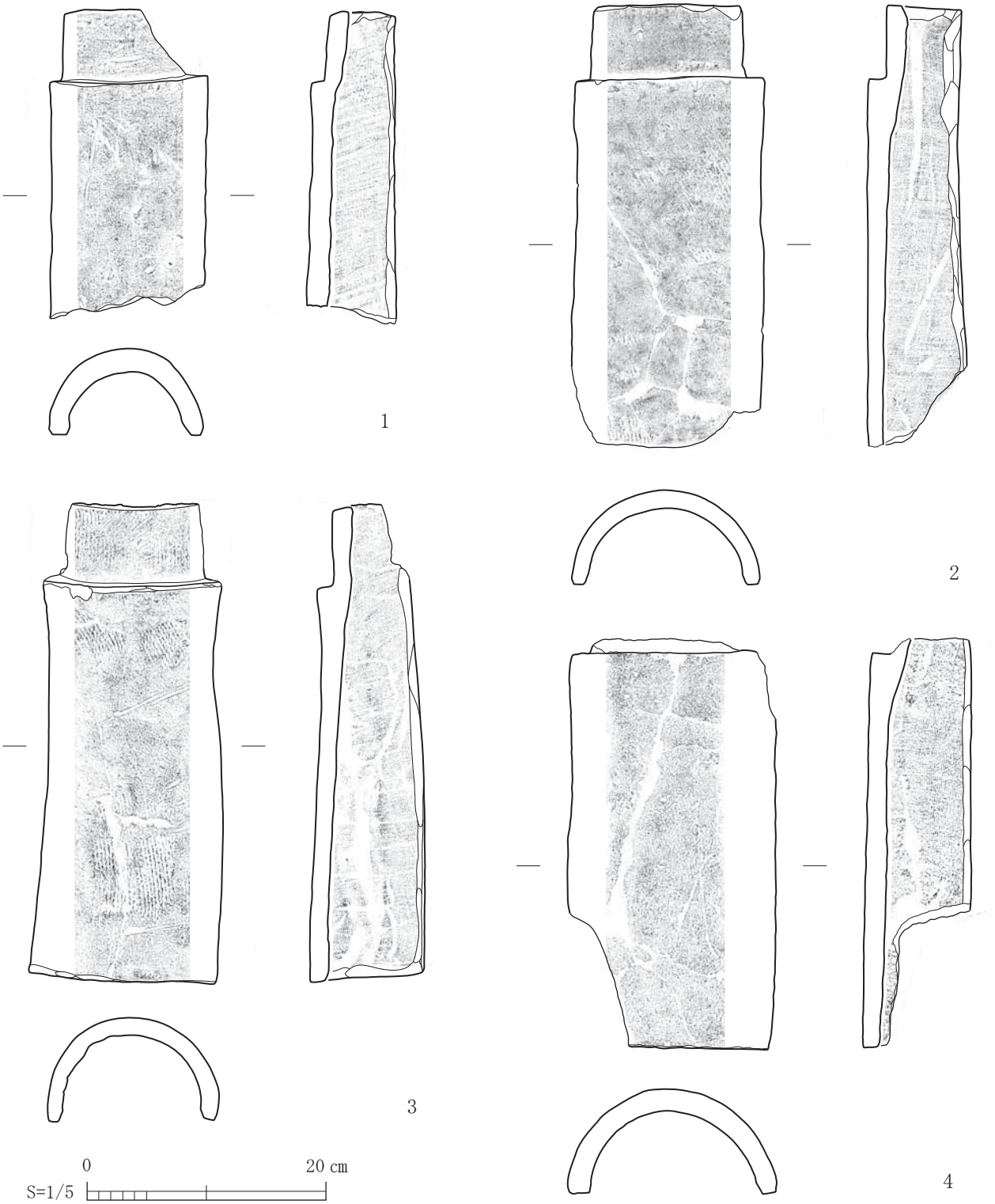
【壁の状態】わずかに残存する北西隅付近でみると、ほぼ垂直に立ち上がる。

【柱穴】四隅の対角線上に４基（Ｐ１～４）確認した。ただし、南半部のＰ３・４は浅いくぼみ程度のもので、柱を据えただけの痕跡である可能性が考えられる。北西部のＰ１は平面形が円形で、直径30㎝、深さは34㎝である。北東部のＰ２は平面形が円形で、直径20㎝、深さは36㎝である。いずれも、柱の抜き取りがあったと考えられ、その埋土は、にぶい黄褐色土と木炭粒を含む黒褐色土である。

【カマド】カマド本体は残存していないが、その基礎部の構築土（にぶい黄褐色粘土）の確認から北辺中央に布設されていたと考えられる。また、カマドの下部では、５点の丸瓦（第６図１～４）を周溝の上に伏せた状態でつないで並べ、暗渠状にしている。



第５図　ＳＩ1786Ａ住居跡平面図



単位：cm

番号	種　類	遺　構	層位	特　徴		長さ	広端部幅	狭端部幅	厚さ	写真図版	登録番号	備　考
				外　面	内　面							
1	丸　瓦	ＳＩ 1786A	カマド下	縄叩き→ナデ	布目	－	13.0	12.7	1.9	6-1	R2	ⅡＢ類－ａ
2	丸　瓦	ＳＩ 1786A	カマド下	縄叩き→ナデ	布目	－	15.9	15.3	1.5	6-2	R1	ⅡＢ類－ａ
3	丸　瓦	ＳＩ 1786A	カマド下	縄叩き→ナデ	布目	39.5	15.8	15.7	1.4	6-3	R4	ⅡＢ類－ａ
4	丸　瓦	ＳＩ 1786A	カマド下	縄叩き→ナデ	布目	－	17.4	16.9	1.8	6-4	R5	ⅡＢ類－ａ

第６図　ＳＩ1786Ａ出土遺物（丸瓦）

【周溝】北辺で部分的に確認した。上幅16 ～ 20㎝、下幅6 ～ 10㎝、深さ5㎝前後であるが、外延溝が派生する北西隅付近では上幅が約50㎝と広がっている。

【その他の施設】北東部のＰ２の南側で土壙状のピット（Ｐ５）を確認した。平面形は方形に近く、長辺56㎝、短辺30 ～ 35㎝、深さ15㎝である。埋土は、木炭粒を若干含む灰黄褐色土の単層である。このほか、南辺中央近くから南北方向に斜行し、北東隅で周溝に接続する溝跡を確認した。この溝跡は、さらに中央付近で東西方向の短い溝跡と接続する。長さは南北方向で約4.3ｍ、東西方向で約0.8ｍを確認した。上幅20 ～ 35㎝、下幅5 ～ 10㎝で、深さは15㎝前後である。

【外延溝】北西隅から派生し、南北方向に斜行する。長さは、3.3ｍまで確認した。上幅28 ～ 44㎝、下幅10 ～ 20㎝で、深さは16 ～ 25㎝である。取り付き部では、幅が著しく狭くなる。埋土は、上層が黒褐色土、下層がにぶい黄褐色土である。

【出土遺物】土師器甕（Ａ類、Ｂ類）、須恵器坏（Ⅱｃ類）・高台付坏・甕、丸瓦（ⅡＢ類-ａ）、平瓦（ⅡＢ類）が出土している。なお、土師器甕のなかには内面にロクロ回転によるハケメが施されているものがある。

ＳＩ1786Ｂ竪穴住居跡（第３・７・８図）

【位置】調査区西半部の南壁寄りで発見した竪穴住居跡である。

【残存状態】上部が著しく削平されており、床面付近のみが残存している。

【重複】他の遺構との重複はない。

【平面形・方向】平面形は方形である。方向は北辺でみると東で約13度南に偏している。

【規模】東西が4.2 ～ 4.5ｍ、南北が4.1 ～ 4.3ｍである。

【埋土】６層に細分されるが、基本的には２層（１層と３層）の堆積である。１層は中央付近に堆積する明黄褐色土で、褐灰色土と灰黄褐色土を混入する。２層は南辺付近にのみ堆積する暗褐色土で、明黄褐色土を小ブロック状に含んでいる。３層はほぼ全域に堆積する暗褐色土で、明黄褐色土を斑状に含んでいる。４層は南半部に部分的に堆積するにぶい黄褐色土で、明黄褐色土粒を含んでいる。５・６層はいずれもカマド付近に堆積する黒褐色土で、前者は木炭粒を、後者は木炭粒と焼土塊を多く含んでいる。

【床面の状態】Ａ期の貼床土及びカマド構築土を床面としている。

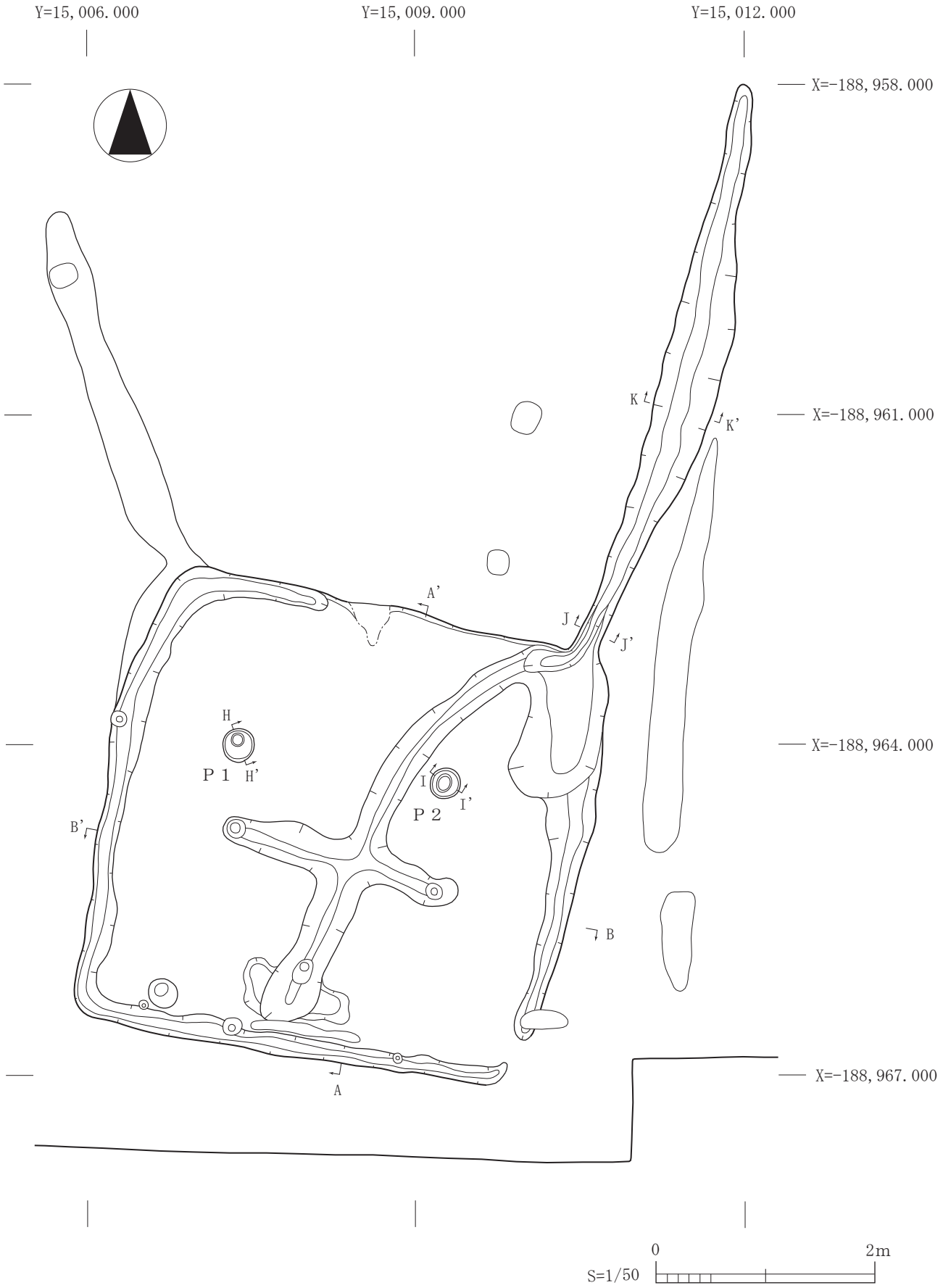
【壁の状態】わずかに残存する東辺でみると、ほぼ垂直に立ち上がる。

【柱穴】北西部と北東部で２基（Ｐ１・２）確認した。いずれも平面形は円形で、柱痕跡が認められる。北西部のＰ１は、掘方の直径30㎝、柱痕跡の直径10㎝で、深さは42㎝である。北東部のＰ２は、掘方の直径28㎝、柱痕跡の直径12㎝で、深さは30㎝である。埋土は、柱痕跡が暗褐色土、掘方の上層が暗褐色土、下層が褐灰色土である。

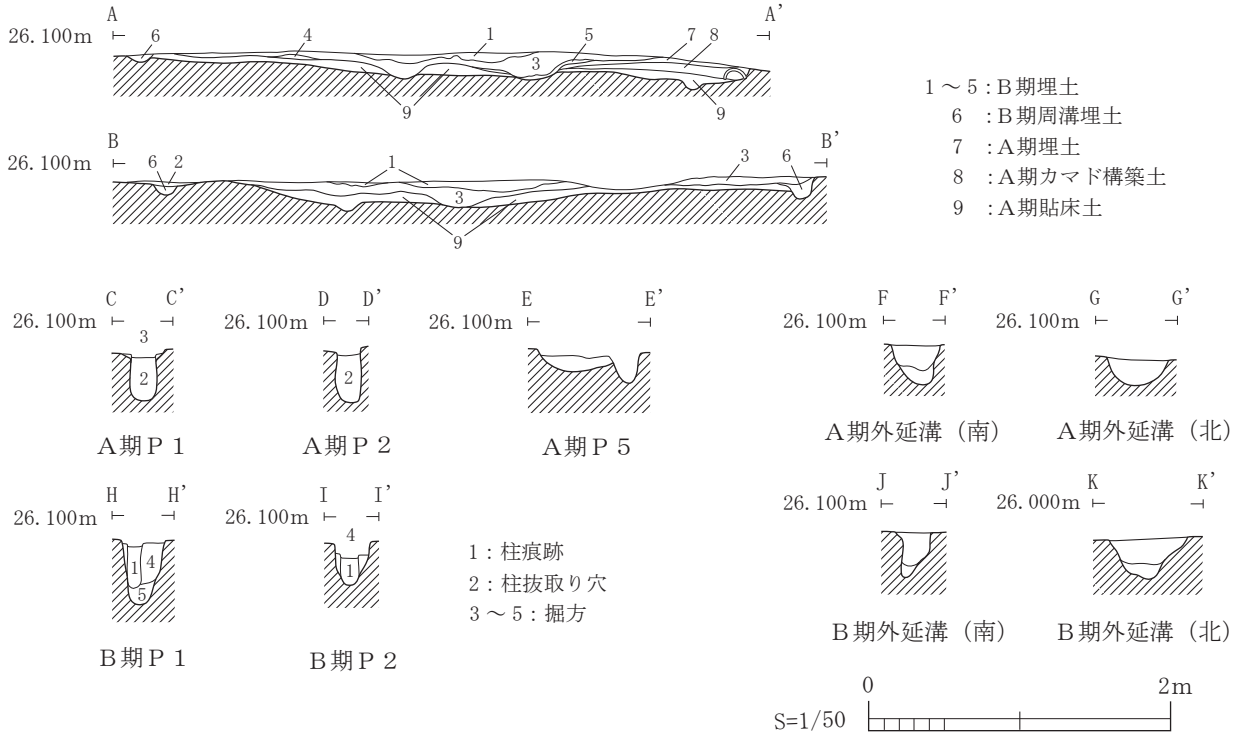
【カマド】北辺中央に布設されていたことが、カマド西側側壁基底部の構築土と考えられるにぶい黄褐色粘土の位置から推定された。

【周溝】削平によって途切れる箇所もみられるが、全周していたと考えられる。また、Ａ期に設けられたカマド下部の暗渠状施設を継続して利用していたと推測されるため、この箇所では確認されない。上幅18 ～ 25㎝、下幅8 ～ 12㎝、深さは約10㎝である。外延溝が派生する北東隅付近では土壙状を呈し、上幅が約70㎝に広がっている。埋土は、明黄褐色土を斑状に含むにぶい黄褐色土である。

【その他の施設】南辺中央近くから南北方向に斜行し、北東隅で外延溝に至る溝跡を確認した。また、



第７図　ＳＩ1786Ｂ住居跡平面図



第８図　ＳＩ1786住居跡断面図

この溝跡は中央付近で東西方向の溝跡と直交する。なお、北側を除いた３箇所の端部で直径15～25㎝の円形の落ち込みを確認した。長さは南北方向で約4.4m、東西方向で約2.2mを測る。また、上幅25～55㎝、下幅5～12㎝で、深さは約10㎝である。

【外延溝】北東隅から派生し、南北方向に延びる。長さは、5.4mまで確認した。上幅22～44㎝、下幅10～15㎝で、深さは25～30㎝である。取り付き部から約1.5m先で幅が広くなる。埋土は、上層が暗褐色土、下層が褐灰色土である。

【出土遺物】土師器坏（B類）・甕（A類、B類）、須恵器坏（Ⅱc類）・高台付坏・甕・瓶、平瓦（ⅡB類）が出土している。

ＳＩ1787竪穴住居跡（第３・９図）

【位置】調査区西半部で発見した竪穴住居跡である。

【残存状態】削平により北西部が失われている。

【重複】ＳＤ1793溝跡と重複し、それより古い。

【平面形・方向】平面形は長方形である。方向は南辺でみると東で約8度南に偏している。

【規模】南辺が4.0m、東辺が3.3mである。

【埋土】３層に分けられる。１層は暗褐色土で、にぶい黄褐色土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。２層は黒褐色土で、木炭、焼土粒を含んでいる。３層は灰黄褐色土で、にぶい黄褐色土を斑状に含んでいる。

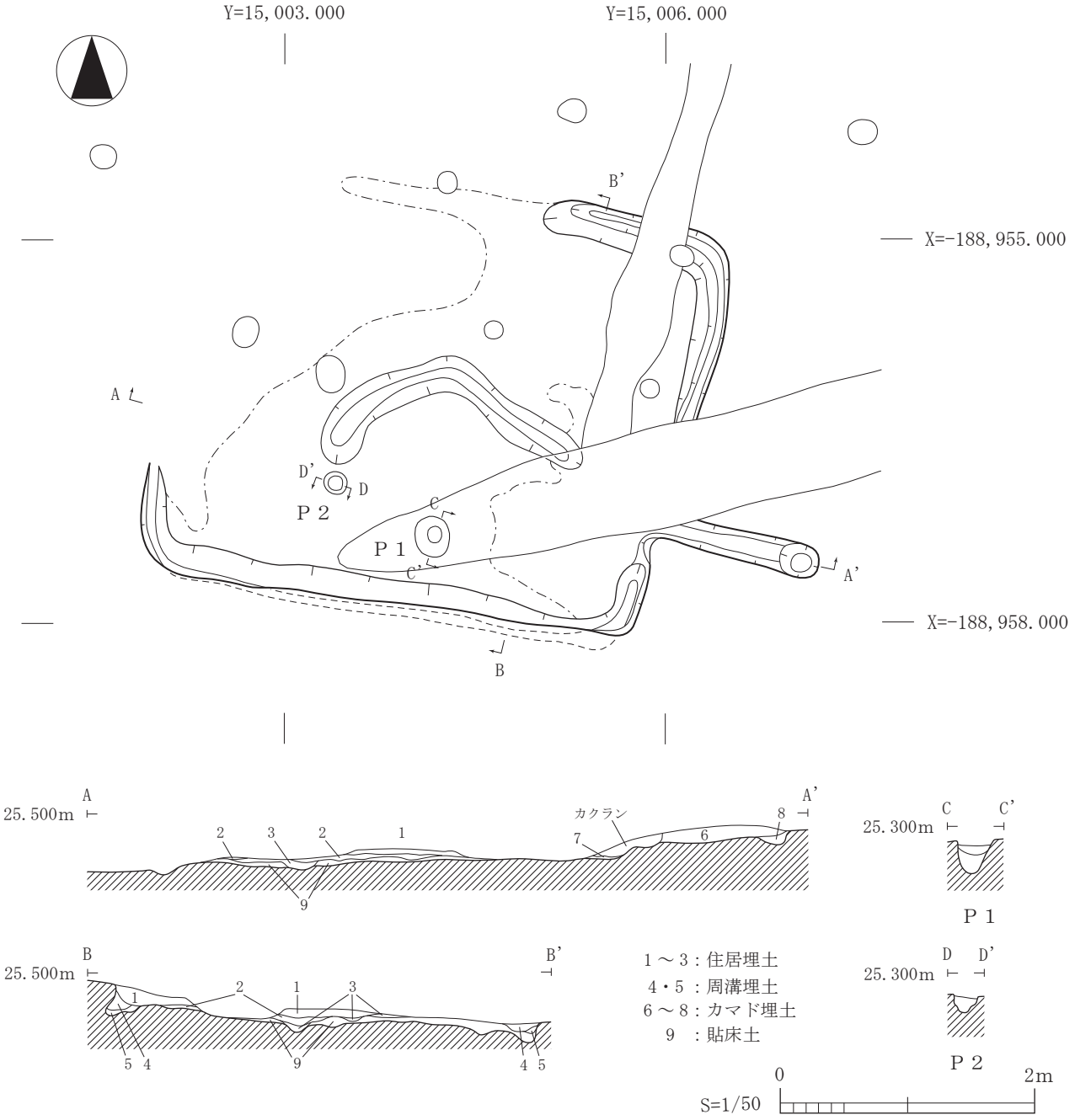
【床面の状態】全面に貼床されていたと推定されるが、北西部では削平によって確認することができない。残存する貼床は、にぶい黄橙色土からなり、厚さは3～7㎝である。

【壁の状態】南辺でみると外側に大きく抉り込むようにつくられている。その後はほぼ垂直に立ち上がる。

【柱穴】柱穴は確認されない。

【カマド】東辺の南寄りに布設されている。煙道を確認したが、燃焼部などの中心部は現代の溝によって失われている。煙道は長さ1.3m、幅21～25cm、残存する深さは10cm前後である。煙出し穴の底面は円形にくぼんでいる。埋土は３層に分けられるが、大部分はにぶい黄褐色土を斑状に含み、かつ木炭、焼土塊を多量に含む暗褐色土が占める。なお、南側側壁が壁際にわずかに残存しており、にぶい黄褐色粘土で構築されていることがわかる。

【周溝】東辺と南辺及び北辺の東側で確認したが、北西部では削平により失われている。上幅22～30cm、下幅4～8cm、深さは10cm前後である。埋土は２層に分けられ、上層が褐色土、下層が暗褐色土を斑状



第９図　ＳＩ1787住居跡実測図

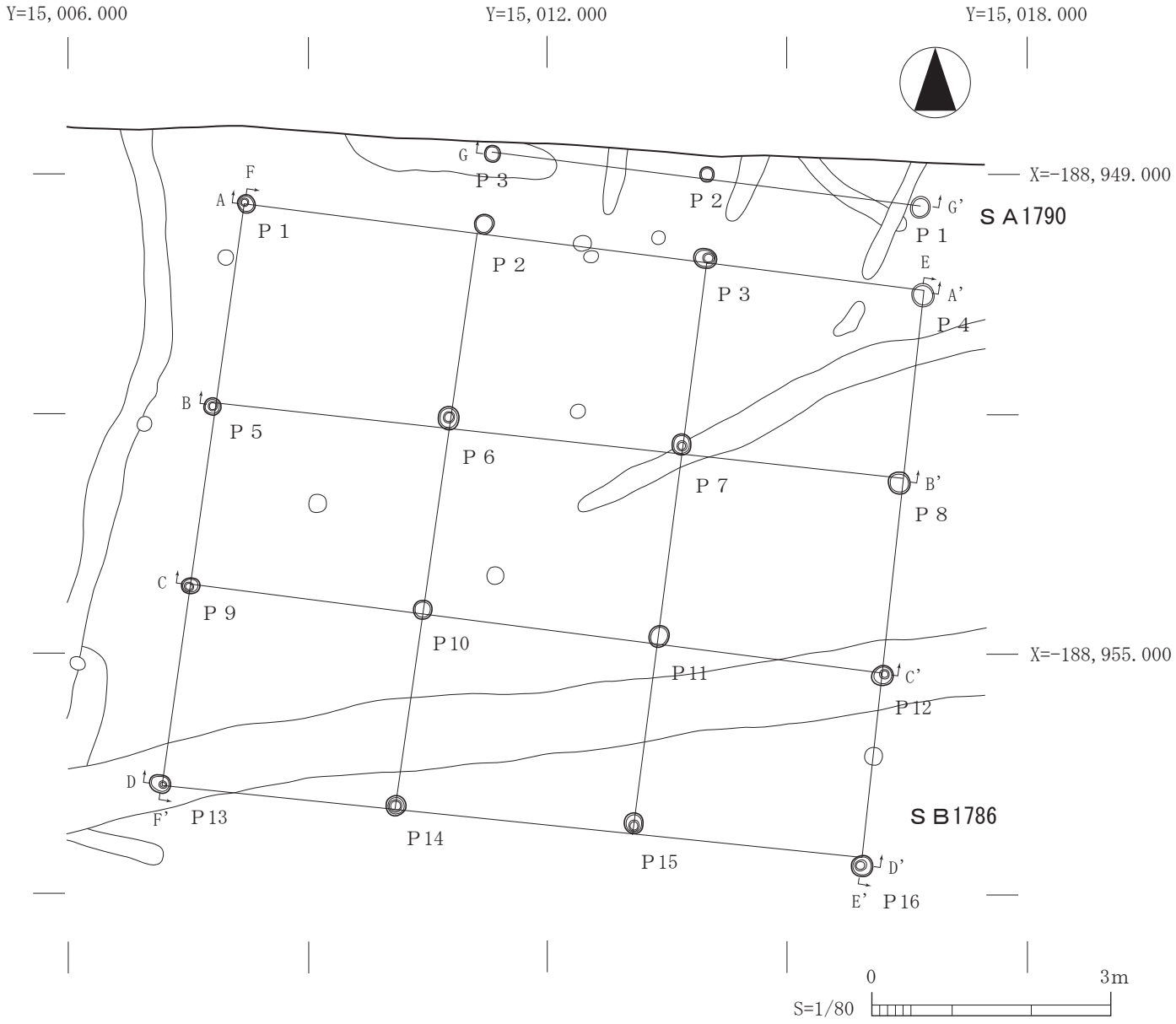
に含む褐色土である。

【その他の施設】南壁寄りで２基のピット（Ｐ１・２）を確認した。いずれも平面形は円形で、東側のＰ１は直径30㎝前後、深さは27㎝である。西側のＰ２は、直径約20㎝、深さは15㎝である。埋土は、暗褐色土が主体を占める。このほか、カマド付近から派生し、「く」の字に屈曲する溝跡を確認した。長さは約1.1ｍ確認した。上幅22～28㎝、下幅7～14㎝で、深さは10㎝前後である。埋土は、にぶい黄褐色土を斑状に含む灰黄褐色土である。

【出土遺物】土師器坏（Ｂ類）・甕（Ａ類、Ｂ類）、須恵器坏（Ｉ類）・甕が出土している。

ＳＢ1789掘立柱建物跡（第３・10・11図）

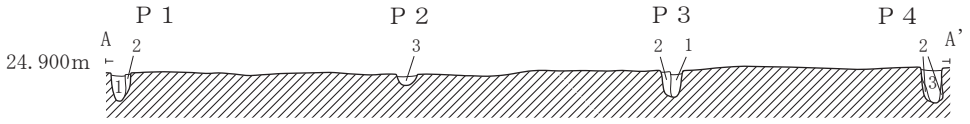
【位置】調査区中央部の北壁寄りで発見した。



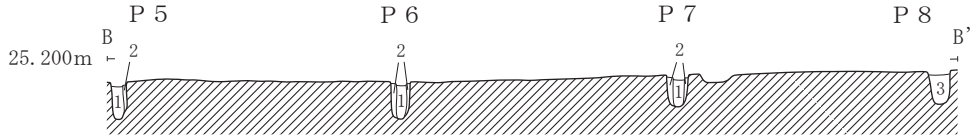
第10図　ＳＢ1789建物跡・ＳＡ1790柱列平面図

ＳＢ1789

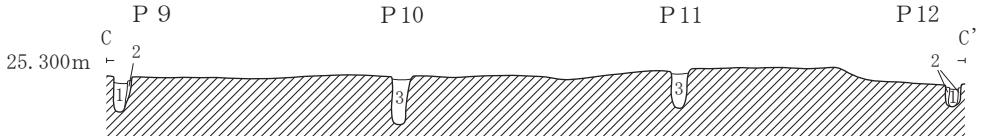
北側柱列



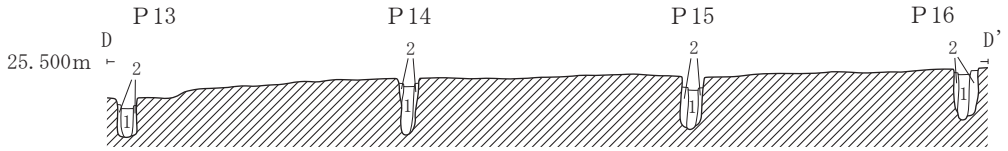
北から１間目柱列



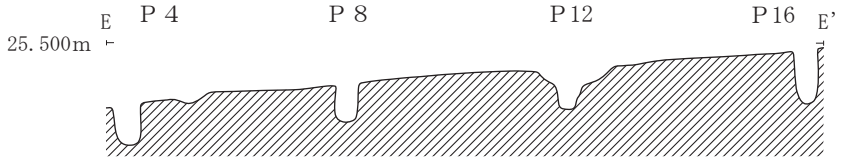
北から２間目柱列



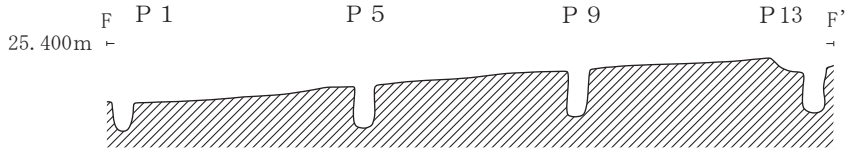
南側柱列



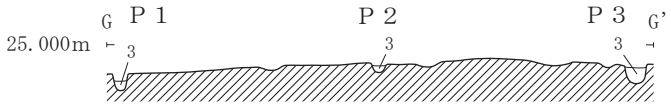
東側柱列



西側柱列



ＳＡ1790



1：柱痕跡
2：柱抜取り穴
3：掘　方

0　2m
S=1/80

第11図　ＳＢ1789建物跡・ＳＡ1790柱列断面図

【桁行・梁行】桁行３間、梁行３間の東西棟建物跡である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は16基（Ｐ１～16）検出しており、そのうち、Ｐ１・３・５～７・９・12～16の11基で柱痕跡、Ｐ２・４・８・10・11の５基で柱抜取り穴を確認した。

【重複】Ｐ７がＳＤ1795溝跡と重複しており、それより新しい。

【方向】方向は北側柱列でみると、東で約７度南に偏している。

【規模】各柱列の柱間の長さと総長は、以下のとおりである。

桁行

北側柱列：柱間は西から3.00m、2.85m、2.70mで、総長8.55m。

北から１間目柱列：柱間は西から2.95m、2.95m、2.75mで、総長8.65m。

北から２間目柱列：柱間は西から2.95m、2.95m、2.85mで、総長8.75m。

南側柱列：柱間は西から2.90m、3.00m、2.85mで、総長8.75m。

梁行

西側柱列：柱間は北から2.55m、2.30m、2.50mで、総長7.35m。

東側柱列：柱間は北から2.35m、2.40m、2.40mで、総長7.15m。

【掘方】平面形はすべて円形である。規模については、直径18～25㎝であり、そのうち22～25㎝のものが多い。深さはＰ２とＰ３が浅く12㎝と28㎝であり、それ以外のものは34～42㎝と50～60㎝の２つのまとまりに分けられる。埋土は褐灰色土で、褐色土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。

【柱抜取り穴】掘方の側壁を壊すほど大きな抜取り穴はみられない。また、柱のあたり痕跡はＰ４のみで確認した。埋土は黒褐色土で、にぶい黄褐色土を斑状に多く含んでいる。

【遺物】Ｐ１から土師器甕（Ｂ類）の破片が１点出土している。

ＳＡ1790柱列（第３・10・11図）

【位置】調査区中央部の北壁沿いで発見した。

【桁行・梁行】東西２間以上の柱列である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は３基（Ｐ１～３）検出した。いずれも柱痕跡が認められず、柱の抜き取りがあったものと考えられる。

【重複】Ｐ３がＳＤ1794溝跡と重複し、それより新しい。

【方向】方向は、東で約７度南に偏している。

【規模】柱間は、東から2.70m、2.70mである。

【掘方】平面形は円形である。規模は直径18～24㎝で、深さは10～20㎝である。

【柱抜取り穴】Ｐ１の規模が他の２基に比べ大きいことから、掘方の側壁を壊して柱の抜き取りが行われた可能性がある。埋土は黒褐色土で、にぶい黄褐色土を斑状に若干含んでいる。

【遺物】遺物は出土していない。

ＳＤ1792溝跡（第３・12図）

【位置・形態】調査区中央部で発見した南北方向に延びる溝跡である。平面的には、南側でいったん途切れるようにみえるが、掘り下げた結果トンネル状に繋がることを確認した。

【重複】他の遺構との重複はない。

【方向・規模】方向は、北で約５度東に偏する。規模は、長さ4.95m、上幅27～34㎝、深さは10～20

㎝であるが、トンネル状の箇所では一段低くなっている。

【壁・底面】底面は北側では丸みをもち、南側ではやや平坦である。壁は湾曲気味に立ち上がる。

【埋土】北側では２層に分けられる。１層は灰黄褐色土で、黄褐色土を斑状に若干含んでいる。２層は黒褐色土で、黄褐色土を斑状に含んでいる。一方、南側は黒褐色土の単層である。

【遺物】遺物は出土していない。

ＳＤ1793溝跡（第３・12図）

【位置・形態】調査区西半部の北側で発見した。南北方向にやや蛇行しながら延びる溝跡で、北側は調査区外にかかる。

【重複】ＳＩ1787住居跡と重複し、それより新しい。

【方向・規模】方向は、やや直線的になる南側でみると、北で約15度東に偏する。規模は、長さ8.4m以上、上幅26 ～ 42㎝、深さは15 ～ 24㎝である。

【壁・底面】底面は丸みをもち、壁は湾曲気味にやや急角度で立ち上がる。

【埋土】にぶい黄褐色土の単層で、黒褐色土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。

【遺物】土師器甕（Ｂ類）、須恵器甕が出土している。

ＳＤ1794溝跡（第３図）

【位置･形態】調査区中央部の北壁際で発見した南北方向に延びる溝跡で､北側と西側は調査区外にかかる。

【重複】ＳＡ1790柱列のＰ３と重複し、それより古い。

【方向・規模】方向は、東で約８度南に偏する。規模は、長さ2.7mまで確認した。上幅は42㎝で、西側で広がる様相をみせる。深さは約10㎝である。

【壁・底面】底面はやや平坦で、壁は湾曲気味に緩やかに立ち上がる。

【埋土】灰黄褐色土の単層で、にぶい黄褐色土を斑状に含んでいる。

【遺物】遺物は出土していない。

ＳＤ1795溝跡（第３・12図）

【位置・形態】調査区中央部の北側で発見した溝跡で、やや弧を描くように東西方向に斜行する。

【重複】ＳＢ1789建物跡のＰ７と重複し、それより古い。

【方向・規模】方向は、東半部でみると東で約12度北に偏し、西半部でみると東で約26度北に偏する。規模は、長さ7.2m、上幅25 ～ 42㎝、深さは５㎝前後である。

【壁・底面】底面は丸みをもち、壁は湾曲気味に緩やかに立ち上がる。

【埋土】灰黄褐色土の単層で、にぶい黄褐色土を斑状に若干含んでいる。

【遺物】須恵器甕が出土している。

ＳＤ1796溝跡（第３・12図）

【位置・形態】調査区中央部の北壁際で発見した溝跡である。東半部は東西方向の溝状を呈するが。北壁際の西半部では土壙状に広がり調査区外に至る。

【重複】他の遺構との重複はない。

【方向・規模】方向は、東半部でみると東で約15度南に偏する。規模は、長さ4.8mまで確認した。上幅は東半部で40 ～ 55㎝、西半部で125㎝以上である。深さは12 ～ 18㎝を測る。

【壁・底面】底面は、西半部ではやや平坦で中央付近が溝状に窪んでいる。東半部では丸みをもち、壁

は湾曲気味に緩やかに立ち上がる。

【埋土】西半部では２層に分けられる。１層は灰黄褐色土で、にぶい黄褐色土を斑状に含んでいる。２層は灰黄褐色土で、にぶい黄褐色土を斑状及び小ブロックに多く含んでいる。

【遺物】土師器坏（Ｂ類）・甕（Ｂ類）、須恵器坏・甕・瓶、須恵系土器坏、丸・平瓦が出土している。

ＳＤ1797溝跡（第３・12図）

【位置・形態】調査区東半部で発見した溝跡で、蛇行しながら東西方向に斜行する。また、西側ではＳＤ1796溝跡の東端部に接続するような様相をみせる。

【重複】他の遺構との重複はない。

【方向・規模】方向は、北西部が東で約40度南に、中央部が東で約60度南に、南東部が東で約20度南に偏する。規模は、長さ21m以上、上幅28 ～ 52㎝、深さは10㎝前後である。

【壁・底面】底面は丸みをもち、壁は湾曲気味に緩やかに立ち上がる。

【埋土】灰黄褐色土の単層で、にぶい黄褐色土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。

【遺物】遺物は出土していない。

ＳＤ1798・1799・1800・1802・1803溝跡（第３・４・12図）

【位置・形態】調査区中央部の北壁際で発見した南北方向に斜行する５条の小溝跡である。東西約15mの範囲内で確認した同方向及び同規模のものである。ＳＤ1802溝跡以外は北側が調査区外にかかっている。

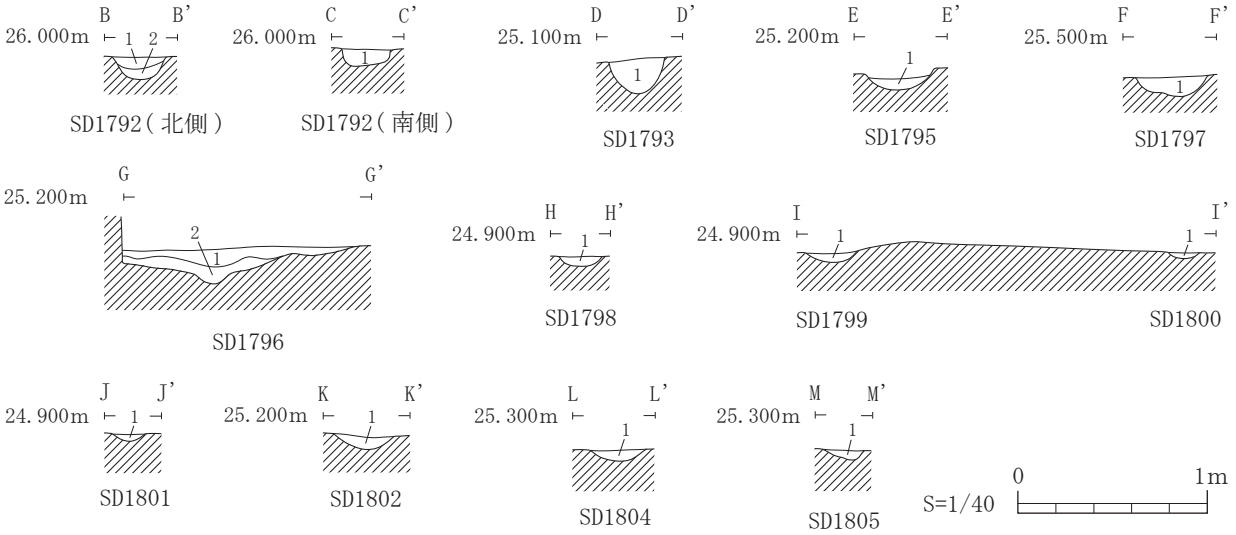
【重複】ＳＤ1800溝跡が、ＳＤ1801溝跡と重複し、それより新しい。

【方向・規模】方向は、西端のＳＤ1798溝跡が、北で東に偏する角度が約９度となる以外は、角度が21 ～ 25度の範囲内に収まる。全体的にみた規模は、長さ85㎝以上、上幅20 ～ 32㎝、深さは５㎝前後である。

【壁・底面】いずれも、底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】いずれの埋土も灰黄褐色土の単層で、にぶい黄褐色土を斑状に含んでいる。

【遺物】遺物は出土していない。



第12図　Ⅰ区各溝跡断面図

ＳＤ1801溝跡（第３・12図）

【位置・形態】調査区中央部の北壁際で発見した小溝跡で、やや弧を描くように東西方向に斜行する。北側が調査区外にかかっている。

【重複】ＳＤ1800溝跡と重複し、それより古い。

【方向・規模】方向は、直線的に延びる東側でみると東で約30度南に偏する。規模は、長さ1.6m以上、上幅20～22㎝、深さは約４㎝である。

【壁・底面】底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】灰黄褐色土の単層で、にぶい黄褐色土を斑状に含んでいる。

【遺物】遺物は出土していない。

ＳＤ1804・1805溝跡（第３・12図）

【位置・形態】調査区東側の北壁際で発見した近接する２条の小溝跡である。南北方向に斜行する同規模のもので、いずれも北側が調査区外にかかっている

【重複】他の遺構との重複はない。

【方向・規模】方向は、ＳＤ1804溝跡は北で約12度西に偏する。規模は、長さ68㎝以上、上幅25～35㎝、深さは約６㎝である。一方、ＳＤ1805溝跡は北で約21度西に偏する。規模は、長さ88㎝以上、上幅20～22㎝、深さは約５㎝である。

【壁・底面】いずれも、底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】いずれの埋土も灰黄褐色土の単層で、にぶい黄褐色土を斑状に若干含んでいる。

【遺物】遺物は出土していない。

Ⅱ区

ＳＩ1788竪穴住居跡

２時期の変遷（Ａ→Ｂ）が確認できる。同位置で建て替えられているが、Ｂ期で北側と東側に拡幅されていることが確認できる。

ＳＩ1788Ａ竪穴住居跡（第13・14図）

【位置】調査区西側中央部で発見した竪穴住居跡である。

【残存状態】現代の掘削と後続するＢ期によって大部分が失われており、周溝と貼床を確認しただけである。南側が調査区外にかかる。

【重複】他の遺構との重複はない。

【平面形・方向】平面形は方形と推定される。方向は北辺でみると東で約21度南に偏している。

【規模】周溝の位置から推定すると、東西が2.95m、南北が３m以上である。

【埋土】埋土は残存していない。

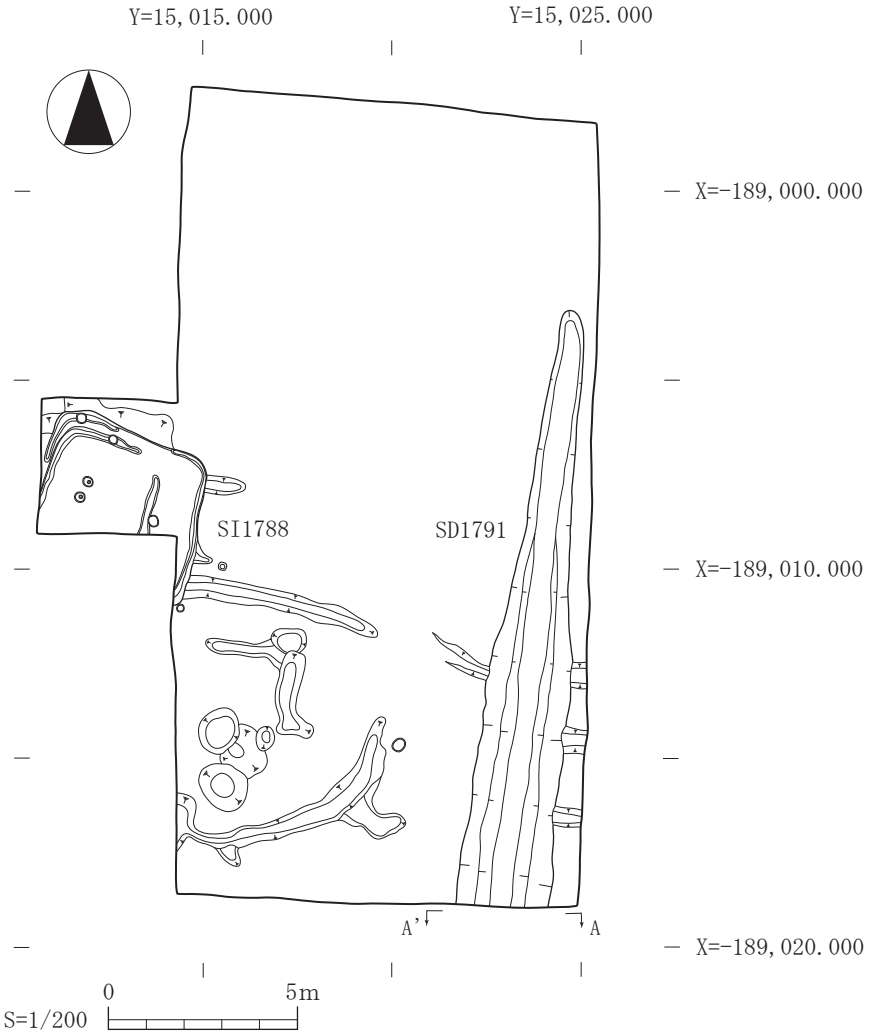
【床面の状態】ほぼ全面に貼床されている。黄褐色土からなり、厚さは５㎝前後である。

【壁の状態】壁は残存していない。

【柱穴】柱穴は確認されない。

【カマド】カマドは残存していない。

【周溝】北辺、東辺、西辺で確認した。北東隅で途切れているが、削平によるものと推定される。上幅15～26㎝、下幅8～16㎝、深さは５～12㎝である。西辺で外側に大きく抉り込むようにつくられてい



第13図　Ⅱ区全体図

ることを確認した。

【出土遺物】中央部の貼床土中に、ほぼ完形の須恵器坏（Ⅱａ類　第15図２）が伏せた状態で埋められていることを確認した。

ＳＩ1788Ｂ竪穴住居跡（第13・14図）

【位置】調査区西側中央部で発見した竪穴住居跡である。北西部が調査区外にかかる。

【残存状態】現代の掘削が床面近くにまで及んでいるため、残存状態は良くない。

【重複】他の遺構との重複はない。

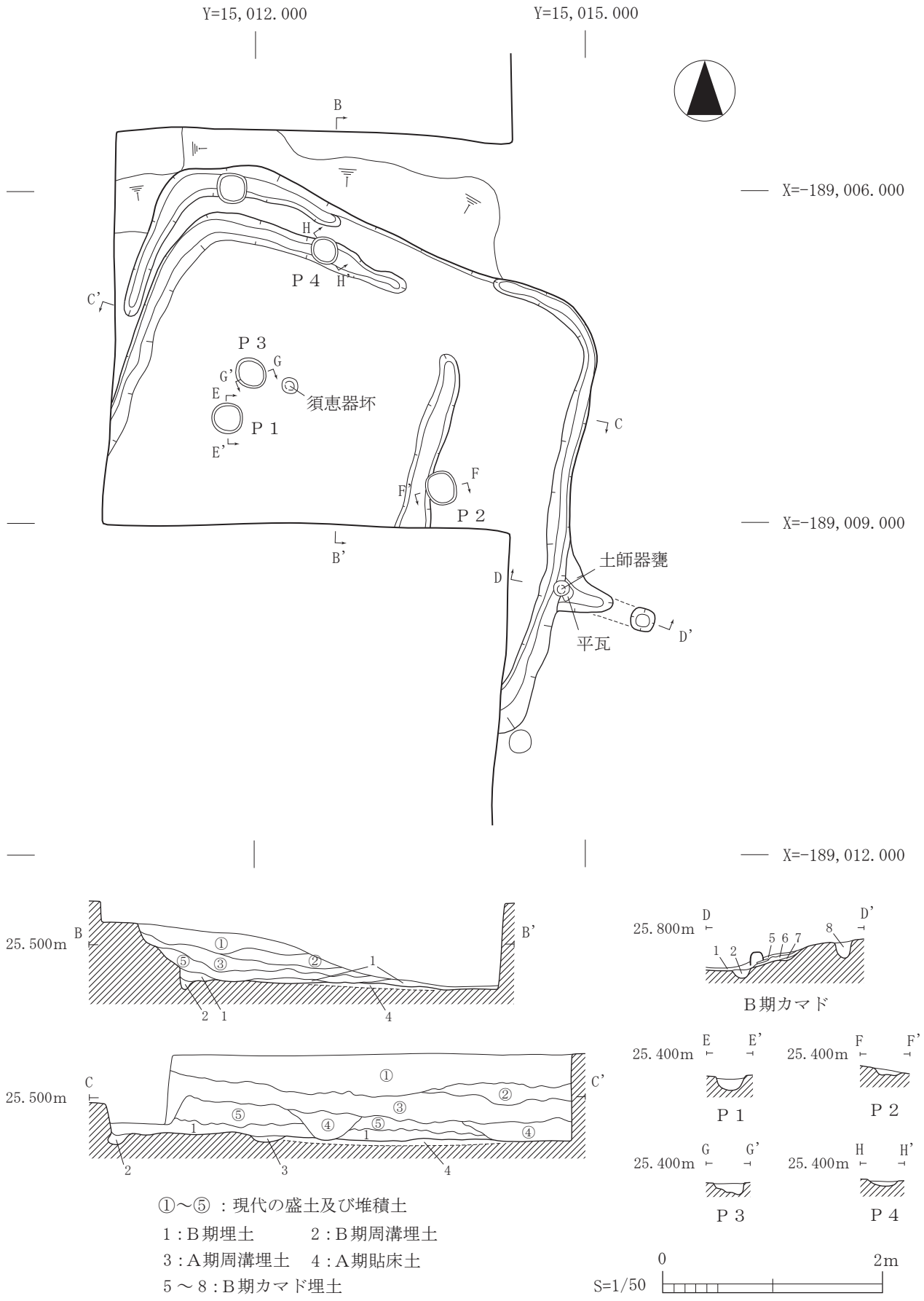
【平面形・方向】平面形は方形である。方向は北辺でみると東で約21度南に偏している。

【規模】北辺が4.25m、東辺が約3.9mである。

【埋土】下層の埋土が残存している。厚さは10㎝以上である。にぶい黄褐色土で、黄褐色土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。

【床面の状態】Ａ期の貼床を床面としている。拡幅部では貼床は確認されなかった。

【壁の状態】残存する北辺と東辺でみると、ほぼ垂直に立ち上がる。



第14図　ＳＩ1788住居跡実測図

【柱穴】柱穴は確認されない。ただし、床面で４基のピット（Ｐ１～４）を確認しており、そのうちＰ１とＰ２は中央部で東西に一列に並ぶものである。埋土は、にぶい黄褐色土の単層で、柱痕跡は認められない。

【カマド】東辺中央のやや南寄りに布設されている。上部が大きく削平されており、燃焼部の側壁などは残存していない。ただし、煙道が取り付く箇所で、東辺周溝の外側にやや広いスペースが設けられ、そこで平瓦の破片が敷かれた上に、土師器甕（第15図１）の下半部が伏せた状態で置かれていることを確認した。このことから、カマド本体が外側に張り出す形態のもので、土師器甕は支脚とした利用されていたと推定される。煙道も削平を受けているが、煙出し穴の下部のくぼみの位置により、長さは約70㎝と推定される。

【周溝】北辺、東辺、西辺で確認した。北辺においては、中央部で約1.4mにわたって途切れている。また、西辺の南側でも途切れる箇所があるか、これが削平によるものかどうかは判然としなかった。上幅は14～22㎝、下幅5～10㎝、深さは約10㎝である。埋土はにぶい黄褐色土で、黄褐色土を小ブロック状に含んでいる。

【出土遺物】土師器坏（Ｂ類）・甕（Ａ類、Ｂ類）、須恵器坏（Ｉ類、Ⅱａ類）・甕、丸瓦（ＩＡ類-ａ、ⅡＢ類-ａ）が出土している。

単位：㎝

番号	種　類	遺　構	層位	特　徴		口　径 残存率	底　径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備　　考
				外　　面	内　　面						
1	土師器・甕	ＳＩ1788B	カマド内	摩滅のため不明	摩滅のため不明	―	7.6 24/24	―	7-1	R7	
2	須恵器・坏	ＳＩ1788A	貼床	ロクロナデ　底部：ヘラ切り→手持ヘラケズリ	ロクロナデ	13.1 23/24	8.1 24/24	3.7	7-2	R8	

第15図　ＳＩ1788出土遺物

ＳＤ1791溝跡（第13・16図）

【位置・形態】調査区東半部で発見した南北方向に直線的に延びる溝跡である。南側は調査区外にかかっている。また、北側は調査区内で途切れるが、これは後世の削平によるもので、本来はさらに北側に延びていたと考えられる。

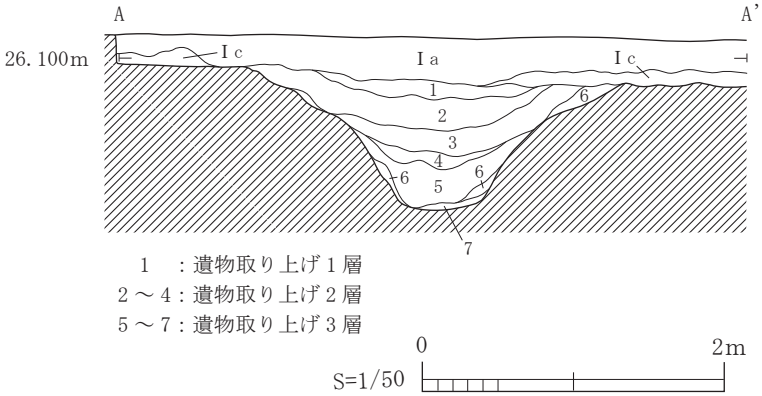
【重複】他の遺構との重複はない。

【方向・規模】方向は、北で約７度東に偏する。規模は、長さ16m以上で、上幅2.2～2.5m、下幅0.5～0.6mである。深さは、調査区南側の断面観察では0.95mを測る。

【壁・底面】底面はやや平坦で、断面形は逆台形状を呈する。壁は底面から直線的に立ち上がり、中頃で緩やかな段を有し、その上方はやや開き気味に立ち上がる。

【埋土】７層に分けられる。１～４層は、にぶい黄褐色土を基調としている。1層は、暗褐色土や褐灰色土を多く混入しており、下層に比べしまりがやや弱い。２層は、黄褐色土と褐灰色土を斑状及びブロック状に含んでいる。３・４層は、やや粘性が強く、黄褐色土を斑状及びブロック状に含んでいる。５・６層は、褐灰色粘質土を基調として、黄褐色土を斑状及びブロック状に含んでいる。７層は、明黄褐色粘質土で、黄褐色土をブロック状に含んでいる。

【遺物】土師器坏（ＢＶ類）・高台付坏・甕（Ｂ類）、須恵器坏（Ⅱａ類、Ⅲ類、Ⅳ類）・蓋・甕・瓶、丸瓦（ＩＡ類-ａ、ⅡＢ類-ａ）、平瓦（ＩＡ類、ⅡＡ類、ⅡＢ類）が出土している。



第16図　ＳＤ1791溝跡断面図

３　まとめ

今回の調査で発見した遺構は、竪穴住居跡３軒、掘立柱建物跡１棟、柱列１条、溝跡15条、小柱穴多数である。以下、年代を中心とした遺構ごとの概要をまとめることにする。

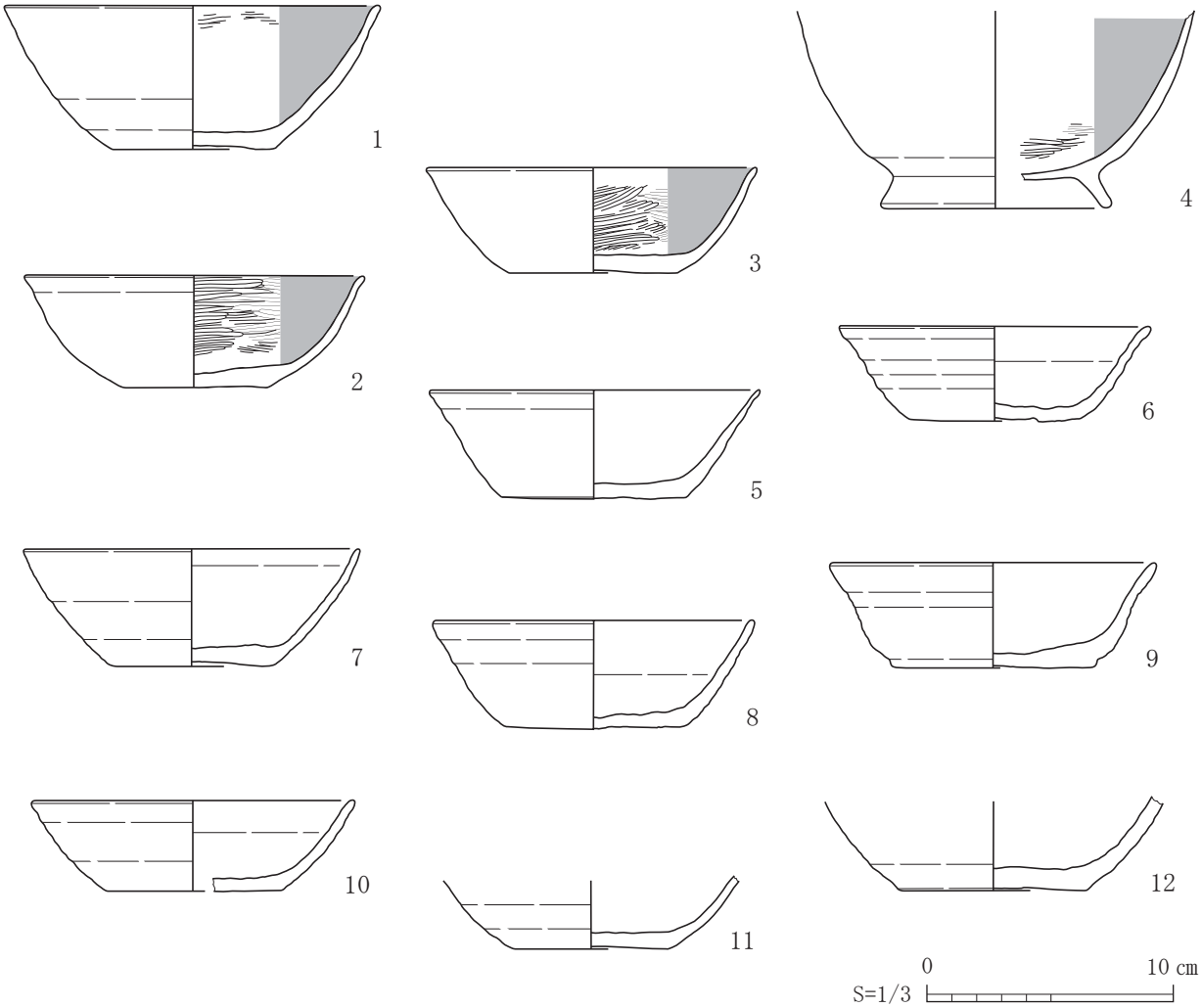
１　竪穴住居跡

竪穴住居跡には、Ⅰ区で発見したＳＩ1786住居跡とＳＩ1787住居跡、Ⅱ区で発見したＳＩ1788住居跡があるが、いずれも出土遺物が僅少なうえ、破片が大部分を占めるため、詳細な年代を導き出すことはむずかしい。したがって、ここでは大まかな年代を提示するだけにとどまる。

はじめに、ＳＩ1786住居跡をみると、Ａ期の住居内溝の埋土から内面にロクロ回転によるハケメが施された土師器甕が出土している。これについては、近年の市川橋遺跡（註３）などの多賀城跡周辺遺跡の発掘調査において同様の土師器甕が出土しており、８世紀末から９世紀代のものと推定されている。このほか手掛かりとして、住居跡のＡ・Ｂ両期を通じて出土する土師器は非ロクロ調整（Ａ類）とロクロ調整（Ｂ類）のものが混在すること。また、出土遺物の中で底部の切り離し・調整技法がわかる須恵器坏２点が、いずれも再調整を施していることがあげられる。これらのことから、ＳＩ1786住居跡Ａ・Ｂ期は、ロクロ土師器が普及し始める８世紀後葉を上限年代とし、そこから大きく下らない９世紀前葉にかけての変遷であると考えられる。なお、カマド下部の暗渠状施設に用いられている５点の丸瓦は、多賀城跡政庁の分類基準によれば、すべてⅡＢ類-ａに含まれるもので、多賀城政庁Ⅱ期に該当する。

つぎに、北側に近接するＳＩ1787住居跡をみると、この場合も出土する土師器は非ロクロ調整（Ａ類）とロクロ調整（Ｂ類）のものが混在すること。また、出土した須恵器坏が再調整されたものであることから、大きく捉えて８世紀後葉から９世紀前葉のものと推定される。

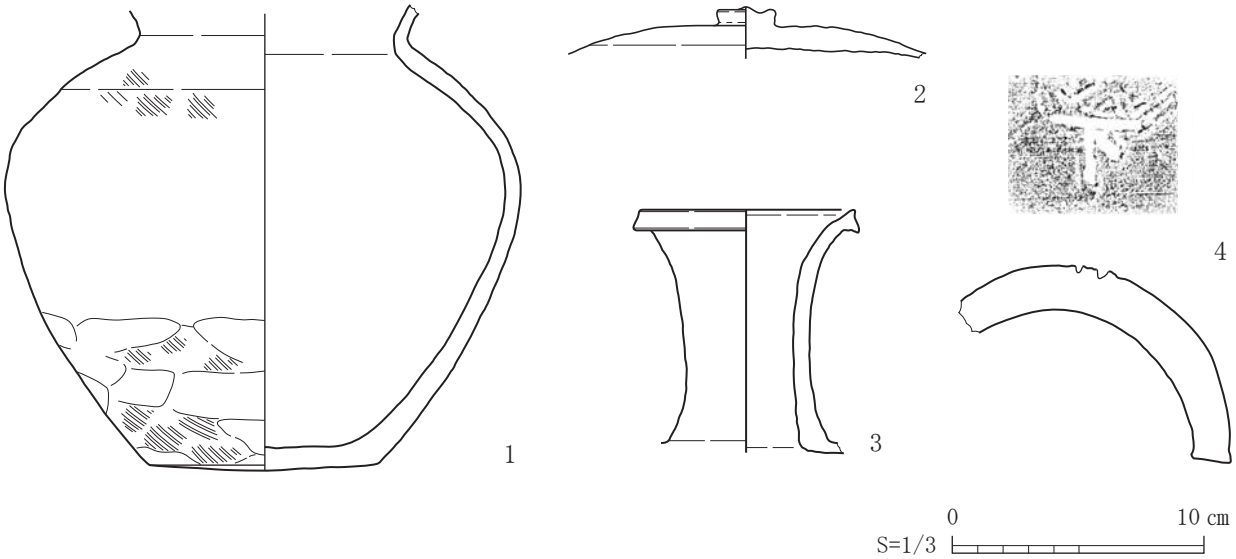
Ⅱ区で発見したＳＩ1788住居跡については、Ａ期貼床からほぼ完形の須恵器坏が出土している。これは、８世紀代にみられる口径と底経の差が少なく、器高が低い扁平なつくりのもので、底部はヘラ切りの後、再調整として手持ちヘラケズリされているものである（Ⅱａ類）。ただし、再調整は底部周縁に簡易的に



単位：cm

番号	種　類	遺　構	層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備　考
1	土師器・坏	SD1791	2 層	ロクロナデ 底部：摩滅のため不明	ヘラミガキ ・黒色処理	15.0 5/24	6.5 24/24	5.8	7-3	R15	
2	土師器・坏	SD1791	2 層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ ・黒色処理	13.6 3/24	5.8 24/24	4.6	—	R18	
3	土師器・坏	SD1791	2 層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ ・黒色処理	13.2 6/24	6.7 24/24	4.2	7-4	R17	
4	土師器・ 高台付坏	SD1791	2 層	ロクロナデ	ヘラミガキ ・黒色処理	—	9.2 11/24	—	—	R19	
5	須恵器・坏	SD1791	2 層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	13.2 2/24	7.4 24/24	4.4	—	R16	
6	須恵器・坏	SD1791	2 層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	12.6 7/24	6.9 19/24	3.9	7-5	R21	
7	須恵器・坏	SD1791	2 層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	13.4 5/24	6.4 24/24	4.8	7-6	R23	
8	須恵器・坏	SD1791	2 層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	12.9 7/24	7.3 11/24	4.5	7-7	R24	
9	須恵器・坏	SD1791	2 層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	13.0 4/24	8.0 24/24	4.3	—	R25	
10	須恵器・坏	SD1791	2 層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	12.9 10/24	7.1 9/24	4.7	—	R26	
11	須恵器・坏	SD1791	2 層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	—	6.2 20/24	—	—	R20	
12	須恵器・坏	SD1791	1 層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	—	7.5 21/24	—	—	R22	

第17図　ＳＤ1791出土遺物１



単位：cm

番号	種　類	遺　構	層位	特徴 外面	特徴 内面	口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備　考
1	須恵器・甕	SD1791	2 層	ロクロナデ　体部下半：平行叩き→ヘラケズリ	ロクロナデ	－	8.8 24/24	－	7-9	R27	
2	須恵器・蓋	SD1791	2 層	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	7-8	R29	
3	須恵器・瓶	SD1791	2 層	ロクロナデ	ロクロナデ	8.6 16/24	－	－	－	R28	
4	丸　瓦	SD1791	1 層	縄叩き→ナデ	布目	－	－	－	7-10	R31	「下」のヘラ描

第18図　ＳＤ1791出土遺物２

施されているにすぎない。このことから、８世紀代でも時期が下るものと推定される。このほか、Ａ・Ｂ両期を通じて、出土する土師器は非ロクロ調整（Ａ類）とロクロ調整（Ｂ類）のものが混在すること。土師器と須恵器の坏類に再調整されないものが出土しないことから、ＳＩ1788住居跡Ａ・Ｂ期は、８世紀後葉から９世紀前葉にかけての変遷であると考えられる。

２　掘立柱建物跡・柱列

掘立柱建物跡には、Ｉ区で発見したＳＢ1789建物跡がある。これは東西8.55～8.75m（３間）、南北7.15～7.35m（３間）の規模の大きな東西棟建物である。いわゆる総柱建物であるが、出土遺物がほとんどないことや他に関連する遺構がほとんどないことから、性格については現時点では言及できない。年代は、古代のものと考えられるＳＤ1795溝跡と重複しそれより新しいこと、周辺で発見されている中世の建物跡と柱穴の形態や規模が類似することから、中世のものと考えられる。

ＳＡ1790柱列は、この北側約１mに位置し、東西方向に延びるものである。ＳＢ1789建物跡と方向を同じくし、柱筋を揃えている。したがって、ＳＢ1789建物跡に関連する可能性が考えられる。

なお、中世のものと考えられる遺構では、本調査区の西側隣接地において石組みの井戸跡が発見されている（註４）。

３　溝跡

溝跡のうち、Ⅱ区で発見したＳＤ1791溝跡は、南北方向に延びる規模の大きな溝跡である。第43次調査（註２）で確認した長さを合わせると、約32mにわたって検出したことになる。遺物は、埋土中頃の２～４層

から多く出土している。このうち、須恵器坏をみると、ロクロからの切り離しがヘラ切りで再調整されないもの（Ⅲ類）が主体を占め、切り離しが回転糸切りで再調整されないもの（Ⅴ類）がこれに次ぐ。両者の割合は、３：１である。また、底径/口径比が0.55で、９世紀中葉頃とされる多賀城跡ＳＫ2167土壙出土土器（註５）のあり方と類似する。したがって、ＳＤ1791溝跡は９世紀中葉頃に位置付けられると考えられる。

次に、Ｉ区においてＳＩ1786住居跡の東側に近接して発見したＳＤ1792溝跡は、約５ｍの長さで南北方向に延びる溝跡である。平面的にみると、南側でいったん途切れるようにみえるが、掘り下げた結果トンネル状に繋がることを確認した。この箇所の形態は、竪穴住居跡の外延溝の取り付き部のあり方に類似する。ただし、南側で住居跡本体の痕跡が確認されず、さらにトンネル部の底面が北側の溝部の底面より一段深くなっており排水の役割を果たせないことから、途中で構築作業をやめたものと推定される。年代について、ＳＩ1786住居跡の外延溝のあり方に類似することから、それに近い可能性が考えられる。

このほか、Ｉ区において発見した溝跡については、ＳＤ1793溝跡は、ＳＩ1787住居跡と重複しそれより新しいことから９世紀以降の時期と考えられる。また、調査区北壁際で発見したＳＤ1796溝跡からは須恵系土器が出土していることから、一連のものとみられるＳＤ1797溝跡とともに10世紀以降の時期と考えられる。さらに、調査区北壁際で発見した各小溝跡も、ＳＤ1796溝跡と埋土が非常に類似することから、この時期のものである可能性が考えられる。

（註１）　多賀城市教育委員会　『多賀城市内の遺跡２－平成27年度調査成果－』多賀城市文化財調査報告書第127集　2016

（註２）　多賀城市教育委員会　『市川橋遺跡ほか－市川橋遺跡第47次調査・高崎遺跡第43次調査・八幡沖遺跡第４次調査－』　多賀城市文化財調査報告書第80集　2005

（註３）　多賀城市教育委員会　『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－』　多賀城市文化財調査報告書第70集　2003

（註４）　多賀城市教育委員会　『多賀城市内の遺跡２－平成26年度調査成果－』多賀城市文化財調査報告書第119集　2015

（註５）　宮城県多賀城跡調査研究所　『多賀城跡』　宮城県多賀城跡調査研究所年報1992　1993

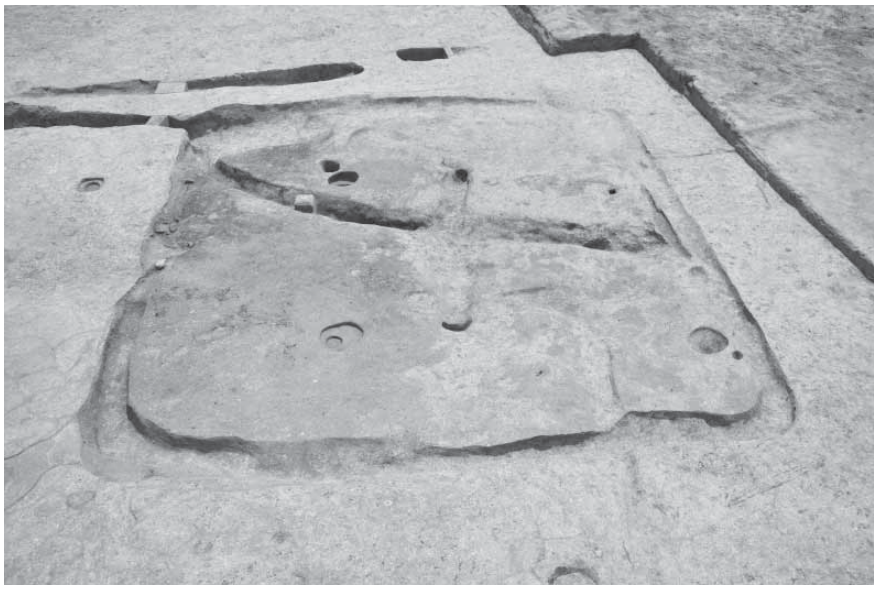
Ⅰ区全景
（東より）

Ⅰ区全景
（西より）

Ⅱ区全景
（南より）

写真図版１

ＳＩ1786住居跡
検出状況（南より）



ＳＩ1786Ｂ住居跡
掘り下げ状況（西より）

ＳＩ1786Ａ住居跡
掘り下げ状況（西より）

写真図版２

ＳＩ1787住居跡
検出状況（西より）

ＳＩ1787住居跡
掘り下げ状況（西より）

ＳＩ1787住居跡
掘り下げ状況（北より）

写真図版３

ＳＢ1789建物跡等
検出状況（西より）

ＳＢ 1789 建物跡
掘り下げ状況（南より）

ＳＩ1788住居跡
掘り下げ状況（南より）

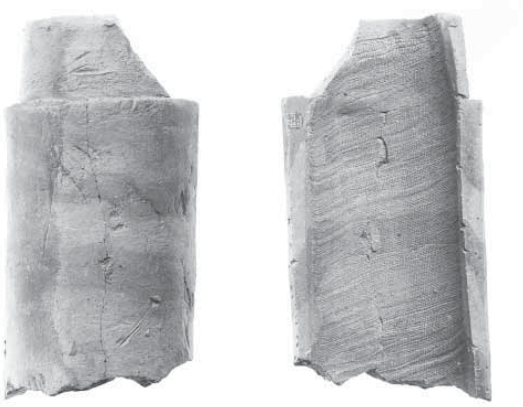
写真図版４

ＳＩ 1788 住居跡
掘り下げ状況（北より）

ＳＤ1791溝跡
掘り下げ状況（南より）

ＳＤ 1791 溝跡
掘り下げ状況（北より）

写真図版５



1　**丸瓦**（第６図１）

2　**丸瓦**（第６図２）

3　**丸瓦**（第６図３）

4　**丸瓦**（第６図４）

写真図版６（ＳＩ1786出土遺物）

1　土師器甕（第15図１）

2　須恵器坏（第15図２）

3　土師器坏（第17図１）

4　土師器坏（第17図３）

5　須恵器坏（第17図６）

6　須恵器坏（第17図７）

7　須恵器坏（第17図８）

8　須恵器蓋（第18図２）

9　須恵器甕（第18図１）

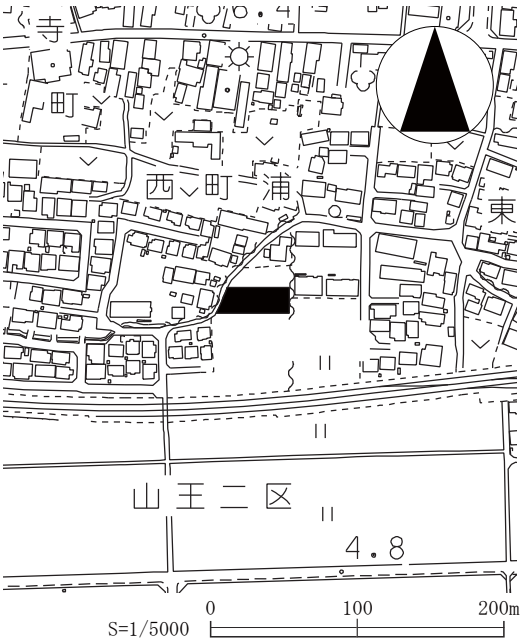
10　丸瓦（第18図４）

写真図版７（ＳＩ1788、ＳＤ1791出土遺物）

Ⅲ　山王遺跡第150次調査

１　調査に至る経緯と経過

本件は、山王字掃下しにおける集合住宅新築工事に伴うものである。平成27年３月に、地権者より山王遺跡の西部に位置する当該地での集合住宅新築工事と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、地盤改良工事として現地表より１ｍの深さで掘削を行なった後、住宅部の基礎工事として最大径350ｍｍ、長さ9.50ｍのパイルを113本打ち込むことから、遺跡への影響が懸念された。これを受け、遺跡保存のための協議を行ったが、工法変更は行わないこととなったため、７月24日に地権者より発掘調査の依頼と承諾の提出を受けて、８月18日より現地調査を開始した。



第１図　調査区位置図

重機により現表土より約１ｍ掘り下げたⅢ層上面で、西側において３条の小溝を確認した。８月20日より作業員を動員して精査を開始し、排水施設のための側溝を掘り下げたところ、下層部断面において水田層と思われる灰色粘土層と、畦畔の高まりを確認した。Ⅲ層の調査の後、９月４日より人力によって調査区全面を掘り下げを行った。その結果、Ⅳ層上面で調査区全面で大畦畔を検出した。９月15日より水田耕作面の埋土の掘り下げをおこなったが、小畦畔を発見することはできなかった。９月30日に調査区全面の写真撮影を行った後、平面図の作成を開始した。また、下層の調査のため調査区西側の一部掘り下げたが、水田遺構は発見できなかった。10月３日、予備調査と土壌サンプル採取の後、機材の一切を撤収し、10月９日の重機による埋め戻しをもって、本調査の一切を終了した。

２．調査成果

（１）層序（第２図）

今回の調査では、現在の表土以下９層の堆積を確認した。

Ⅰ－１層：現在の表土・水田耕作土で、厚さは20㎝である。

Ⅰ－２層：褐灰色粘質土の旧水田耕作土で、厚さは10㎝である。

Ⅱ　層：にぶい黄色砂質土が主体ありで、厚さは10～20㎝である。調査区の西側で厚く堆積する。

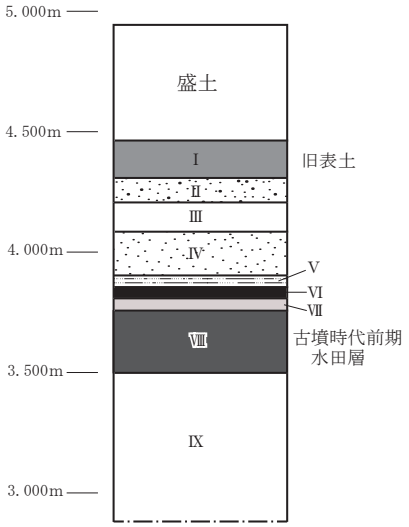
Ⅲ　層：黒色粘質土が主体であり、厚さは10㎝である。

Ⅳ　層：灰色粘質土が主体であり、厚さは15㎝である。

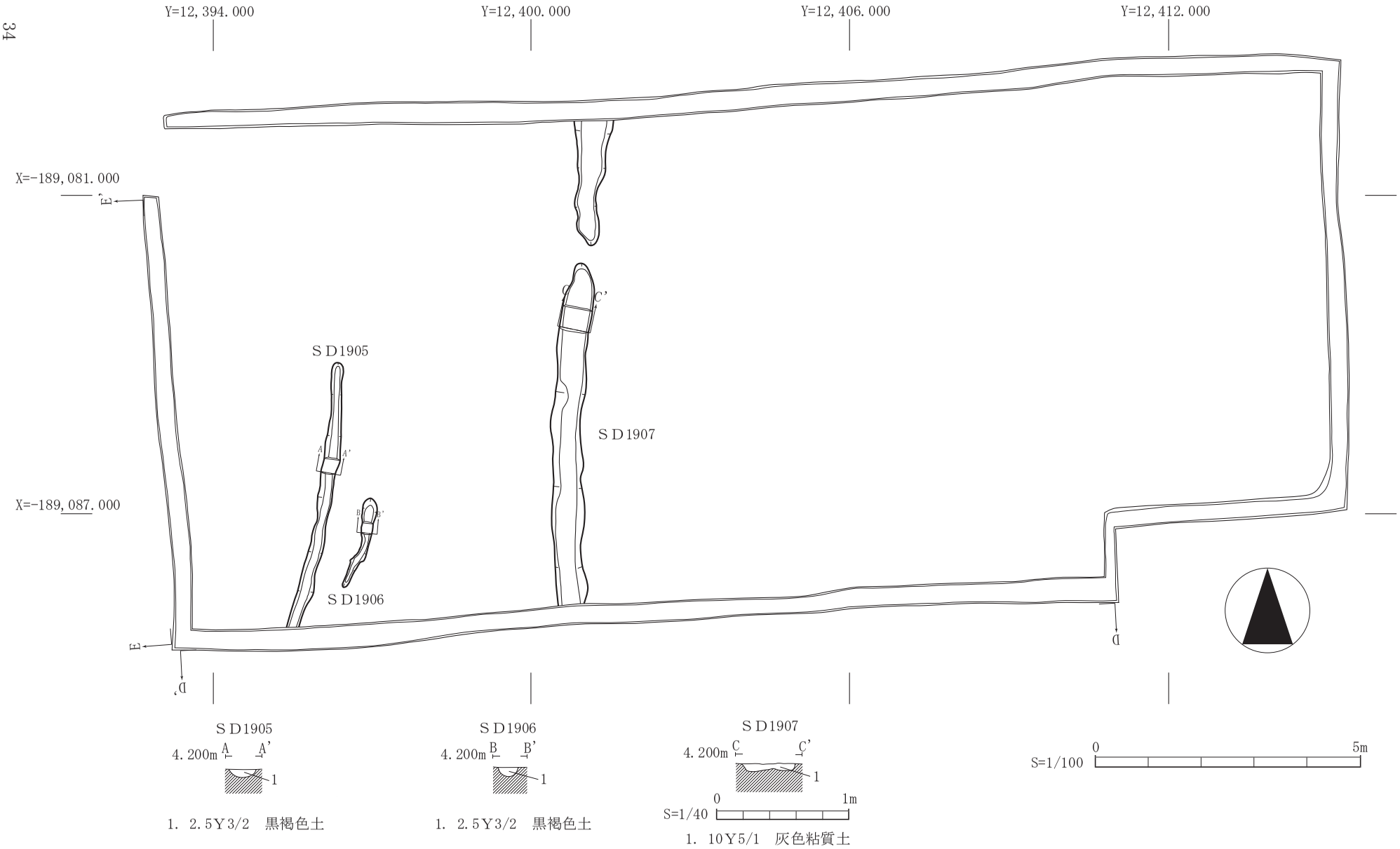
Ⅴ　層：明黄褐色土が主体であり、厚さは５㎝である。

Ⅵ　層：黒色粘土が主体であり、厚さは５㎝である。

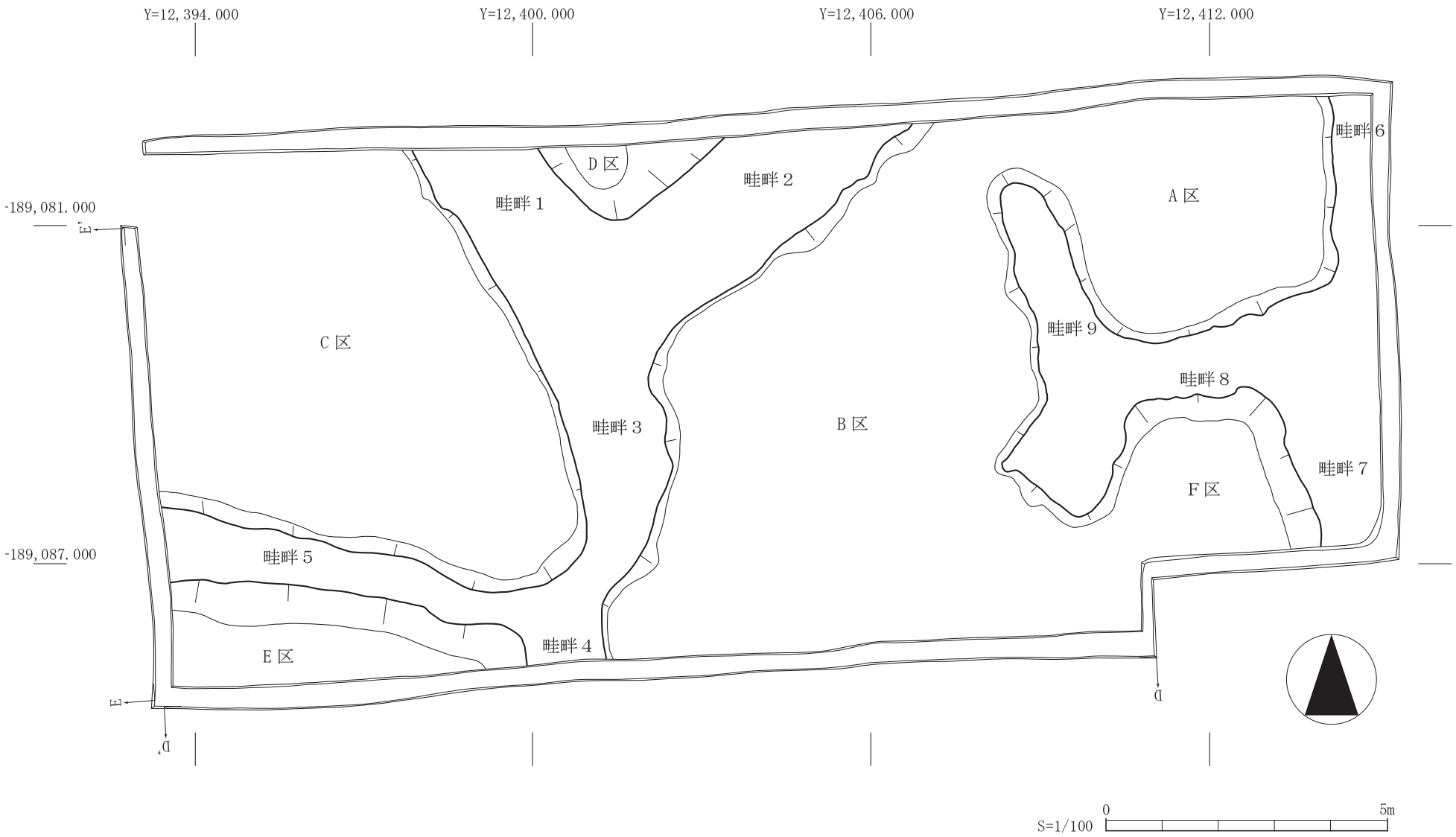
Ⅶ　層：明黄褐色粘土が主体であり、厚さは５㎝である。



第２図　土層模式図



第３図　Ⅲ層検出遺構　平面図・断面図



第４図　Ⅷ層検出 ＳＸ1904平面図

Ⅷ　層：　灰色粘土で、厚さは25㎝である。古墳時代前期の水田層である。畦畔はこの土を積み上げて構築されており、畦畔部で厚さは35㎝になる。

Ⅸ　層：黄橙粘質土で、厚さは約70㎝の地山層である。ほぼ均質だが、深くなるほどグライ化による青みを帯びる。

（２）発見遺構

ＳＸ1904水田跡（第4図）

【位置・形態】畦畔９条、水田５区画を確認した。

【検出面】Ⅷ層が水田層である。

【遺物】出土していない。

【耕作土・畦畔・区画の規模】灰色粘土で、厚さは15 ～ 20㎝である。底面は耕作の痕跡とみられる土層の乱れが顕著である。区画の規模については全体が明らかなものはなく、各区画は不整形である。

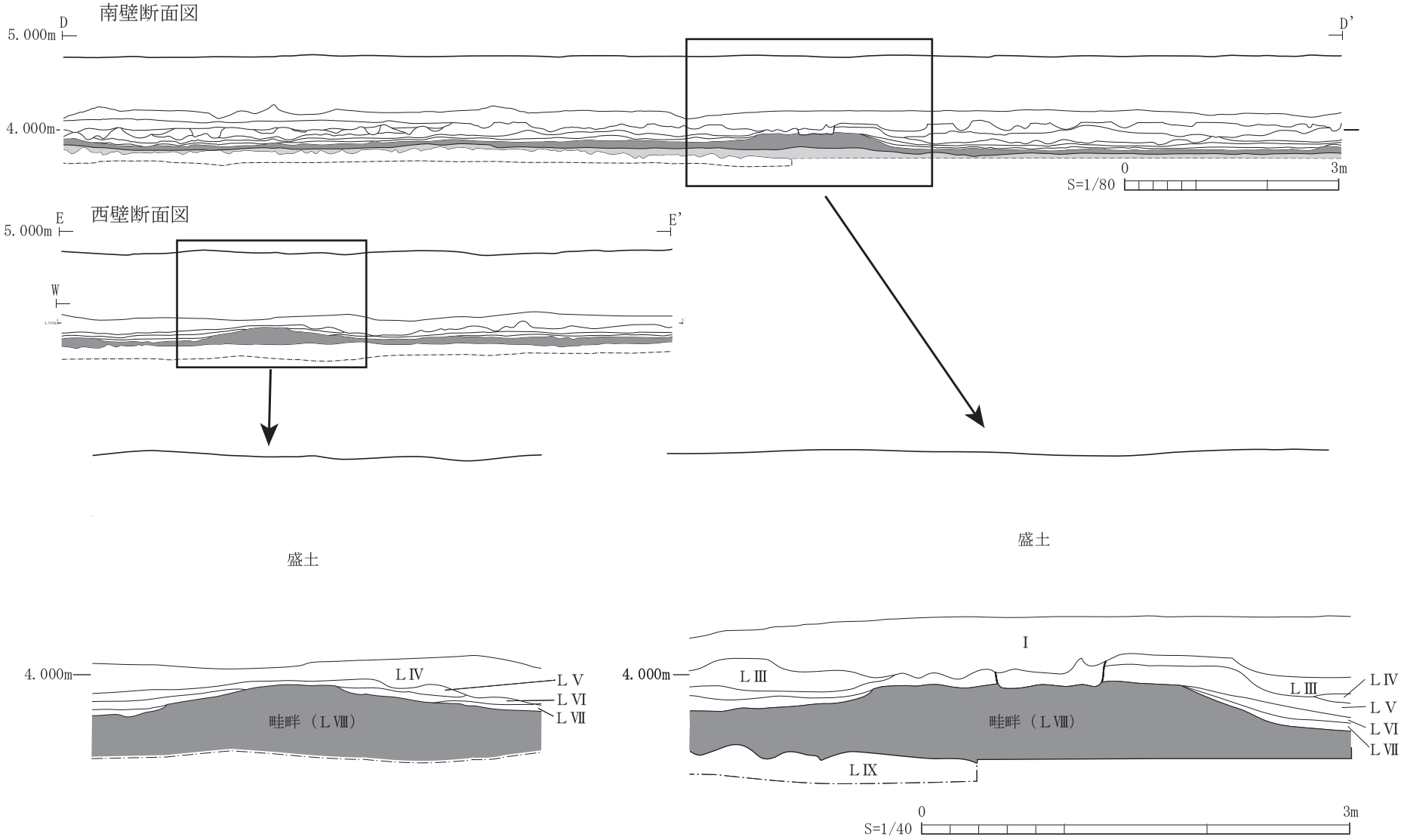
畦畔および水田区画（第４図）の規模ついてまとめると、おおよそ以下の数値になる。

表１　畦畔計測値

番号	検出長	方向	上端幅（m）		下端幅（m）		水田面からの比高差（cm）
			最小	最大	最小	最大	
1	2.5m以上	N-35°　17’-W	1.8	2.3	2.5	2.7	10 ～ 18
2	4.0m以上	N-39°　24’-E	2.0	2.2	2.7	3.2	7 ～ 13
3	5.0m	N-15°　84’-W	0.8	1.8	1.5	2.2	6 ～ 13
4	1.0m以上	N-12°　41’-W	1.9	1.9	2.3	2.5	6 ～ 19
5	7.0m以上	W-10°　51’-N	0.6	1.4	1.4	2.1	9 ～ 18
6	4.0m以上	N-　1°　12’-W	0.6m以上	0.6m以上	0.8m以上	0.8m以上	3 ～ 7
7	3.0m以上	N-17°　40’-W	1.0m以上	1.8m以上	1.8m以上	2.5m以上	1 ～ 2
8	4.0m	E-11°　60’-N	1.0	1.4	1.5	2.0	9 ～ 13
9	6.0m	N-19°　73’-W	1.0	1.7	1.3	2.2	7 ～ 11

表２　区画規模

区画	規模	中央部標高値	プラントオパール
A	東西 5.0m × 南北 4.1m以上	3.87m	4800/g
B	東西 6.0m × 南北 9.2m以上	3.84m	4800/g
C	東西 7.5m以上 × 南北 8.0m以上	3.81m	5400/g
D	東西 3.0m以上 × 南北 1.5m以上	3.81m	未調査
E	東西 6.4m以上 × 南北 2.0m以上	3.71m	未調査
F	東西 4.0m ×南北 2.5m以上	3.83m	未調査


南壁断面図
D
D'
5.000m
4.000m
0
3m
S=1/80
西壁断面図
E
E'
5.000m
W
盛土
盛土
4.000m
LⅣ
LⅤ
LⅥ
LⅦ
畦畔（LⅧ）
I
4.000m
LⅢ
LⅢ
LⅣ
LⅤ
LⅥ
LⅦ
畦畔（LⅧ）
LⅨ
0
3m
S=1/40

第５図　南壁・西壁断面図

３．まとめ

本調査で発見したＳＸ1904は、標高地でみると約４ｍの高さで発見した水田跡である。黒色粘土主体の水田６区画と畦畔９条を検出した。

黒色粘土を主体とする水田層は、本調査区の西側に隣接する山王遺跡第51・57次調査でも確認されている。いずれも標高3.9m前後で（注１）検出しており、出土した遺物から概ね古墳時代前期頃と考えられている。本調査で確認された遺構についても、標高値や層位、土質が近似することから、同じ古墳時代前期頃のものと推定される。

さて、本調査成果の特色のひとつに、検出された畦畔と水田区画の規模の大きさがあげられる（表１・２）。隣接する第51・57次調査の水田遺構をみると、畦畔の下幅は1.3～2.1m、最大区画4.4×4.3mである。これと比較すると、本調査で発見された遺構は、畦畔の下幅は1.3m～3.2m、最大区画7.5m以上×8.0m以上と大規模なものである。しかし、標高値や土質、プラント・オパール等をみると、両者間に大きな差異はみとめられない。隣接地にありながら、このような水田形態の差を生む要因が何に起因するのかを明らかにすることが、今後の課題と考えられる。

参考文献

多賀城市教育委員会「新田遺跡-第15・17・18次調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第43集　1997
多賀城市教育委員会「多賀城市内の遺跡２-平成26年度発掘調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第119集　2015

（注１）　調査時の標高はおおよそ4.2mであるが、多賀城市では東日本大震災による地盤沈下が30㎝あったことから、これを差し引いた標高値を示した。

山王遺跡第150次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（Si0 ２）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント･オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント･オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

山王遺跡第150次調査では、表土下１ｍの層において、幅２ｍ前後の大きな畦で区画された水田跡が調査区全面で検出された。最も広い区画では一辺８ｍ以上にも及ぶ。水田の時期は、出土遺物がないためはっきりしないが、隣接する山王遺跡第51次調査で検出された古墳時代前期の水田跡と地層や遺構の状態が近似することから、同時代のものと推定されている。

本報告では、当該水田遺構における稲作の検証を目的に、プラント・オパール分析を実施した。

２．試料

分析試料は、耕作面の３つの区画より採取された、東側より試料Ａ、試料Ｂ、試料Ｃの３点である。

３．分析方法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μm以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10－５g）を乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより､各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。

各分類群の換算係数は､イネ（赤米）は2.94（種実重は1.03）､ヨシ属（ヨシ）は6.31､ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。

４．結果

分析試料から検出されたプラント･オパールは､イネ､キビ族型､ヨシ属､ススキ属型､タケ亜科ササ属（ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型)、その他のタケ亜科および未分類である。また、プラント・オパール以外に海綿骨針も検出された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１、図１に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

イネはすべての試料から高い密度で検出されている。イネ以外では、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型も各試料で検出されている。ススキ属型とネザサ節型がすべての試料で、ヨシ属は試料Ｂで、チマキザサ節型は試料Ａでそれぞれ比較的高い密度である。なお、キビ族型、ミヤコザサ節型および海綿骨針は全体にやや低い密度である。

５．山王遺跡第150次調査における稲作と推定される周辺植生・環境

（１）稲作の検討

稲作跡の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料１gあたり5,000個以上の密度で検出された場合、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000)。ただし、仙台平野（仙台市域、多賀城市域）では、これまでの調査で密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満でも水田遺構が検出された例が多く報告されていることから、ここでは3,000個/gを目安とした。

本調査区では、古墳時代前期とみられる水田遺構面３箇所について分析を行った。その結果、試料Ａ、試料Ｂ、試料Ｃのすべてからイネが検出された。プラント・オパール密度は4,800 ～ 5,400個/gであり、いずれも通常の水田跡の可能性を判断する際の基準値である5,000個/gに近似する値である。このことから、当該水田遺構において稲作が行われていた可能性が極めて高いと判断される。

（２）植生と堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育する。このことから、これらの植物の出現状況を検討することで、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。本調査区では、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型が比較的多く、キビ族型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型なども検出された。おもな分類群の推定生産量をみると、概ねヨシ属が優勢であり、ススキ属型とネザサ節型がこれに続く。こうしたことから、当該時期の調査地は、ススキ属やササ属が生育するような比較的乾燥した環境であったと考えられ、周辺の湿ったところにはヨシ属が生育していたと推定される。

６．まとめ

プラント・オパール分析の結果、古墳時代前期とみられる水田跡では、分析を行った３区画すべてにおいてイネが高い密度で検出され、ここで稲作が行われていた可能性が高いことが認められた。堆積当時は、おおむねススキ属やササ属が生育するような乾いた環境であったと考えられ、周辺の比較的湿ったところにはヨシ属が生育していたと推定された。

文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p. 189-213.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－．考古学と自然科学，20，p. 81-92.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p. 15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p. 73-85.

表１　山王遺跡第150次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）		検出遺構面 A	B	C
イネ科	Gramineae (Grasses)			
イネ	*Oryza sativa*	48	48	54
キビ族型	*Paniceae* type	6	12	6
ヨシ属	*Phragmites*	12	24	12
ススキ属型	*Miscanthus* type	24	24	24
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)			
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	42	61	42
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	30	12	24
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	18	24	12
その他	Others	6	6	6
未分類等	Unknown	55	73	61
（海綿骨針）	Sponge spicules	18	18	12
プラント・オパール総数		241	284	241

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa*	1.42	1.43	1.60
ヨシ属	*Phragmites*	0.76	1.53	0.76
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.30	0.30	0.30
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.20	0.29	0.20
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	0.23	0.09	0.18
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.05	0.07	0.04

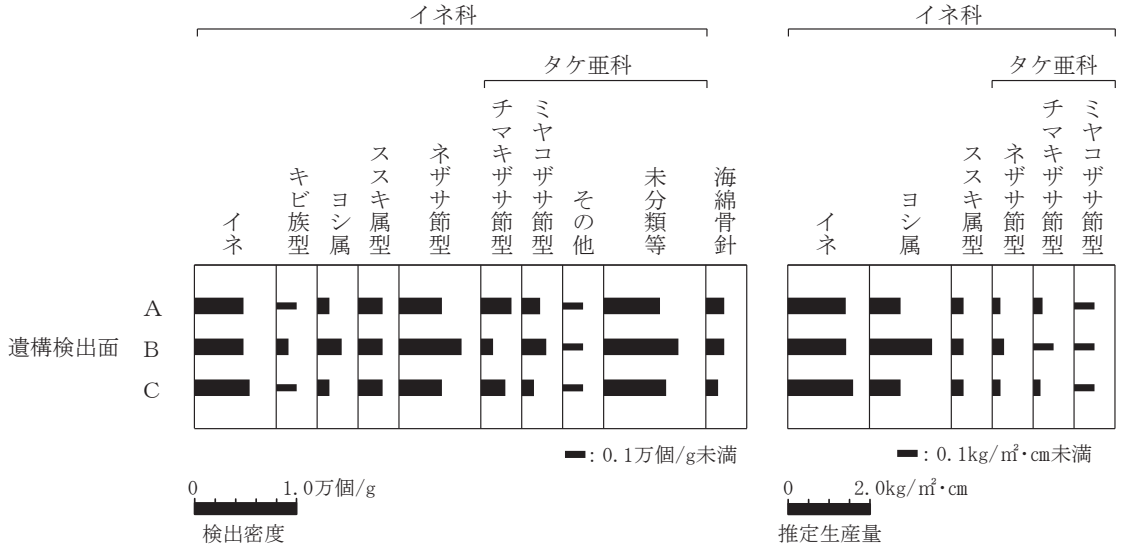
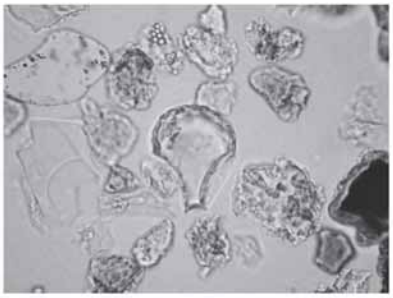
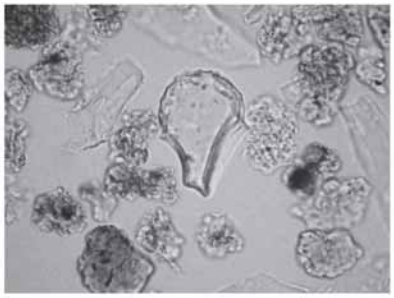


図１　山王遺跡第150次調査におけるプラント・オパール分析結果

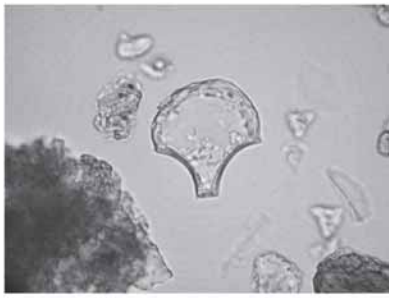
山王遺跡第150次調査のプラント・オパール



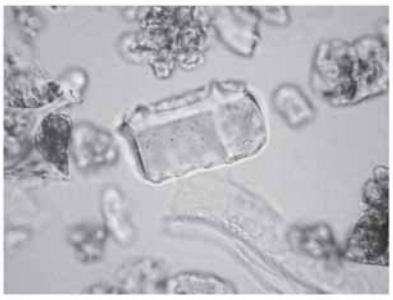
イネ（試料Ａ）



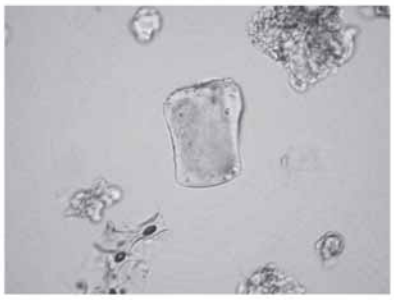
イネ（試料Ｂ）



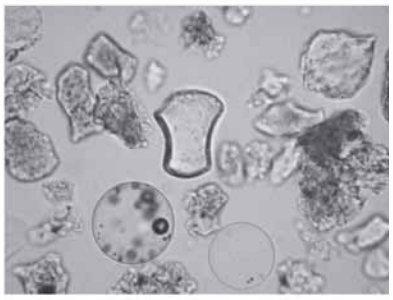
イネ（試料Ｃ）



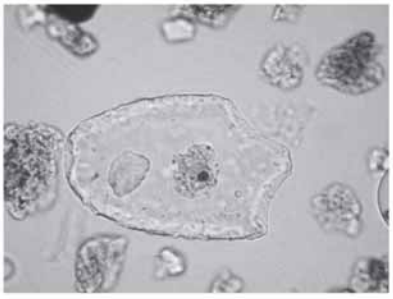
キビ族型（試料Ｂ）



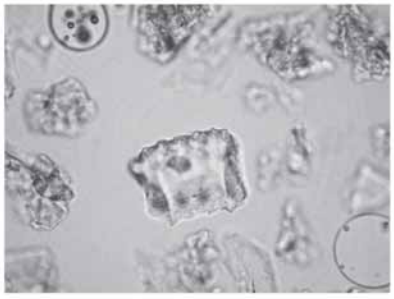
ススキ属型（試料Ａ）



ススキ属型（試料Ｃ）

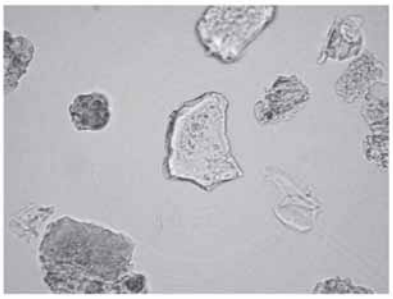


ヨシ属（試料Ｂ）

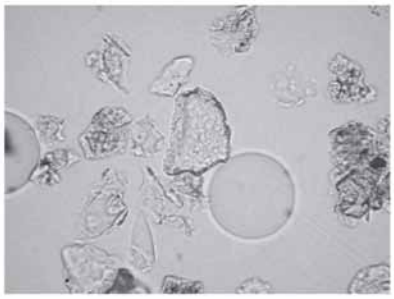


ネザサ節型（試料Ｂ）

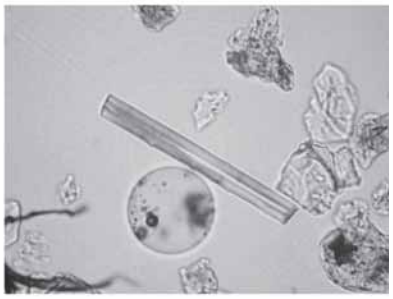
ネザサ節型（試料Ｃ）



チマキザサ節型（試料Ａ）



ミヤコザサ節型（試料Ｂ）



海綿骨針（試料Ａ）

50μm

遺構検出状況（東から撮影）

遺構検出状況（西から撮影）

中央部畦畔検出状況（南から撮影）

西部検出状況（北から撮影）

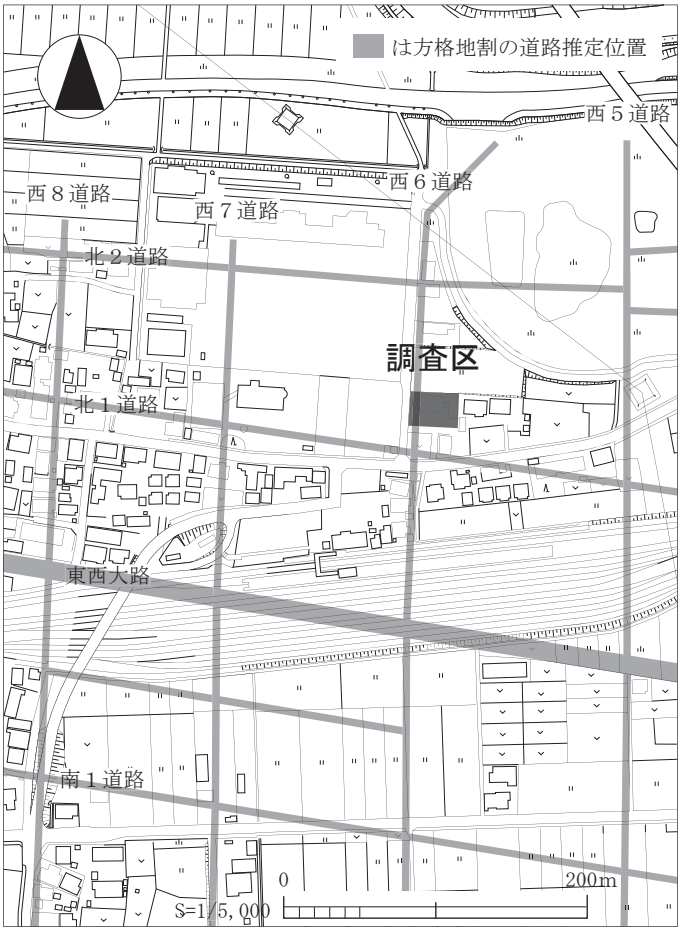
東部全堀状況（東から撮影）

畦畔部全堀状況（北から撮影）

Ⅳ 山王遺跡第152次調査

１　調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字八幡地内における個人住宅及び共同住宅建築工事に伴う本発掘調査である。平成27年５月に、地権者より山王遺跡の北東部に位置する当該地における個人住宅・共同住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅部の基礎工事として直径600㎜、長さ９ｍの柱状改良杭を84本打ち込むことから、遺跡への影響が懸念された。このため、遺跡保存のための協議を行ったが、当該地の地盤の強度などから判断して、現計画での工事実施が望ましいとの結論に達し、記録保存のための本発掘調査を実施するに至った。なお、計画建物は一続きの建物に個人住宅部と共同住宅部が併存するつくりであることから、前者の範囲は国庫補助事業、後者の範囲は受託事業で調査を実施することとした。これらについて、地権者の同意が得られたことから、８月17日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、８月27日より現地調査を開始した。



第１図　調査区位置図

はじめに、重機により現代の盛土及び旧水田耕作土の除去を行い、掘削した土砂を場外に搬出する作業を行ったが、連日の悪天候のためこれを終了したのは９月３日であった。４日から作業員を動員し、調査区内に壁面での土層観察を兼ねた排水溝を巡らせるとともに、平面精査を開始した。しかし、その後も台風の影響などにより作業中止の日が続き、本格的に遺構検出作業が実施できたのは20日過ぎであった。28日からは、調査区西端部で検出した南北方向の溝跡（ＳＤ1889溝跡）の掘り下げを開始した。この溝跡は、周辺での調査成果から、多賀城南面における方格地割を構成する道路網のうち、西６南北道路の東側溝にあたると判断した。さらに、調査区壁面の土層観察から、３時期の変遷があることを確認した。これと併行して、下層における古墳時代の遺構の有無を確認するために、調査区北壁際に設けた排水溝の一部を拡幅、深掘りした。また、遺構検出作業により調査区のほぼ全域で掘立柱建物跡、溝跡、土壙などを検出したことから、10月６日からはこのうち調査区西側で検出したＳＢ1890建物跡の掘り下げを開始した。掘立柱建物跡については、この後調査区東側で検出したＳＢ1891建物跡とＳＢ1892建物跡の掘り下げを順に行い、15日までに写真撮影、図面作成までの一連の作業を終了した。このほかの遺構については、ＳＤ1889溝跡の調査を８日に終了し、引き続きこれに切られるＳＥ1894井戸跡の掘り下げを行い、さらに調査区中央付近で検出した土壙などを調査した。この結果、一部の土壙状及び溝状の平面形をもった遺構が、配置

や断面の状況から掘立柱建物として組み合うことがわかったため、新たにＳＢ1893建物跡とした。調査は、16日に調査区の全景写真を撮影し、柱穴などの掘り下げや図面の補足作業を経て21日に終了した。その後、26・27日に重機による調査区の埋め戻し作業を行い、本調査の一切を終了した。

２　調査成果

本調査の対象は、計画建物の共同住宅部にあたる範囲で、調査区全体でみると西半部がこれにあたる。一方、調査区東半部は個人住宅部にあたり、山王遺跡第151次調査として調査を実施した。なお、これについての調査報告は、国庫補助事業関係報告書（多賀城市文化財調査報告書第127集）において行う。

（１）層　序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

Ⅰ層：現代の盛土層で、厚さは90 ～ 100㎝である。

Ⅱ層：現代の水田耕作土で、厚さは15 ～ 20㎝である。

Ⅲ層：やや砂質の黄灰色土で、厚さは10㎝前後である。上面は、古代の遺構検出面である。

Ⅳ層：やや粘性のある黄褐色土で、厚さは10㎝前後である

Ⅴ層：黄灰色土で、厚さは約10㎝である。黄褐色土を混入している。

Ⅵ層：黄灰色土で、厚さは10 ～ 15㎝である。黄灰色土や浅黄色土を混入している。

Ⅶ層：黄灰色土で、厚さは５㎝前後と薄い。黒褐色土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。

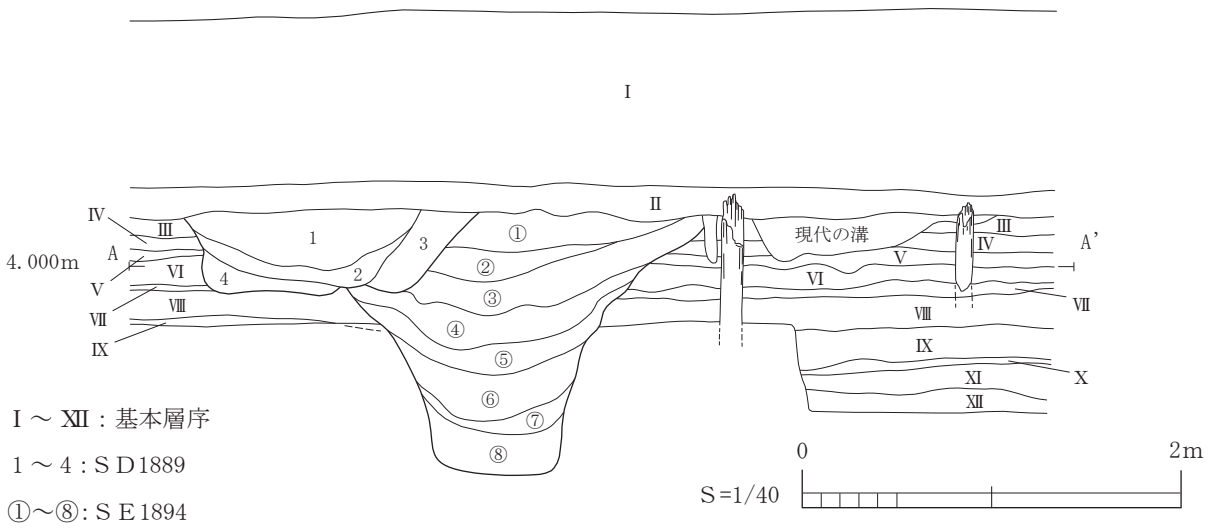
Ⅷ層：黄灰色土で、厚さは20㎝前後である。上層に比べ灰色が濃い。古墳時代前期の遺物を含んでいる。

Ⅸ層：黄灰色砂質土で、厚さは約20㎝である。黄褐色土を斑状及び小ブロック状に若干含んでいる。

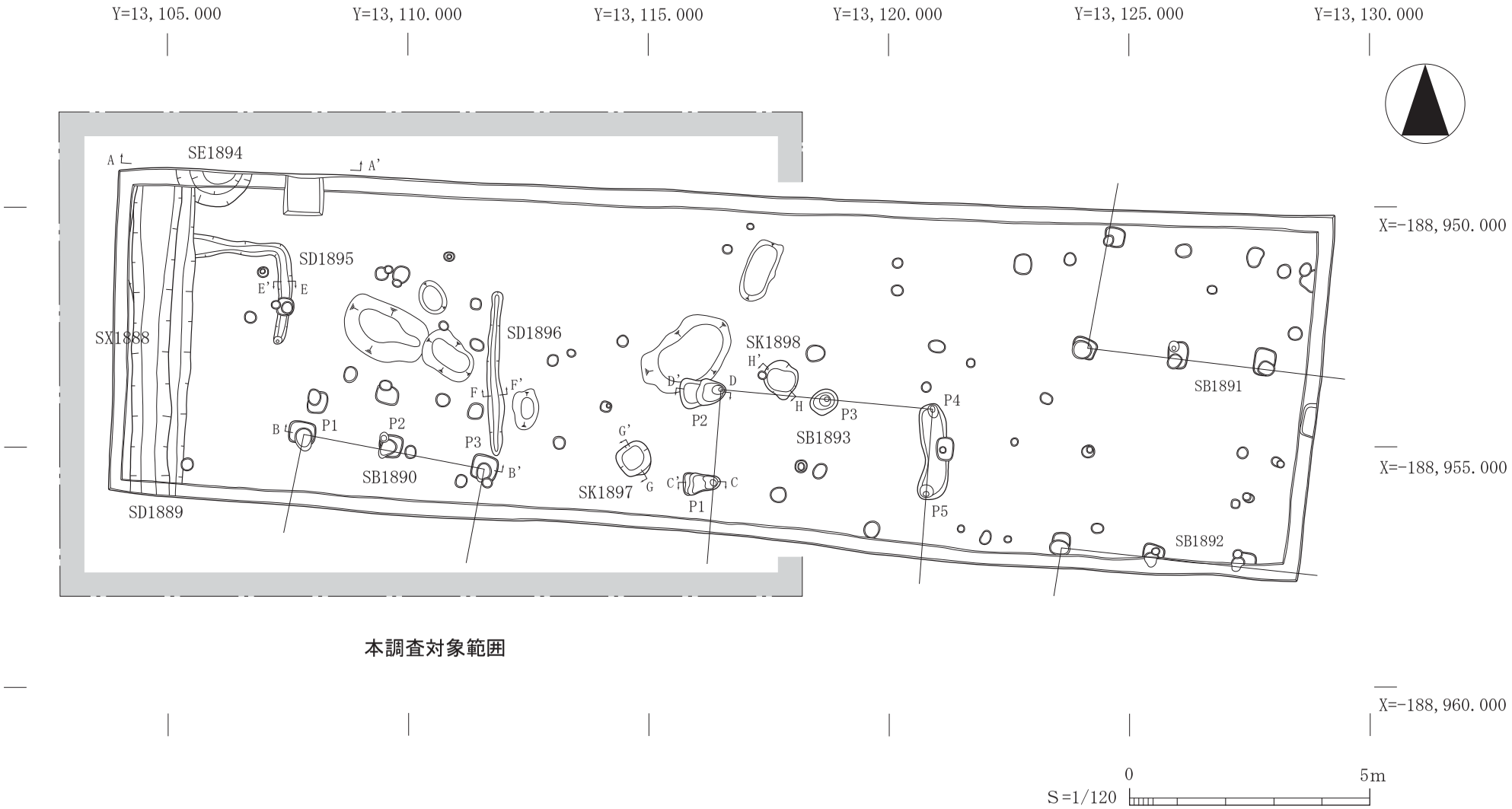
Ⅹ層：灰色砂で、厚さは３～５㎝と薄い。非常に薄い黒色土と互層に堆積している。

Ⅺ層：灰色砂で、厚さは10 ～ 15㎝である。

Ⅻ層：暗オリーブ灰色砂で、厚さは15㎝以上である。上層より砂の粒子が粗い。



第２図　調査区北壁（ＳＤ1889、ＳＥ1894）断面図


Y=13, 105. 000
Y=13, 110. 000
Y=13, 115. 000
Y=13, 120. 000
Y=13, 125. 000
Y=13, 130. 000
X=-188, 950. 000
X=-188, 955. 000
X=-188, 960. 000
SE1894
SD1895
SD1896
SX1888
SD1889
SB1890
SB1891
SB1892
SB1893
SK1897
SK1898
P1
P2
P3
P4
P5
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
本調査対象範囲
0
5m
S=1/120

第３図　調査区平面図

（２）発見遺構と遺物

ＳＸ1888西６南北道路跡（第２・３図）

【位置・規模】調査区西端で発見した南北方向の道路跡である。位置、方向、規模などから、多賀城南面に施工された方格地割を構成する道路網のうち、西６南北道路に相当する。調査においては、ＳＤ1889東側溝を検出したが、路面と西側溝は調査区外にかかっている。ＳＤ1889東側溝は、調査区北端部でＳＥ1894井戸跡と重複関係にあり、それより新しい。長さ約6.8mを検出しており、南北とも調査区外に延びている。また、調査区壁面の土層観察などから、３時期（ａ～ｃ期）の変遷があることを確認した。方向は、ｃ期でみると北で約２度東に偏している。以下、時期ごとに記載する。

・ＳＤ1889東側溝ａ期 ： 大部分を後続するｂ・ｃ期に壊されており、調査区北側で底面付近を確認したにすぎない。

【規模】残存する規模は、下幅約65㎝、深さ約20㎝である。

【壁・底面】底面はおおよそ平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。

【埋土】底面近くは黒褐色土で、黄褐色土を斑状及びブロック状に多く含んでいる。

【出土遺物】須恵器甕の破片が１点出土しているのみである。

・ＳＤ1889東側溝ｂ期 ： 西半部を後続するｃ期に壊されている。

【規模】上幅、下幅とも不明である。深さ約45㎝を測る。

【壁・底面】底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がり、上部でやや開き気味になる。

【埋土】黒褐色土の単層で、黄褐色土と黒色土を斑状に含んでいる。また、灰白色火山灰を斑状に含んでいる。

【出土遺物】土師器坏・甕（Ａ・Ｂ期）、須恵器坏（Ⅲ類）・蓋・瓶・甕、瓦、鉄滓が出土している。

・ＳＤ1889東側溝ｃ期 ： ａ期に対してはほぼ同一位置、ｂ期に対してはやや西側にずれて構築されている。

【規模】上幅75～98㎝、下幅30～66㎝で、深さ約40㎝である。

【壁･底面】底面は平坦に近く、壁はｂ期に比べやや急角度で立ち上がる。なお、底面の深さについては、北端と南端で標高に差がなく、調査区内では傾斜はみられない。

【埋土】２層に分けられる。１層は黄灰色土、２層は黒褐色土で、いずれも黄褐色土を斑状に若干含んでいる。

【出土遺物】土師器坏・甕（Ｂ期）、須恵器坏（Ⅰ・Ⅲ類）・高台付坏・蓋・甕、須恵系土器坏・高台付坏、瓦、羽口が出土している。

ＳＢ1890掘立柱建物跡（第３・４図）

【位置】調査区南西部で発見した。

【桁行・梁行】北側柱列２間、南北柱列１間以上の建物跡である。大部分が調査区外にかかるため、全体の規模などは不明である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は３基（Ｐ１～３）検出しており、そのすべてで抜取り穴を確認した。

【重複】Ｐ３が小柱穴と重複しており、それより古い。

【方向･規模】方向は北側柱列で測ると、東で約10度南に偏している。建物の規模は、北側柱列で3.85m、柱間は西から1.80m、2.05mである。

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は長辺が50～56㎝、短辺が46～52㎝で、深さは38～42㎝であ

る。埋土は２層に分けられ、上層は黒褐色土、下層はにぶい黄色土で、いずれも黄灰色土やにぶい黄橙色土を斑状及びブロック状に多く含んでいる。

【柱抜取り穴】いずれも柱穴の南側を壊して抜き取られている。また、柱のあたり痕跡をとどめている。埋土はいずれも黒褐色土で、にぶい黄色土を斑状に若干含んでいる。

【遺物】各柱穴から、土師器坏・甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器坏・甕が出土しているが、いずれも破片である。

ＳＢ1893掘立柱建物跡（第３・４図）

【位置】調査区中央部で発見した。

【桁行・梁行】北側柱列２間、南北柱列２間以上の建物跡である。南側が調査区外にかかるため、全体の規模等は不明である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は５基（Ｐ１～５）検出しており、そのうち西側のＰ１・２で抜取り穴を確認した。

【重複】Ｐ４・５が、方形の掘方をもつ柱穴と重複しており、それより古い。

【方向･規模】方向は北側柱列で測ると、東で約５度南に偏している。建物の規模は、北側柱列で4.40m、柱間は西から2.20m、2.20mである。また、東側と西側柱列の柱間は、いずれも北から1.95mである。

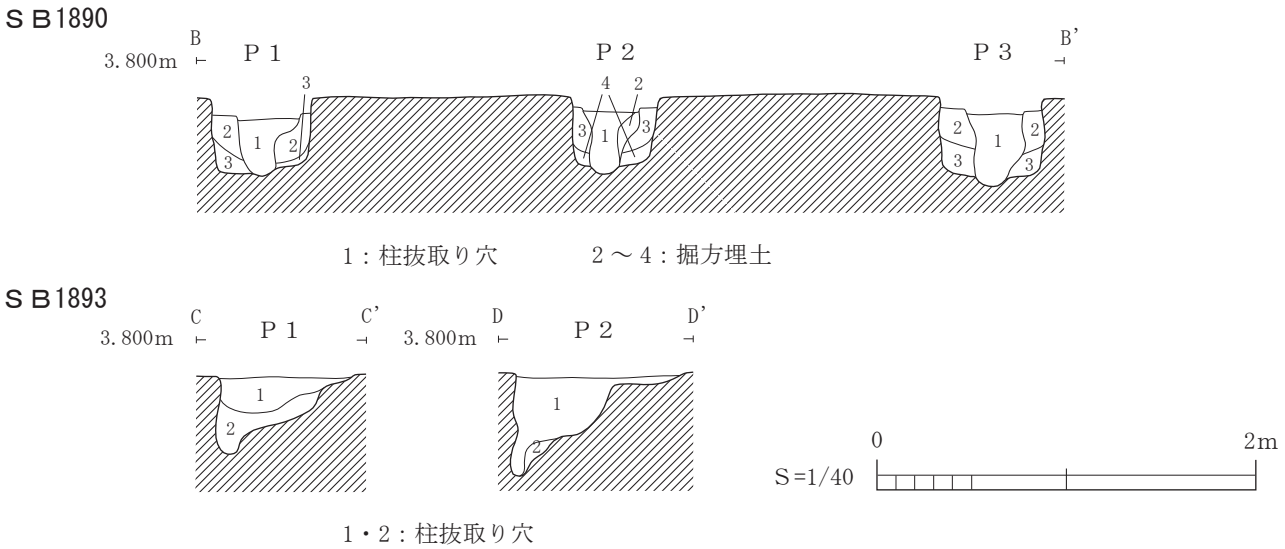
【掘方】Ｐ１とＰ２は、柱抜取り穴によって全体的に壊されていると考えられ、形態などは不明である。Ｐ３の平面形は円形を基調とし、規模は長径58㎝、短径48㎝である。Ｐ４とＰ５は、布掘りによってつくられた共通の掘方をもつ。長さは2.01m、幅は0.48～0.57mである。埋土は２層に分けられ、上層は黒褐色土、下層は黒褐色土を斑状及び小ブロック状に含む黄褐色土である。

【柱抜取り穴】Ｐ１とＰ２は、いずれも柱穴全体を壊して柱の抜き取りが行われたと考えられる。また、いずれも東壁寄りに柱のあたり痕跡をとどめている。埋土は黒色土が主体であり、黄褐色土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。

【遺物】土師器坏・甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器坏・甕が出土しているが、いずれも破片である。

ＳＥ1894井戸跡（第２・３図）

【位置・形態】調査区北西部で発見した素掘りの井戸跡である。



第４図　ＳＢ1890、ＳＢ1893断面図

【重複】ＳＸ1888道路跡と重複し、それより古い。

【平面形・規模】北半部が調査区外にかかるが、検出状況から平面形は円形と推測される。規模は直径約1.6m、深さは調査区北壁での断面観察から1.38mである。

【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。中頃に段を有し、その上方では外側に開くように立ち上がる。

【埋土】８層に分けられる。１・２層は黒褐色土を主体とし、２層は黄褐色土を斑状及びブロック状に多く含んでいる。３～６層は、黒褐色・黒色粘質土と黄灰色・灰色粘質土が交互に堆積する。このうち、３・４層はいずれもにぶい黄灰色土を層状に含んでいる。また、５・６層は黒褐色砂質土とオリーブ黒色粘質土を混入している。７層は黒色粘土、８層は砂質気味のオリーブ黒色粘土である。

【遺物】土師器坏・甕（Ａ類）が出土しているが、いずれも破片である。

ＳＤ1895溝跡（第３・５図）

【位置・形態】調査区北西部で発見した鉤状を呈する溝跡である。

【重複】ＳＸ1888道路跡と重複し、それより古い。

【方向・規模】方向は、東西及び南北方向とも発掘基準線にほぼ一致する。規模は、長さが東西方向で2.05m以上、南北方向で2.10mである。幅は24～50㎝、深さは約10㎝を測る。

【壁・底面】底面は丸みをもち、壁は湾曲気味に立ち上がる。

【埋土】黄灰色土の単層で、黒褐色土と黄褐色土を斑状及びブロック状に含んでいる。

【遺物】遺物は出土していない。

ＳＤ1896溝跡（第３・５図）

【位置・形態】調査区中央部西寄りで発見した南北方向の溝跡である。

【重複】他の遺構との重複はない。

【方向･規模】方向は､発掘基準線にほぼ一致する。規模は､長さ3.40m､幅20～34㎝､深さは約5㎝である。

【壁・底面】底面は丸みをもち、壁は湾曲気味に立ち上がる。

【埋土】黒褐色土の単層で、黄灰色土等を斑状及び小ブロック状に含んでいる。

【遺物】土師器甕の小破片がわずかに出土している。

ＳＫ1897土壙（第３・５図）

【位置・形態】調査区中央部で発見した。

【重複】他の遺構との重複はない。

【平面形・規模】平面形は方形に近く、規模は長辺が69㎝、短辺が64㎝で、深さは約30㎝である。

【壁・底面】底面は平坦で、壁は比較的急角度で立ち上がる。

【埋土】４層に分けられる。１層が黒褐色土、２層が黄灰色土、３層が黒褐色土で、いずれも黄褐色土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。４層は黄褐色土で、黒褐色土を斑状及び小ブロック状に若干含んでいる。

【遺物】遺物は出土していない。

ＳＫ1898土壙（第３・５図）

【位置・形態】調査区中央部で発見した。

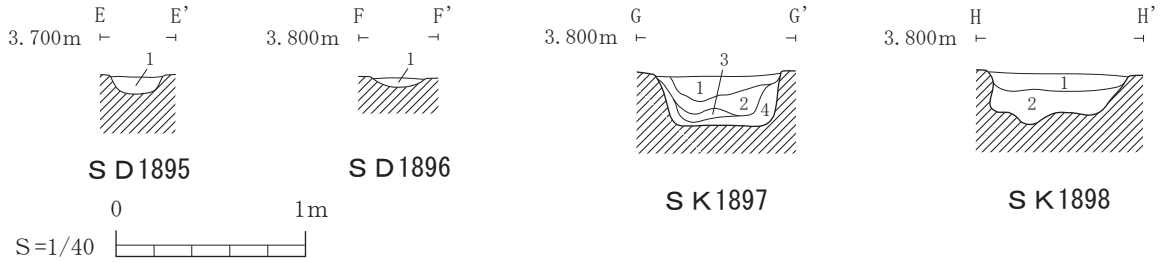
【重複】小柱穴と重複し、それより古い。

【平面形・規模】平面形は円形に近く、規模は直径が最大72㎝で、深さは約20㎝である。

【壁・底面】底面はほぼ平坦であるが、わずかに起伏がみられる。壁は東壁が比較的急角度に、西壁が緩やかに立ち上がる。

【埋土】４層に分けられる。１層が黒褐色土、２層が黒色土で、いずれも黄褐色土と黄灰色土を斑状及び小ブロック状に若干含んでいる。

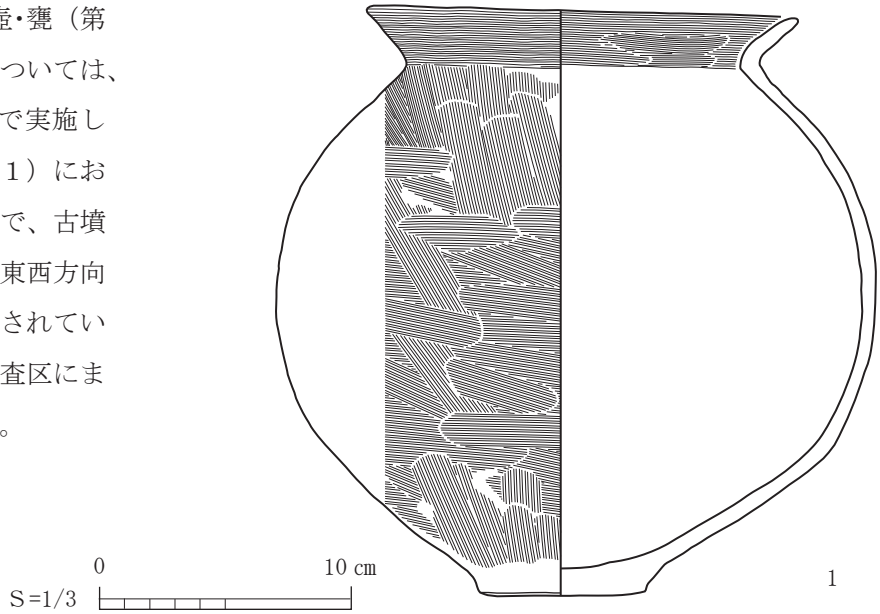
【遺物】土師器坏・甕（Ａ・Ｂ類）が出土しているが、いずれも破片である。



第５図　ＳＤ1895・1896、ＳＫ1897・1898断面図

堆積土出土の遺物

古代の遺構検出面から約50㎝下のⅧ層中から、古墳時代前期の土師器壺・甕（第６図）が出土している。これについては、本調査区の西側約150ｍの地点で実施した山王遺跡第66・68次調査（註１）において、古代の遺構検出面の下層で、古墳時代前期から中期の遺物を含む東西方向に延びる大規模な河川跡が発見されていることから、この河川跡が本調査区にまで延びてきていると考えられる。



（単位：㎝）

番号	種類	遺構	層位	特徴		口径残存率	底径残存率	器高	備考
				外面	内面				
1	土師器・甕		Ⅷ 層	口縁部：ヨコナデ 体部：ハケメ	口縁部：ヨコナデ →ハケメ	17.8 23/24	6.5 2/24	23.2	

第６図　堆積土出土遺物

３　まとめ

今回の調査で発見した遺構は、道路跡１条、掘立柱建物跡２棟、溝跡２条、土壙２基などである。

はじめに、ＳＸ1888西６南北道路跡については、ＳＤ1889東側溝で３時期の変遷（a→c期）を確認した。このうち、ｂ期の埋土中に10世紀前葉頃に降下した灰白色火山灰が二次的に含まれることから、それ以降に埋没したと考えられる。一番古い時期のａ期の年代については、埋土中に同様の火山灰が認められないことから10世紀前葉以前、ｃ期については10世紀前葉以降のｂ期よりさらに新しい年代が与えられる。

つぎに、２棟の掘立柱建物跡のうちＳＢ1890建物跡については、調査区東半部の第151次調査の対象範囲内で発見したＳＢ1891・1892建物跡と、配置状況や建物の方向、柱間の寸法、掘方の形態や規模などに共通点が多くみられる。したがって、この３棟は同時期のものである可能性が高い。一方、ＳＢ1893建物跡については、建物の方向や掘方の構築方法などに違いがみられることから、時期が異なる可能性が考えられる。なお、これらの掘立柱建物跡については詳細な年代は不明であるが、非ロクロ調整（Ａ類）とロクロ調整（Ｂ類）の土師器が混在し、須恵系土器が出土していないことから、おおよそ９世紀代のものとみられる。

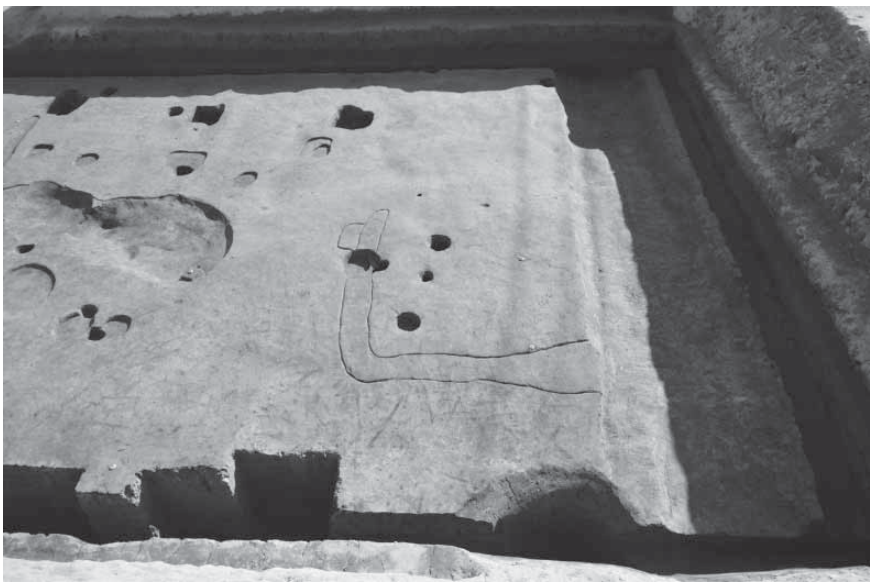
ＳＥ1894井戸跡については、ＳＸ1888道路跡に壊されていることから、それより古いものである。詳細な年代については、出土遺物が少ないため不明であるが、非ロクロ調整（Ａ類）の土師器のみが出土していることから、８世紀後葉以前のものと考えられる。

このほかの遺構については、ＳＤ1895溝跡がＳＸ1888道路跡に壊されていることから10世紀前葉以前、ＳＤ1896溝跡、ＳＫ1897・1898土壙はロクロ調整（Ｂ類）の土師器が出土していることなどから８世紀後葉以降のものである。

註１：多賀城市教育委員会 『山王遺跡－第66・68次発掘調査報告書－』 多賀城市文化財調査報告書第100集　2010

調査区全景
（西より）

調査区全景
（東より）



調査区西半部
（北より）

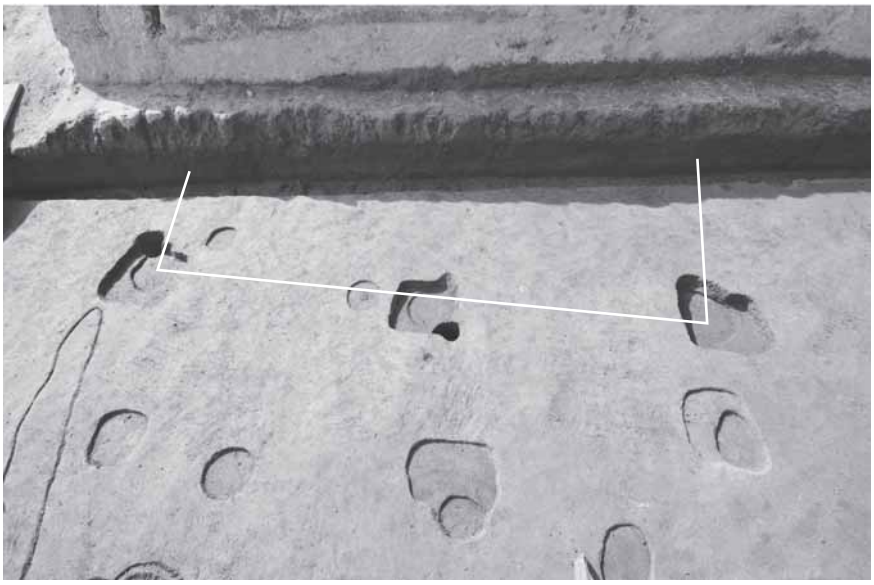
写真図版１

ＳＤ1889東側溝ｃ期
掘り下げ状況（北より）

ＳＤ1889東側溝ｂ期
掘り下げ状況（北より）

ＳＤ1889東側溝ａ期
掘り下げ状況（東より）

写真図版２



ＳＢ1890検出状況
（北より）

ＳＤ1889東側溝
土層堆積状況（南より）

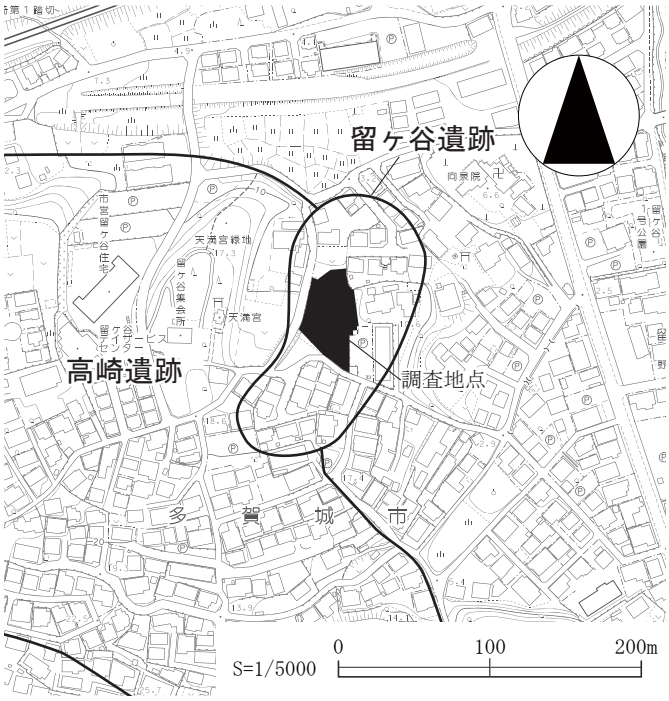
ＳＥ1894土層堆積状況
（西より）

写真図版３

Ⅴ 留ヶ谷遺跡第８次調査

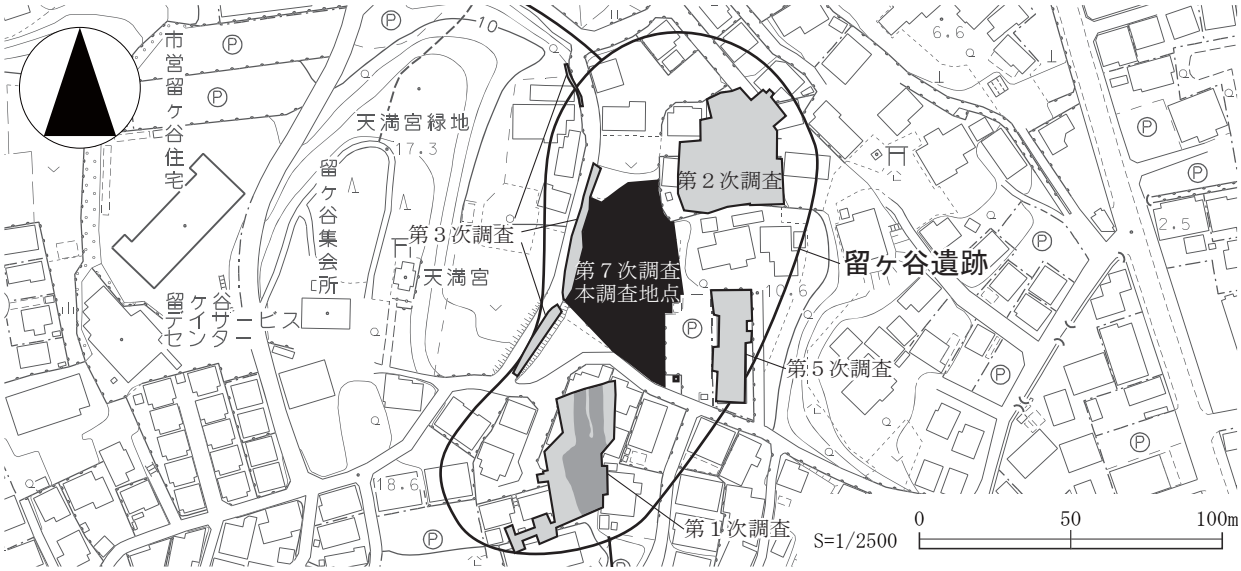
１　調査に至る経緯と経過

本件は、集合住宅新築に伴う本発掘調査である。平成27年３月13日に当該地における宅地造成工事と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は丘陵地を切土し、躯体部の基礎に柱状改良を施工する内容であり、遺跡への影響が懸念されたことから、平成27年７月より確認調査を実施した（第７次、第２図）。その結果、現地表から約20㎝の深さで遺構が確認されたほか、近世の整地層も確認された。これらの成果を受け、切土する範囲全面について本発掘調査を実施することとなった。10月15日に受託契約のための協議を行い、10月30日に契約を締結した。

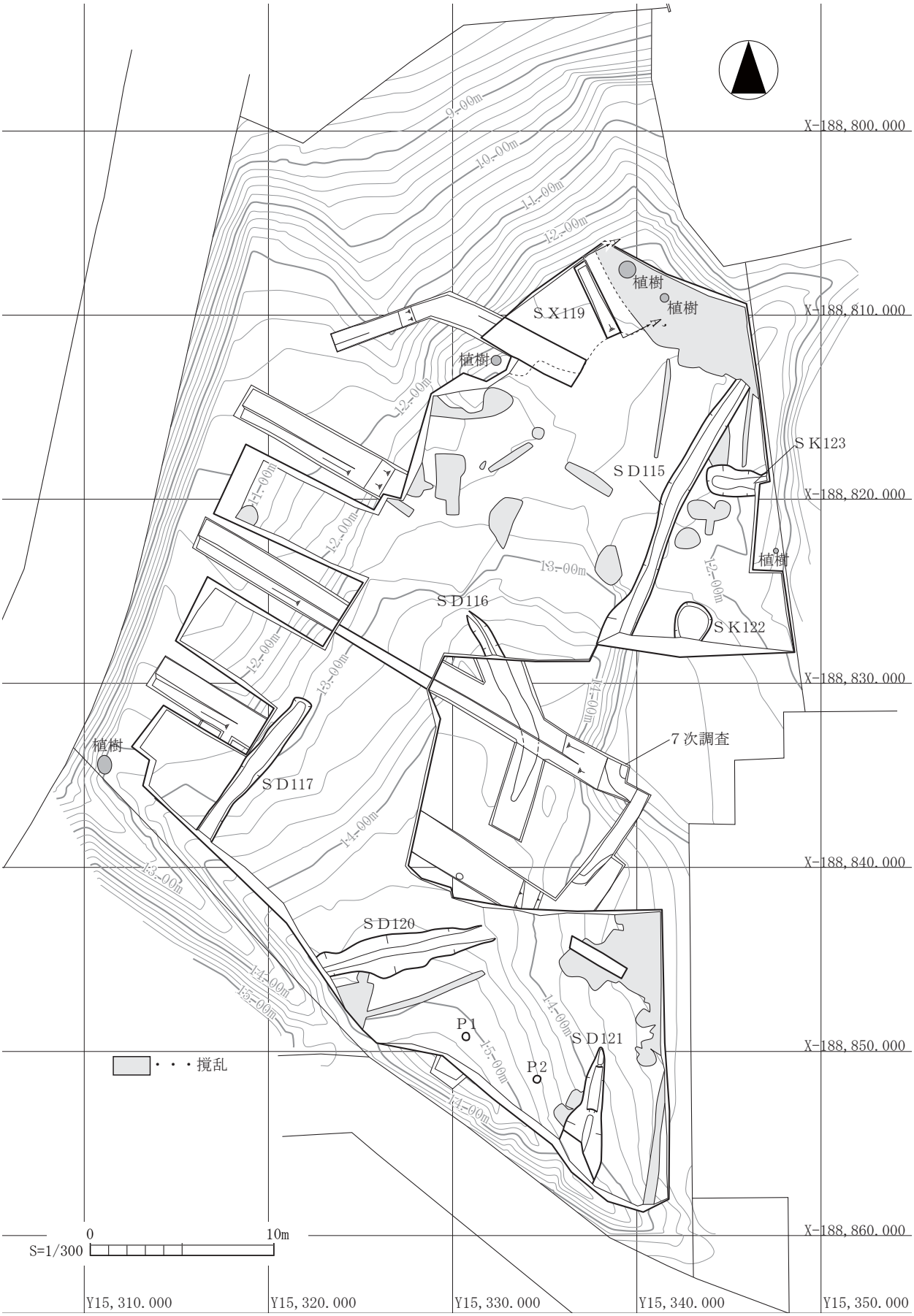


第１図　調査地点位置図

調査は11月16日から開始した。当初は残土場内処理の都合から調査区を２区に分割し、各区ごとに掘削･埋め戻しを行う予定であったが、地権者・開発業者の協力により調査区外にあった既存の小屋を解体し、残土仮置き場として提供されたことから、調査範囲全ての掘削を一度に行うことができた。重機による表土掘削の後は人力による精査・遺構確認を行い、12月２日に遺構確認時の全景写真を撮影した。その後順次遺構掘削、断面図・平面図の測量を行い、12月16日に全景写真を撮影し、地形測量を行った。開発業者との協議の結果、調査側での埋め戻しは不要との結論に至り、12月21日に器材等撤収し全ての調査を完了した。



第２図　留ヶ谷遺跡調査地点


X-188,800.000
X-188,810.000
X-188,820.000
X-188,830.000
X-188,840.000
X-188,850.000
X-188,860.000
Y15,310.000
Y15,320.000
Y15,330.000
Y15,340.000
Y15,350.000
9.00m
10.00m
11.00m
12.00m
13.00m
14.00m
15.00m
植樹
SX119
SK123
SD115
SD116
SK122
7次調査
SD117
SD120
SD121
P1
P2
・・・撹乱
0
10m
S=1/300

第３図　遺構全体図

２　発見した遺構・遺物

本調査地点は中世～近世の館跡と目される地点であり、丘陵中腹の尾根線上に位置している。発見した遺構は、溝跡５条（ＳＤ115 ～ 117、120、121）のほか、積土層（ＳＸ119)、ピット２基（Ｐ1、Ｐ2）である。

ＳＤ115溝跡（第４図）

【位置･形態】調査地東側で発見した南北方向の溝跡で、南北に延びる尾根に平行して設けられている。第７次調査で発見したものと同一の溝跡である。

【重複】ほかの遺構との重複はない。

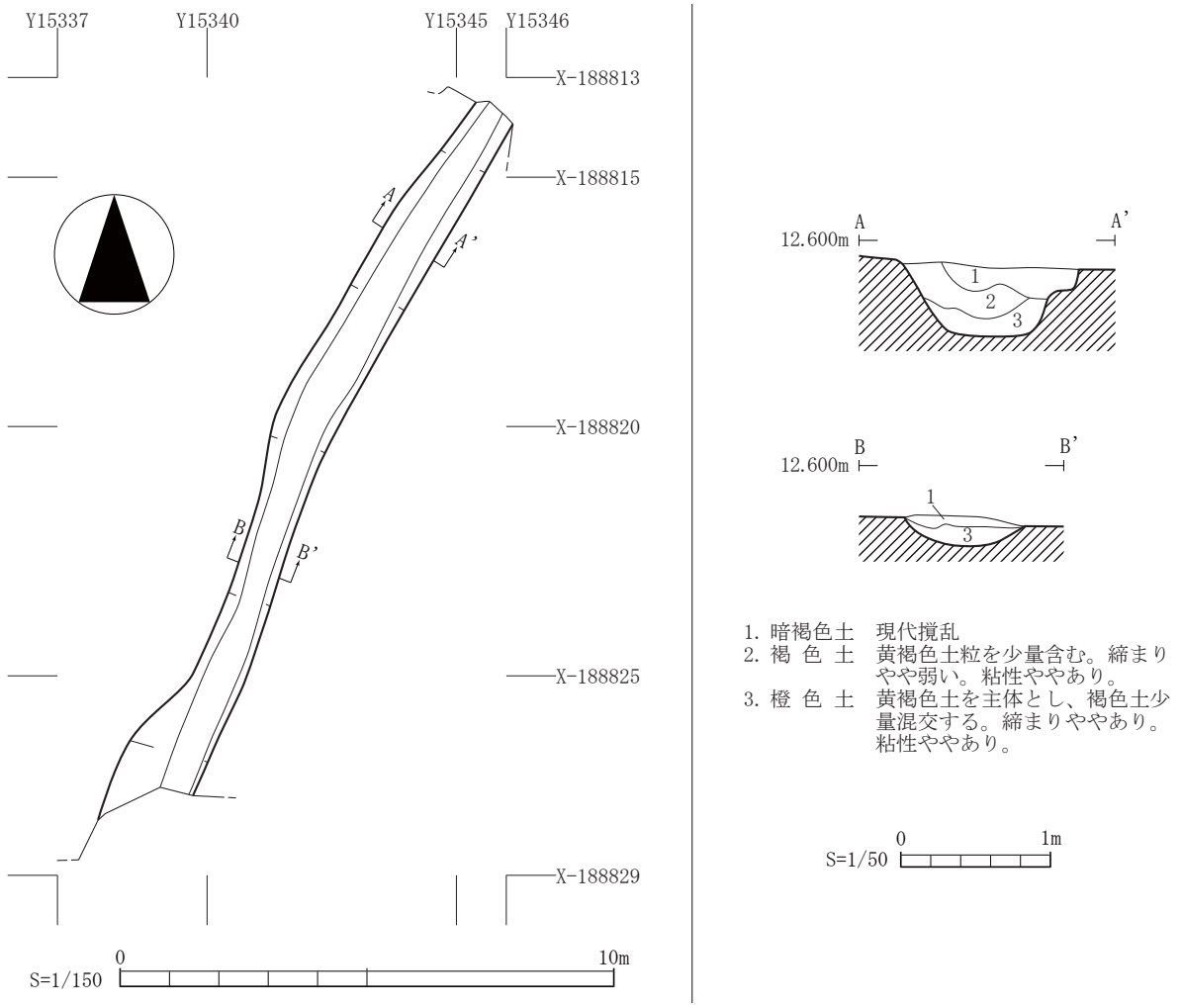
【方向・規模】方向は北で25度東に偏する。規模は長さ16.0m以上、幅120㎝、深さは検出面から50㎝である。尾根の頂部からの深さでは130㎝となる。

【遺物】出土していない。

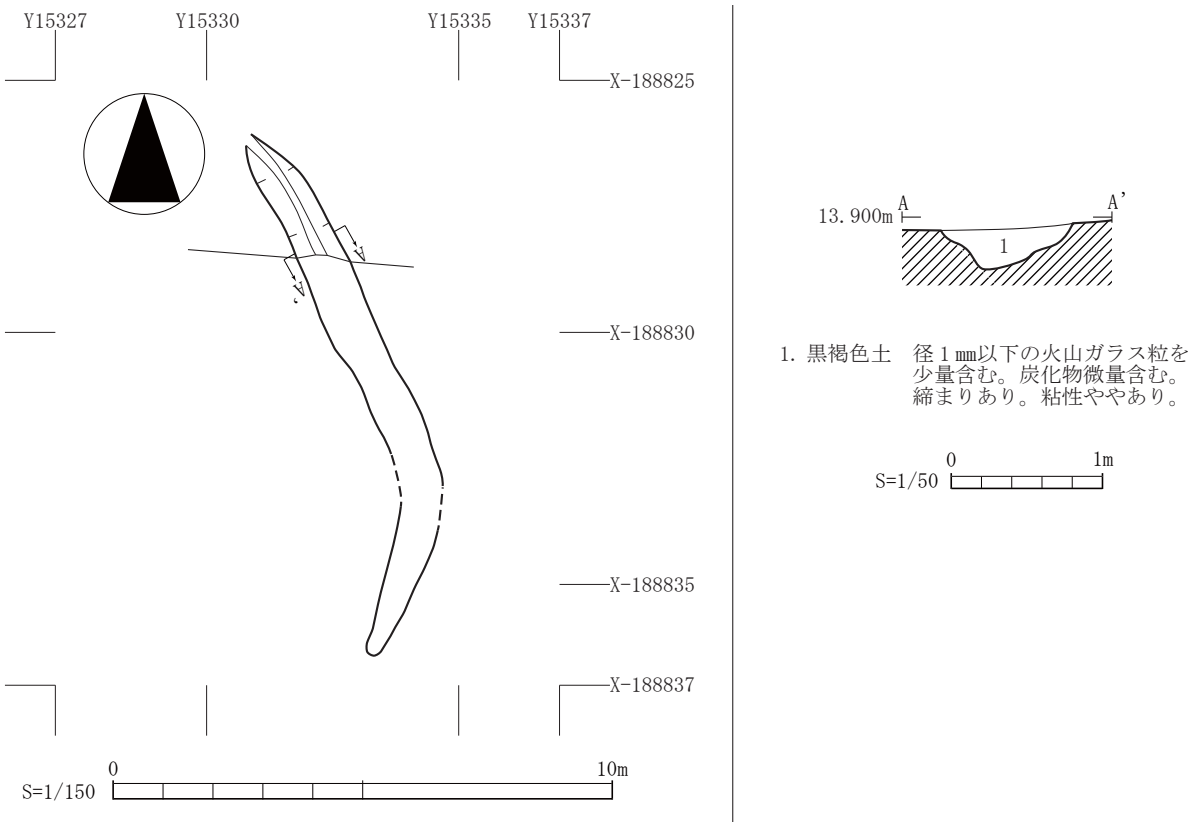
ＳＤ116溝跡（第５図）

【位置･形態】調査区中央付近発見した南北方向の溝跡である。北端部は現代の削平により失われている。第７次調査で発見したものと同一の溝跡である。

【重複】ほかの遺構との重複はない。



第４図　ＳＤ115溝跡



第５図　ＳＤ116溝跡

【方向・規模】方向は北で25度西に偏する。規模は長さ10.3m以上を第7次調査時に確認しており、幅85㎝、深さは検出面から30㎝である。

【遺物】古代の瓦、土師器、須恵器が出土している。

ＳＤ117溝跡（第６図）

【位置･形態】調査区南西部で発見した南北方向の溝跡で､第７次調査で発見したものと同一の溝跡である。

【重複】ほかの遺構との重複はない。

【方向･規模】方向は北で37度東に偏する。規模は長さ9.2m以上､幅130㎝､深さは検出面から20㎝である。

【遺物】土師器、須恵器が出土している。

ＳＸ119（第７図）

【位置･形態】調査区北西部で発見した。第７次調査で発見したものと同一の積土層範囲である。

【重複】ほかの遺構との重複はない。

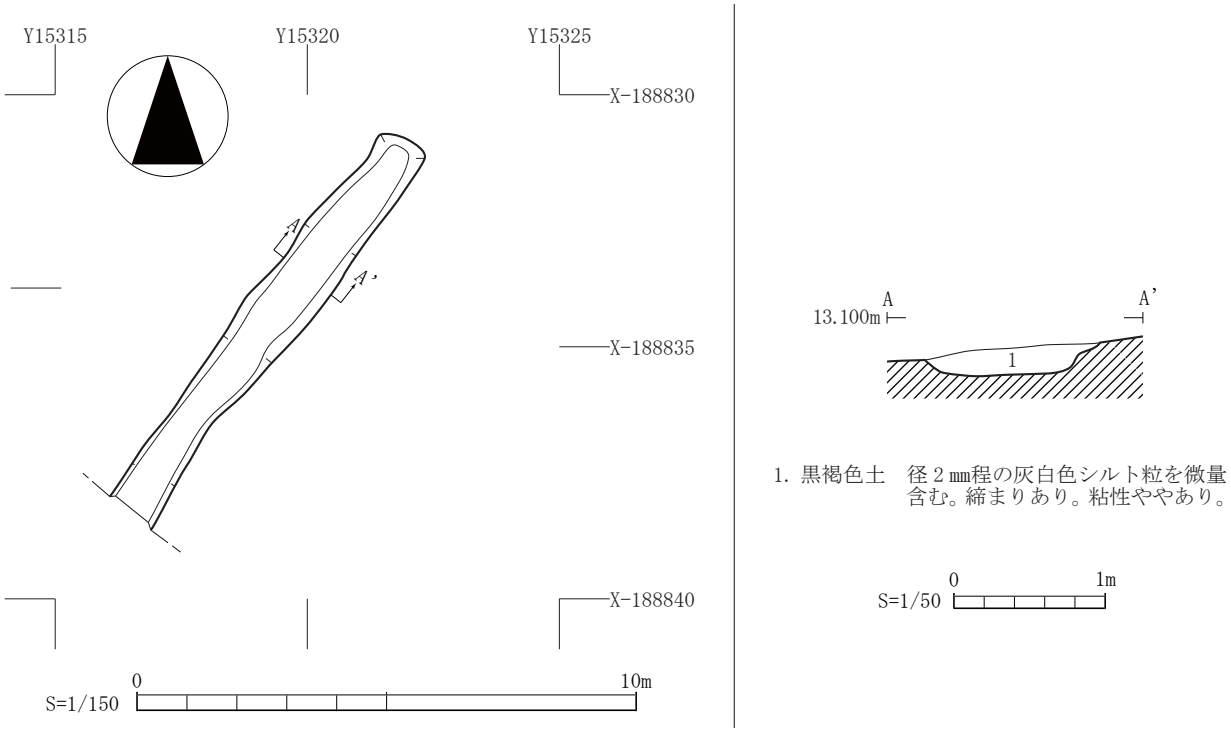
【方向・規模】方向は北で37度東に偏する。東西8m以上、南北6.5m以上の範囲に及び、北東部は撹乱により切り込まれている。積土層の厚さは検出面から80㎝である。

【遺物】近世の陶器、土師器が出土している。

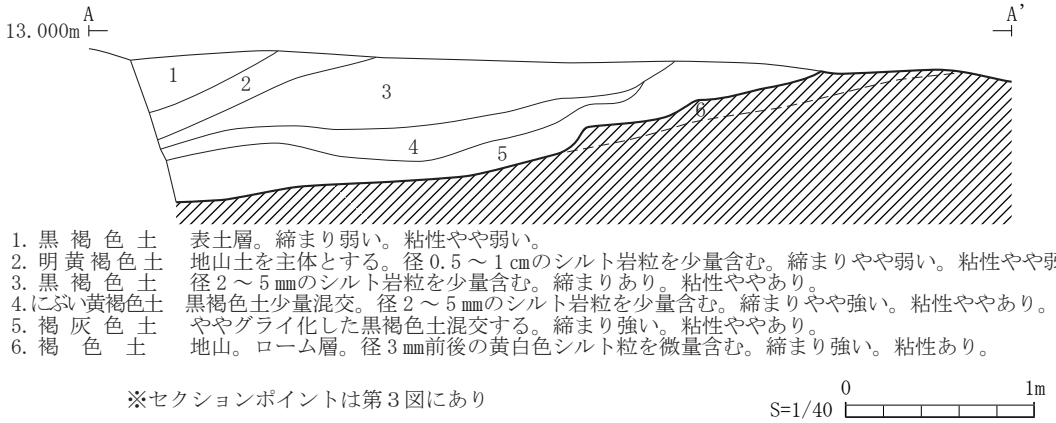
ＳＤ120溝跡（第８図）

【位置･形態】調査区南部で発見した東西方向の溝である。東端部は現代の削平により失われている。

【重複】ほかの遺構との重複はない。



第６図　ＳＤ117溝跡



第７図　ＳＸ119

【方向･規模】方向は東で14度北に偏する。規模は長さ9.4m以上、幅190㎝、深さは検出面から40㎝である。

【遺物】古代の瓦、須恵器、近世の陶器が出土している。

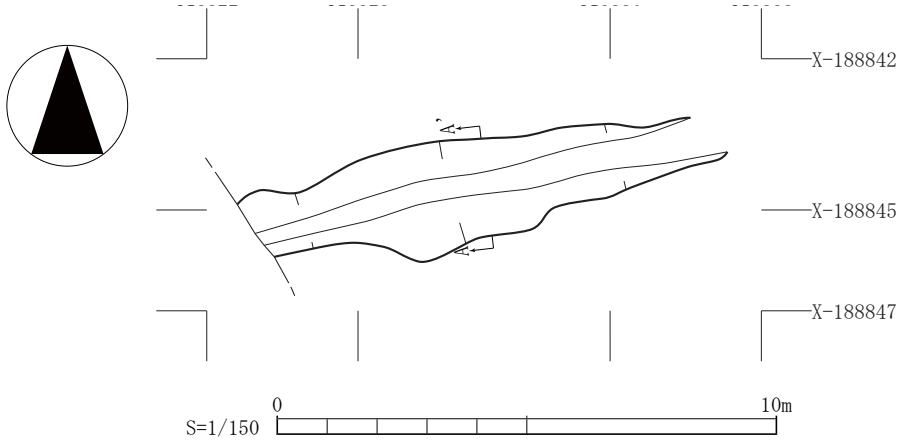
ＳＤ121溝跡（第９図）

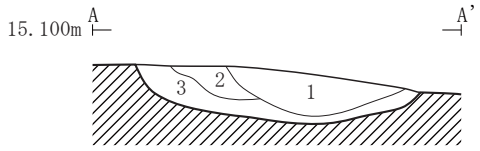
【位置･形態】調査区南東部で発見した南北方向の溝跡である。北端部は現代の削平により失われている。

【重複】ほかの遺構との重複はない。

【方向･規模】方向は北で10度東に偏する。規模は長さ6.9m以上、幅250㎝、深さは検出面から140㎝である。

【遺物】古代の瓦、中世～近世の陶器が出土している。

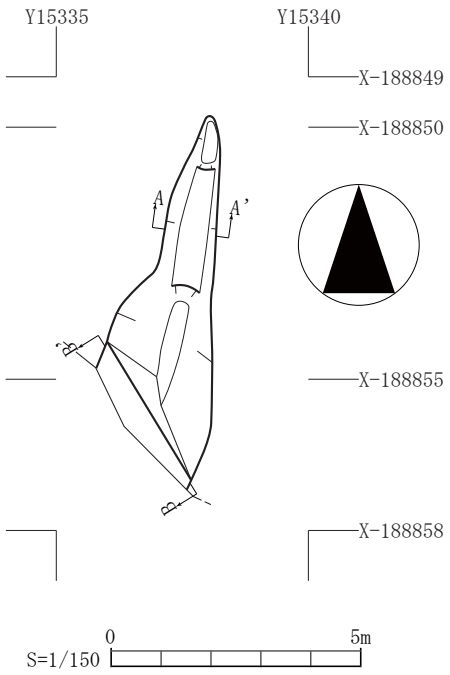


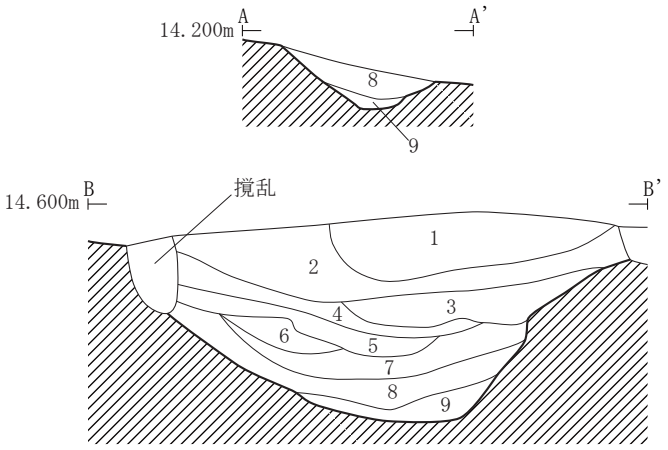


1. 暗 褐 色 土　炭化物微量含む。締まりあり。粘性あり。
2. にぶい黄褐色土　締まりあり。粘性あり。
3. 暗 褐 色 土　径５㎜程のローム粒を微量含む。締まりあり。粘性あり。

0　1m
S=1/50

第８図　ＳＤ120溝跡

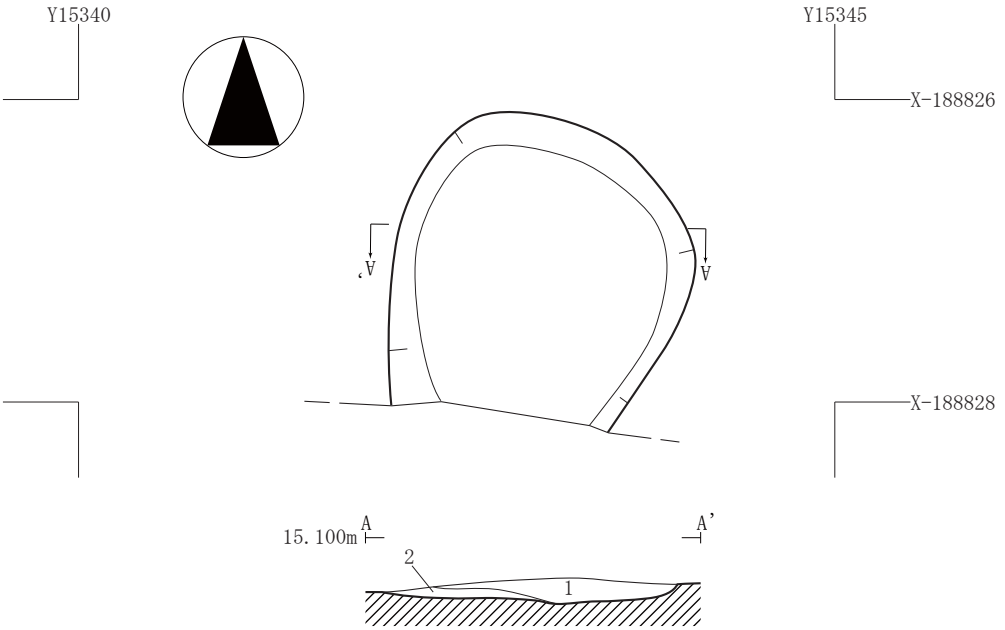




1. 明 黄 褐 色 土　ローム主体。暗褐色土少量混交。締まりあり。粘性ややあり。
2. 黒 褐 色 土　締まりあり。粘性ややあり。
3. 褐　色　土　２層土少量混交。締まりあり。粘性ややあり。
4. にぶい黄褐色土　褐鉄少量含む。締まりあり。粘性ややあり。
5. 褐　色　土　３層に近似。
6. にぶい黄褐色土　径５㎜のローム粒を少量含む。締まりあり。粘性ややあり。
7. 灰 黄 褐 色 土　褐鉄やや多く含む。締まりあり。粘性ややあり。
8. 灰 黄 褐 色 土　径５㎜のローム粒をやや多く含む。締まり強い。粘性ややあり。
9. 灰 黄 褐 色 土　灰白色地山土やや多く混入。ローム土少量混入。締まり強い。

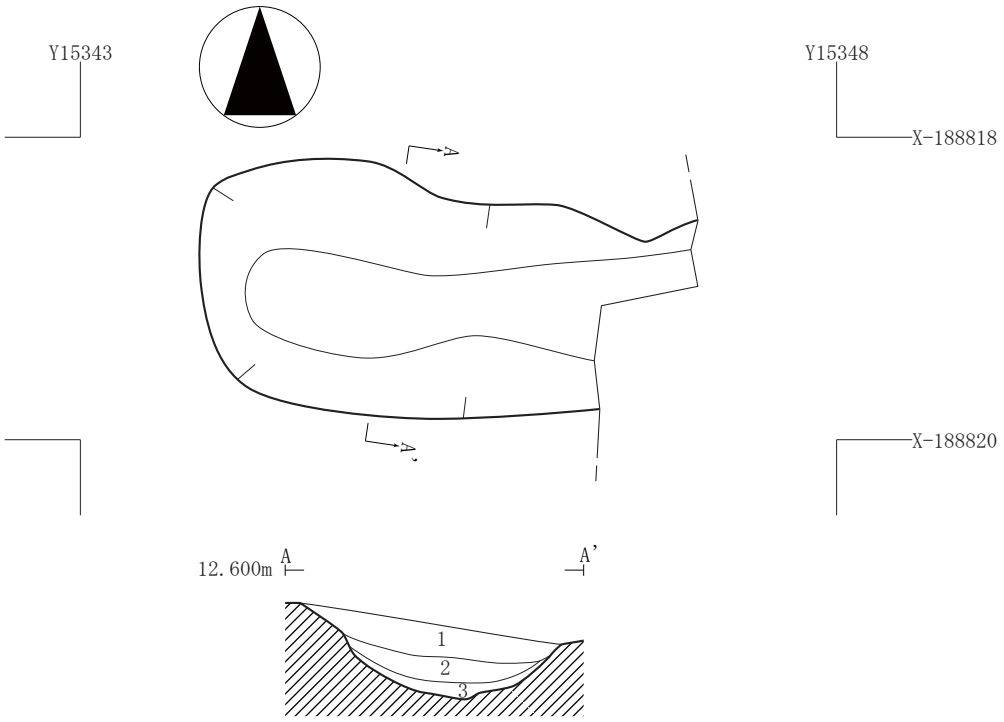
0　1m
S=1/50

第９図　ＳＤ121溝跡



1. 灰黄色土　上位にロームブロックを少量含む。締まりやや弱い。粘性あり。
2. 灰白色土　やや砂質。褐鉄粒をやや多く含む。締まりややあり。粘性ややあり。

ＳＫ122

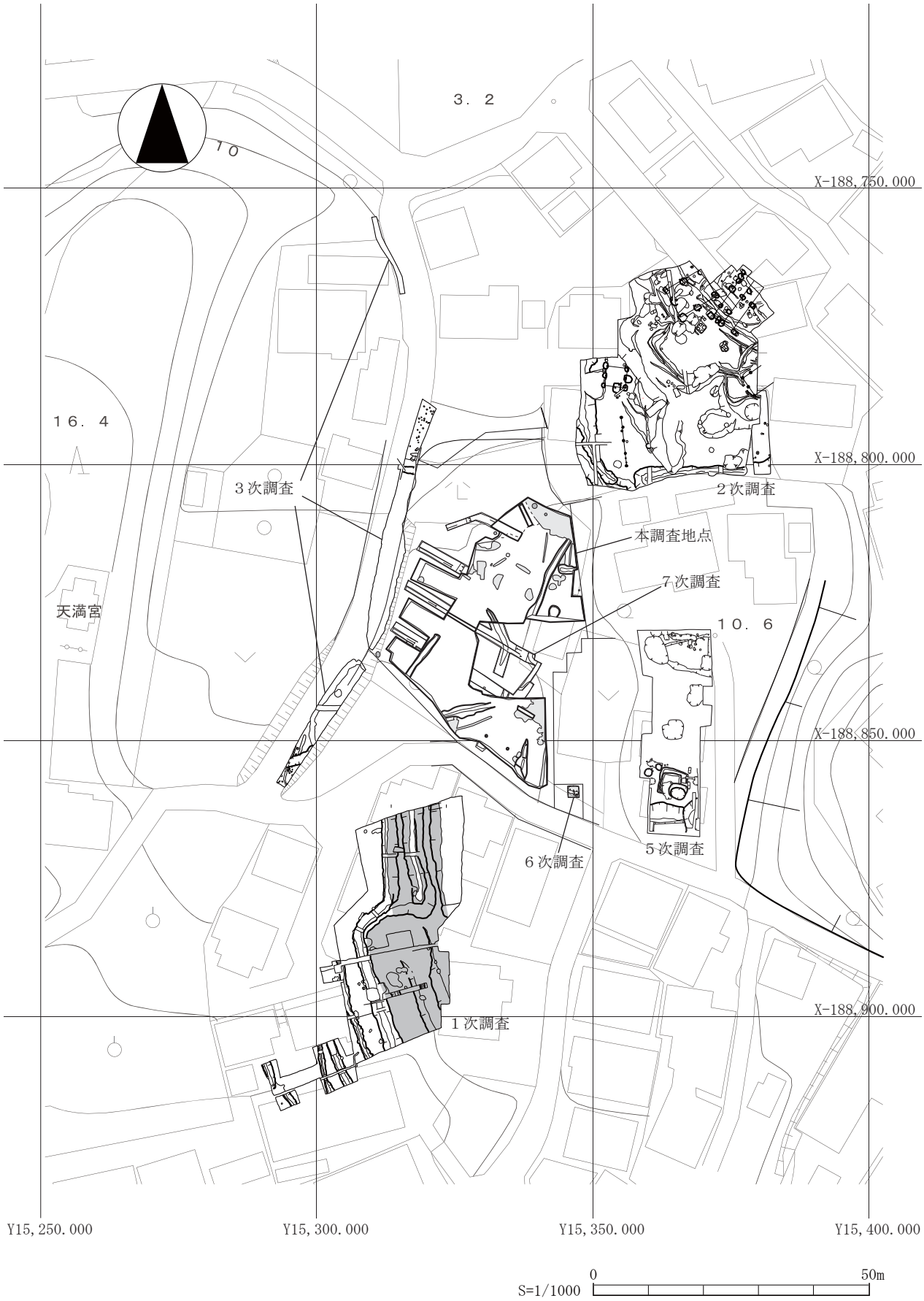


1. 撹乱
2. 暗褐色土　径１～３㎝大のロームブロックを少量含む。炭化物少量含む。締まりやや弱い。粘性ややあり。
3. 黄褐色土　地山土を主体とし、灰オリーブ砂質土少量混入。締まりややあり。粘性ややあり。

ＳＫ123

S=1/50　0　3m

第10図　ＳＫ122、123土壙



第11図　発掘調査地点合成図

ＳＫ122土壙（第10図）

【位置･形態】調査区東部で発見した。平面楕円形、断面浅い逆台形を呈する。

【重複】ほかの遺構との重複はない。

【方向・規模】規模は長軸200㎝以上、短軸190㎝、深さは検出面から20㎝である。

【遺物】近世の瓦質火鉢が出土している。

ＳＫ123土壙（第10図）

【位置･形態】調査区北東部で発見した。平面東西に長い方形、断面Ｕ字形を呈する。

【重複】ほかの遺構との重複はない。

【方向･規模】方向は真北に直交する。規模は長軸330㎝以上、短軸165㎝、深さは検出面から65㎝である。

【遺物】近世の陶器、染付碗が出土している。

３　まとめ

留ヶ谷遺跡では、過去に実施された周辺地点での発掘調査事例から、中世の館跡に関連する遺構が多く発見されている。今回の調査では、ＳＤ121が形態・規模から堀跡と思われるもので、中世～近世の陶器も出土している。また、第５次調査で発見された中世の堀跡とみられるＳＤ102に直交するような方位を示しており、ＳＤ121も館跡に関連する堀跡と推測される。このＳＤ121は南北に延びる馬の背状の高まりの東側に配置されており、同じような配置状況にあるＳＤ115、さらにＳＤ115に近い主軸方位をもち、馬の背状の高まりの西側に配置されるＳＤ117も、館跡に伴う溝である可能性が考えられる。ＳＤ117は、出土遺物は土師器のみであるが、埋土の土質は近世の陶器を出土したＳＤ120に近似している。ＳＤ120は第１次調査で検出された土塁・堀の北延長に対し直交に近い方位を示しており、これも館跡に伴うものかもしれない。上記のことから、ＳＤ115・117・120・121は、いずれも近世もしくはそれ以降に廃絶した遺構と考えられる。本調査地点においては、館跡が機能を失った後、大規模な土地の削平が行われていることが層序や検出遺構の遺存状況から推測され、この削平により既に失われてしまったものか、溝のほかに館跡に関連すると思われる施設は発見されなかった。

出土遺物や遺構埋土の状況から、ＳＤ116は古代に属する遺構であろうと思われ、ほかの遺構より先行する時期のものとなる。本調査地点の東に隣接する第５次調査では古代の住居跡も発見されており、本調査地点まで古代の集落が展開していた可能性は高いが、やはり後世の削平により失われてしまったものか、住居跡などは発見されなかった。

参考文献

多賀城市教育委員会『留ヶ谷遺跡　－第１・３次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第48集　1998
多賀城市教育委員会「（２）留ヶ谷遺跡（第２次調査）」『年報１　昭和61年度』多賀城市文化財調査報告書第14集　1987
多賀城市教育委員会「Ⅲ　留ヶ谷遺跡第５次調査」『小沢原遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第92集　2008
多賀城市教育委員会「Ⅱ　留ヶ谷遺跡第６次調査」『多賀城市内の遺跡１』多賀城市文化財調査報告書第112集　2013

調査区北部全景
（南から）

調査区西部全景
（東から）

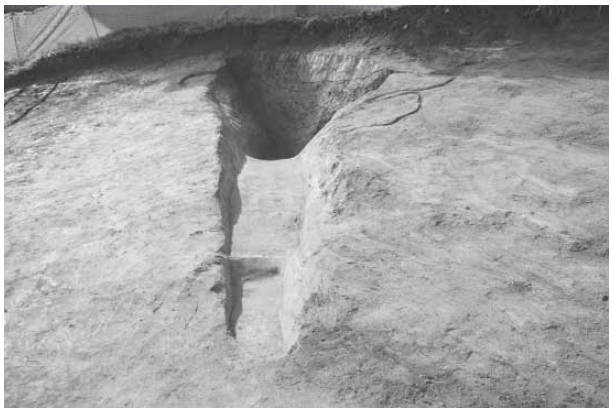
調査区南部全景
（北から）

ＳＤ115（南西から）

ＳＤ116（北西から）

ＳＤ117（北東から）

ＳＤ120（東から）



ＳＤ121（北から）

ＳＤ121　堆積土層（北から）

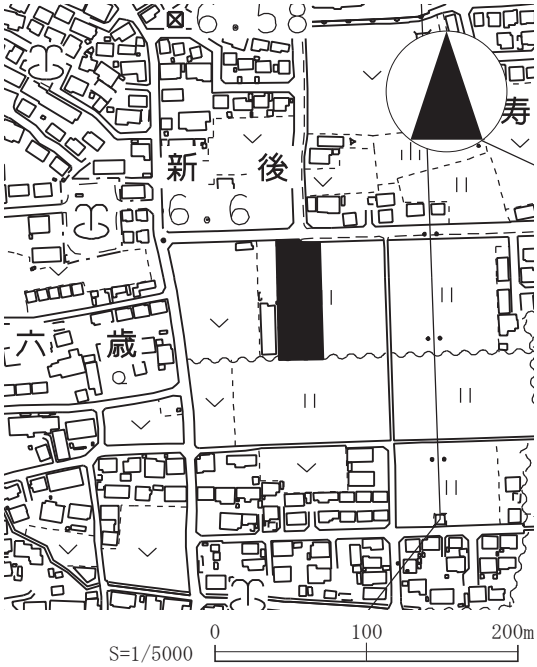
ＳＫ122（北から）

ＳＫ123（東から）

Ⅵ　新田遺跡第107次調査

１　調査に至る経緯と経過

本件は、新田字北地内における宅地造成工事に伴うものある。平成27年6月に、地権者より新田遺跡の北部に位置する当該地での宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、水田に最大1.5mの厚さの盛り土を行い、計画道路には給排水施設を埋設し、その際に造成面より深さ0.75～2.22mの掘削を行うこと、また、区画外周部東側・南側において土留め用Ｌ字型擁壁を設置するため、造成面より深さ1.8mの掘削を行うことから、遺跡への影響が懸念された。このため、遺跡保存のための協議を行い、記録保存のための確認調査を行った。その結果、遺構の存在が確認されたことから、10月16日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、11月24日より現地調査を開始した。



第１図　調査区位置図

はじめに、調査区南側の調査から着手し、北上する形で調査を進めた。断続的な降雨と多量の湧水により作業が難航したが、12月14日には調査区のＶ層までの遺構調査をほぼ終えて、12月15日に調査区全景写真の撮影を行った。年内の作業は12月17日で一端終了し、側溝部の断面観察において水田層と想定される黒色粘土層の調査については、年が明けた1月13日より再開した。しかし、水田層と想定される黒色粘土層（Ⅵ・Ⅷ・Ⅹ・Ⅻ層）ごとの精査では、水田遺構を発見することはできなかった。14日より土層堆積状況を記録するために断面図作成を行い、18日に土壌サンプルを採取、21日の重機による埋め戻しをもって、本調査の一切を終了した。

２．調査成果

（１）層序（第２図）

今回の調査では、現在の表土以下13層の堆積を確認した。

Ⅰ－１層：現在の表土・水田耕作土で、厚さは20cmである。

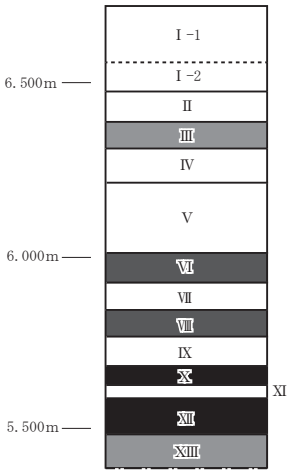
Ⅰ－２層：褐灰色粘質土の旧水田耕作土で、厚さは10cmである。

Ⅱ　　層：にぶい黄色砂質土が主体であり、厚さは10～20cmである。調査区の南側で厚く堆積する。

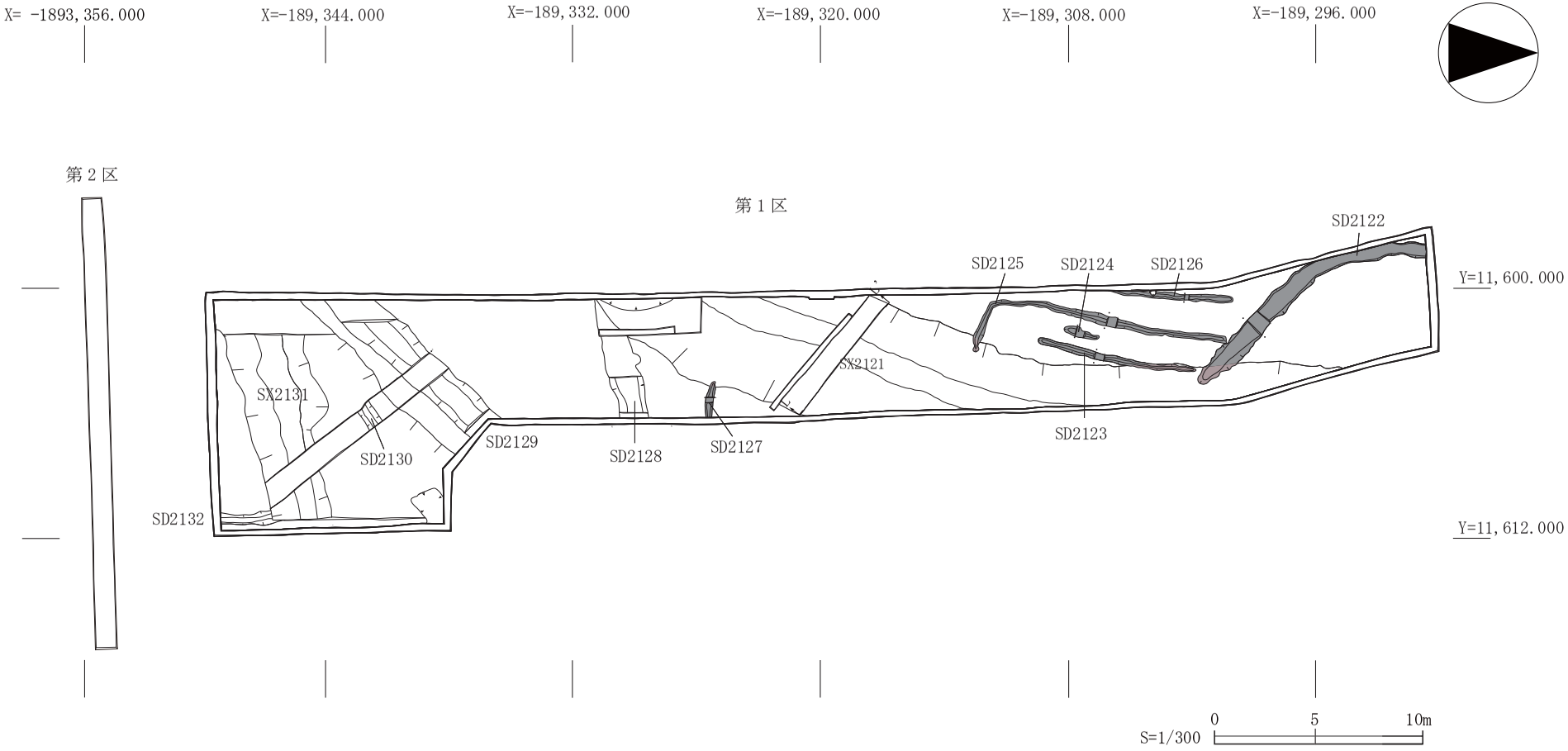
Ⅲ　　層：黒色粘質土が主体であり、厚さは10cmである。

Ⅳ　　層：灰色粘質土が主体であり、厚さは15cmである。

Ⅴ　　層：明黄褐色土が主体であり、厚さは20cm～30cmである。調査区北側の検出層である。



第２図　層序模式図


X= -1893,356.000
X=-189,344.000
X=-189,332.000
X=-189,320.000
X=-189,308.000
X=-189,296.000
第２区
第１区
SD2122
SD2125
SD2124
SD2126
Y=11,600.000
SX2121
SX2131
SD2130
SD2129
SD2128
SD2127
SD2123
SD2132
Y=11,612.000
0
5
10m
S=1/300

第３図　遺構平面図

Ⅵ　層：黄灰色粘土が主体であり、厚さは10㎝である。プラント・オパール分析の結果、水田層の可能性も指摘される。（附章）

Ⅶ　層：明黄褐色粘土で、厚さは10㎝である。

Ⅷ　層：黒色粘土で、厚さは10㎝である。色調には濃淡がある。プラント・オパール分析の結果、水田層の可能性が極めて高いと考えられる。（附章）

Ⅸ　層：明黄褐色粘土で、厚さは10㎝である。

Ⅹ　層：黒色粘土で、厚さは５㎝である。色調はほぼ均質で、純粋な黒色である。プラント・オパールの分析の結果、水田層である可能性は低いと考えられる。（附章）

Ⅺ　層：明黄褐色粘土で、厚さは５㎝である。粘質性があり、黄色味が非常に強い。

Ⅻ　層：黒色粘土で、厚さは15㎝である。純粋な黒色である。プラント・オパールの分析の結果水田層である可能性は低いと考えられる。（附章）

ⅩⅢ層：灰色粘土で、厚さは15㎝以上である。繊維状の植物遺体を多く含んでいる。プラント・オパールの分析の結果、水田層である可能性は低いと考えられる。（附章）

（２）発見遺構

今回の調査では、Ⅲ層上面およびⅤ層上面で溝跡を発見した。

ＳＤ2122（第４図）

【位置・形態】調査区北側のⅤ層上面で確認した溝跡である。

【重複】ＳＸ2121と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】北から南東に向かって緩やかに湾曲する。規模は11ｍ以上、上幅は約１ｍ、深さは検出面から12㎝である。底面には凹凸があるが極端な比高差はなく、壁は緩やかに立ち上がる。断面に葉理状堆積が観察できる。

【埋土】灰色粘質土である。灰白色火山灰の小ブロックが混入する。

【遺物】土師器片が出土している。

ＳＤ2123（第４図）

【位置・形態】調査区北側のⅤ層上面で確認した南北方向の溝である。ＳＤ2124・ＳＤ2125・ＳＤ2126に平行する。

【重複】ＳＸ2121と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】方向は、北で約14度東に偏している。規模は6m以上、上幅は約40㎝でり、検出面から深さ10㎝である。

【埋土】灰色粘質土である。

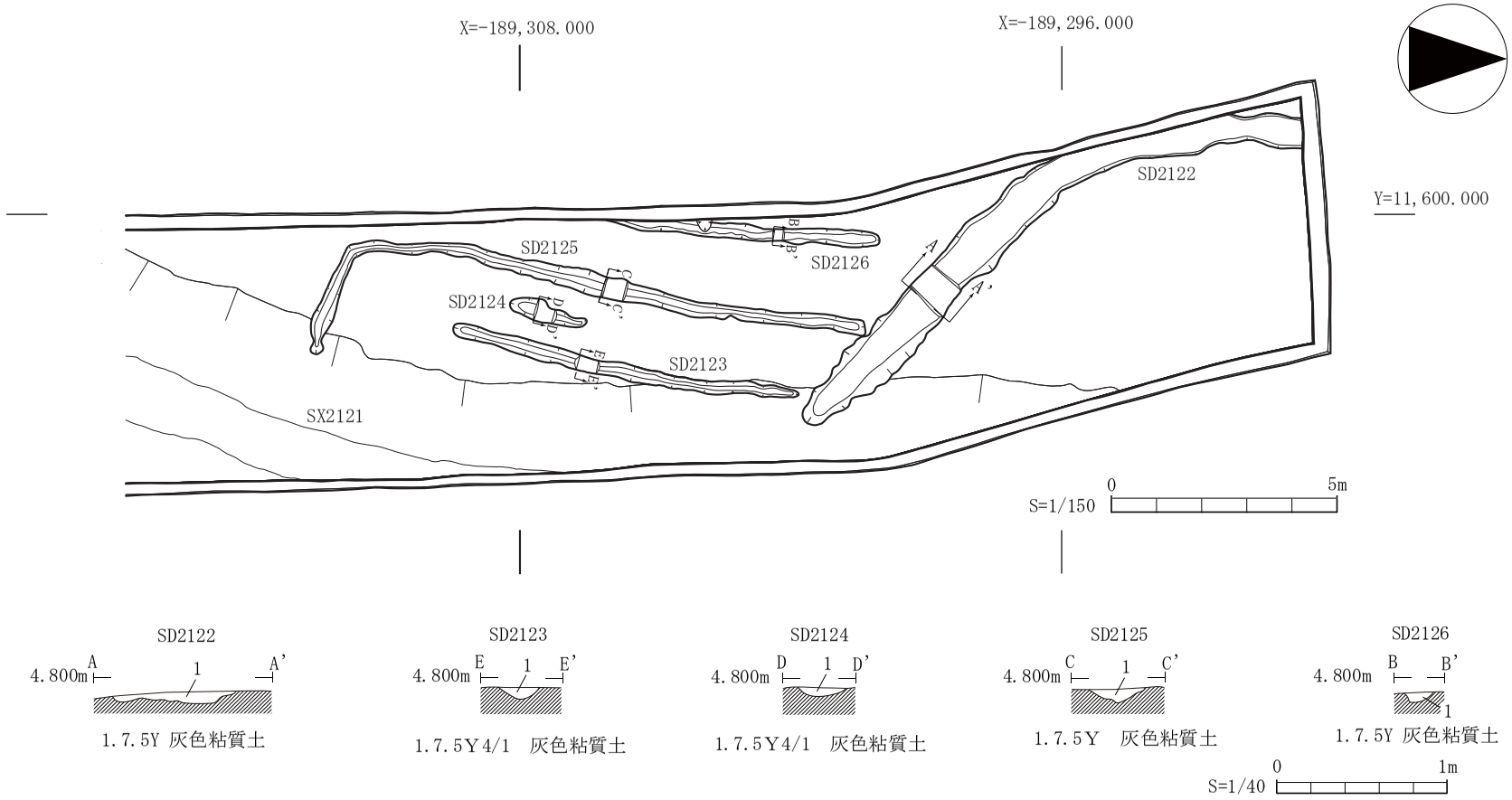
【遺物】出土していない。

ＳＤ2124（第４図）

【位置・形態】調査区北側のⅤ層上面で確認した南北方向の溝である。ＳＤ2123・ＳＤ2125・ＳＤ2126に並行する。

【重複】重複は無い。

【方向・規模】方向は、北で約14度東に偏している。規模は1.7m、上幅は約40㎝で、深さは検出面から



第４図　調査区北　遺構平面図・断面図

８㎝である。

【埋土】灰色粘質土である。

【遺物】出土していない。

ＳＤ2125（第４図）

【位置・形態】調査区北側のＶ層上面で確認した南北方向の溝である。南端が東へ屈曲する。ＳＤ2123・ＳＤ2124・ＳＤ2126に並行する。

【重複】ＳＸ2121と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】方向は、北で約14度東に偏している。規模は12m以上、上幅は約30㎝で、深さは検出面から10㎝である。

【埋土】灰色粘質土である。

【遺物】出土していない。

ＳＤ2126（第４図）

【位置・形態】調査区北側のＶ層上面で確認した南北方向の溝である。ＳＤ2123・ＳＤ2124・ＳＤ2125に並行する。

【重複】重複はない。

【方向・規模】方向は、北で約14度東に偏している。規模は6m以上、上幅は約40㎝で、深さは検出面から10㎝である。

【埋土】灰色粘質土である。

【遺物】出土していない。

ＳＤ2127（第５図）

【位置・形態】調査区中央部Ｖ層上面で確認した東西方向の溝である。

【重複】ＳＸ2121と重複し、それよりも古い。

【方向･規模】およそ東西方向の溝であり､規模は1.8m以上､上幅は約40㎝で､深さは検出面から８㎝である。

【埋土】灰色粘質土である。

【遺物】出土していない。

ＳＤ2128（第５図）

【位置・形態】調査区中央部Ｖ層上面で確認した東西方向の溝跡である。

【重複】ＳＸ2121と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】方向はほぼ東西方向で、東で約13度北に偏している。規模は6ｍ以上、上幅は約2.2ｍで、深さは90㎝である。断面はV字形を呈している。

【壁】両壁ともに底面から約50度の傾斜角で立ち上がる。

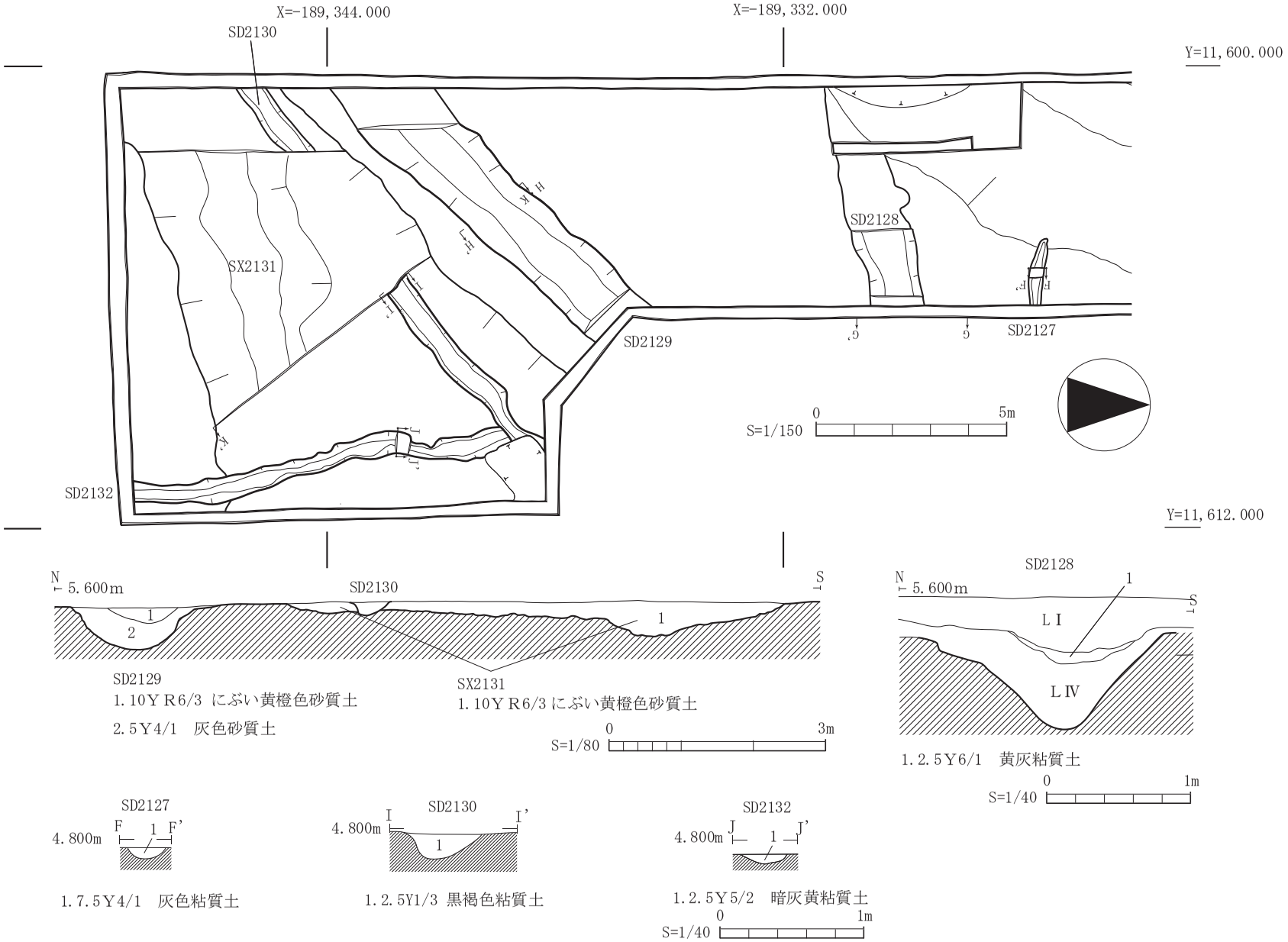
【埋土】Ⅳ層の灰色粘質土が流れ込み、溝全体を埋めている。その上層に、後世の流れ込みである灰黄褐色砂が堆積する。

【遺物】中国産の褐釉陶器壺小片、須恵器破片が出土している。

ＳＤ2129（第５図）

【位置・形態】調査区南側Ⅲ層上面で確認した東西方向の溝跡である。

【重複】重複は無い。



第５図　調査区南　遺構平面図・断面図

【方向･規模】方向は東で約45度北に偏している。規模は10m以上、上幅は約２ｍで、深さは60㎝である。上端の開いたU字形を呈している。

【埋土】Ⅱ層のにぶい黄色砂質土が流れ込み、溝全体を埋めている。

【遺物】土師器破片が出土している。

ＳＤ2130（第５図）

【位置・形態】調査区南側で確認した溝跡である。

【重複】ＳＤ2131、ＳＤ2132と重複し、それらよりも新しい。

【方向･規模】方向は東で約38度北に偏している。規模は12m以上、上幅は約60㎝で、深さは58㎝である。

【埋土】黒褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

ＳＤ2132（第５図）

【位置・形態】調査区の南側で確認した溝跡である。

【重複】ＳＤ2130、ＳＸ2131と重複し、ＳＤ2130よりも古く、ＳＸ2131よりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約10度東に偏し、全体が緩やかに蛇行する。規模は10m以上、上幅は約40～70㎝の不整形である。

【埋土】黒褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

ＳＸ2121（第４図）

【位置・形態】調査区の北側で確認した河川跡である。

【重複】ＳＤ2122、ＳＤ2123、ＳＤ2125と重複し、これらより新しい。

【方向・規模】ほぼ南北方向である。規模は20m以上、上幅は３m以上である。

【埋土】灰色粘土である。

【遺物】近世の陶磁器片が出土している。

ＳＸ2131（第５図）

【位置・形態】調査区南側で確認した東西方向の河川跡である。

【重複】ＳＤ2130、ＳＤ2132と重複し、それらよりもよりも古い。

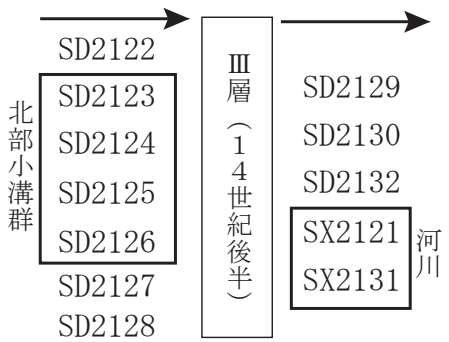
【方向・規模】方向は東で約33度北に偏している。規模は15m以上、上幅は約４m～８mである。

【埋土】にぶい橙色砂質土である。

【遺物】出土していない。

３．まとめ

今回の調査では出土遺物が少なく、遺物から遺構の年代を特定することは困難である。一方で、調査区のほぼ全域において黒色粘土層（Ⅲ層）の分布を確認している。これは新田遺跡で確認される14世紀後半に形成された黒色粘土層に類似する。今回確認された黒色粘土層を14世紀後半のものと考えると、遺構の新旧関係を右図のように見ることができる。



これらの遺構の中で、ＳＤ2122からは古代の土師器破片が出土しており、埋土に灰白色火山灰の小ブロックが混入することから、おおよそ10世紀前葉以降と推定される。また、調査区中央のＳＤ2128はⅤ層を掘り込んで作られており、中国産の褐釉壺（13世紀～ 14世紀）の破片が出土していることから、中世の溝である可能性が高い。

また、今回の調査では調査区の一部を掘り下げて、古墳時代前期の水田遺構の確認を行った。その結果、遺構は発見できなかったものの、水田層に類似する黒色粘土の堆積層（第２図Ⅵ・Ⅷ・Ⅹ・Ⅻ）を確認した。それぞれの土壌サンプルを採取し分析を行ったところ、Ⅵ層において2,400個/g、Ⅷ層では6,700個/gの密度のプラントオパールが検出された（附章）。Ⅵ層の密度については、上層あるいは他所からのプラント・オパール混入の可能性がある一方で、Ⅷ層で検出した高密度のプラント・オパールは、Ⅷ層が水田耕作層である可能性が高いことを示している。これら水田層の年代については、遺物が出土していないことから、直接推定することは難しい。しかし、本遺跡から山王遺跡に渡る広い範囲で、これに類似する黒色粘土層が確認されている。出土する遺物は、いずれも古墳時代前期のものであることから、およそ同じ年代が考えられる。なお、Ⅹ層およびⅻ層からはイネのプラント・オパールは検出はなく、ヨシ属の密度が高くなることから、これらの層が形成された時期の調査地は、ヨシの繁茂する湿地であったと推測できる。

参考文献

多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡２』多賀城市文化財調査報告書第108集　2012

新田遺跡第107次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO ２）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント･オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント･オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

新田遺跡第107次調査の発掘調査では、水田遺構は確認できなかったものの、近隣調査区で検出された水田遺構に類似する堆積層が複数認められた。そこで、これらの層における稲作の可能性を検討することを目的としてプラント・オパール分析を行うことになった。

２．試料

分析試料は、調査区北東角の土層断面より採取されたⅥ層（黄灰色粘土、サンプル№.１）、Ⅷ層（黄灰色粘土、サンプル№.３）、Ｘ層（灰色粘土、サンプル№.５）、XII層（黒色粘土、サンプル№.７）、ＸⅢ層（灰色粘土、サンプル№.８）の５点である。

３．分析方法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μm以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10－５g）を乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより､各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山，2000)。

各分類群の換算係数は､イネ（赤米）は2.94（種実重は1.03)､ヨシ属（ヨシ）は6.31､ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000)。

４．結果

分析試料から検出されたプラント･オパールは､イネ､キビ族型､ヨシ属､ススキ属型､タケ亜科ササ属（ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型)、その他のタケ亜科および未分類である。また、プラント･オパール以外に海綿骨針がされた。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１、図１に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

イネはⅥ層とⅧ層で検出されている。Ⅷ層では高い密度である。イネ以外では、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が各試料で検出されている。ヨシ属はⅥ層、Ⅹ層、Ⅻ層で、チマキザサ節型はⅥ層、Ⅷ層、ⅩⅢ層でそれぞれ高い密度である。キビ族型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型および海綿骨針は全体にやや低い密度である。

５．新田遺跡第107次調査における稲作と推定される周辺植生・環境

（１）稲作の検討

稲作跡の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料１gあたり5,000個以上の密度で検出された場合、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000)。ただし、仙台平野（仙台市域、多賀城市域）では、これまでの調査で密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満でも水田遺構が検出された例が多く報告されていることから、ここでは3,000個/gを目安とした。

本調査区では、Ⅵ層とⅧ層からイネが検出された。Ⅷ層ではプラント・オパール密度が6,700個/gであり、通常の水田跡の可能性を判断する際の基準値である5,000個/gを超過している。このことから、当該層において稲作が行われていた可能性は高いと判断される。Ⅵ層では密度が2,400個/gとやや低い値である。直上のⅤ層が分析の対象となっていないため、上層からの影響については評価できない。したがって、当該層で稲作が行われていた可能性は否定できないが、上層もしくは近傍からプラント・オパールが混入した危険性も考えられる。Ⅹ層、ⅩⅢ層およびⅩⅢ層については稲作が行われていた可能性を積極的に肯定することはできない。

（２）植生と堆積環境の推定

ヨシ属は湿地や湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育する。このことから、これらの植物の出現状況を検討することで、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。

本調査地では、Ⅵ層、Ⅹ層、Ⅻ層でヨシ属が非常に高い密度であり、Ⅷ層でも高い密度である。おもな分類群の推定生産量をみると、いずれもヨシ属が卓越している。このことから、これらの層の堆積時期は調査地はヨシの繁茂する湿地の環境であったと推定される。なお、Ⅵ層ではチマキザサ節型も高密度であることから、周辺の乾いたところにはチマキザサ節などのササ属も生育していたと考えられる。Ⅷ層とⅩⅢ層ではチマキザサ節型が優勢であることから、両層の堆積時期の調査地は比較的乾いた環境であり、ササ属を主にススキ属などが生育していた。なお、周辺の湿ったところにはヨシ属などが生育していたと推定される。

６．まとめ

プラント・オパール分析の結果、Ⅷ層においてイネが高い密度で検出され、当該層で稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、Ⅵ層においても調査地もしくは近傍で稲作が行われていた可能性が認められた。Ⅵ層、Ⅹ層、Ⅻ層の堆積当時は、調査地はヨシ属の繁茂する湿地の環境であり、ⅧとⅩⅢ層の時期はササ属やススキ属が生育するような乾いた環境であったと推定された。

文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－．考古学と自然科学，20，p.81-92.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

表１　新田遺跡第107次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）		調査区北東角 Ⅵ層	Ⅷ層	Ⅹ層	Ⅻ層	ⅩⅢ層
イネ科	Gramineae (Grasses)					
イネ	*Oryza sativa*	24	67			
キビ族型	*Paniceae* type	18	18	6	6	6
ヨシ属	*Phragmites*	103	36	90	85	12
ススキ属型	*Miscanthus* type	30	18	24	12	6
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)					
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	24	12	6	30	12
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	109	79	42	48	84
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	24	24	6	12	12
その他	Others	12	12	6	6	6
未分類等	Unknown	42	36	30	60	30
（海綿骨針）	Sponge spicules	12	12			6
プラント・オパール総数		386	302	210	259	168

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・㎝）

イネ	*Oryza sativa*	0.71	1.96			
ヨシ属	*Phragmites*	6.50	2.29	5.69	5.34	0.76
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.38	0.23	0.30	0.15	0.07
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.12	0.06	0.03	0.15	0.06
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	0.82	0.59	0.32	0.36	0.63
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.07	0.07	0.02	0.04	0.04

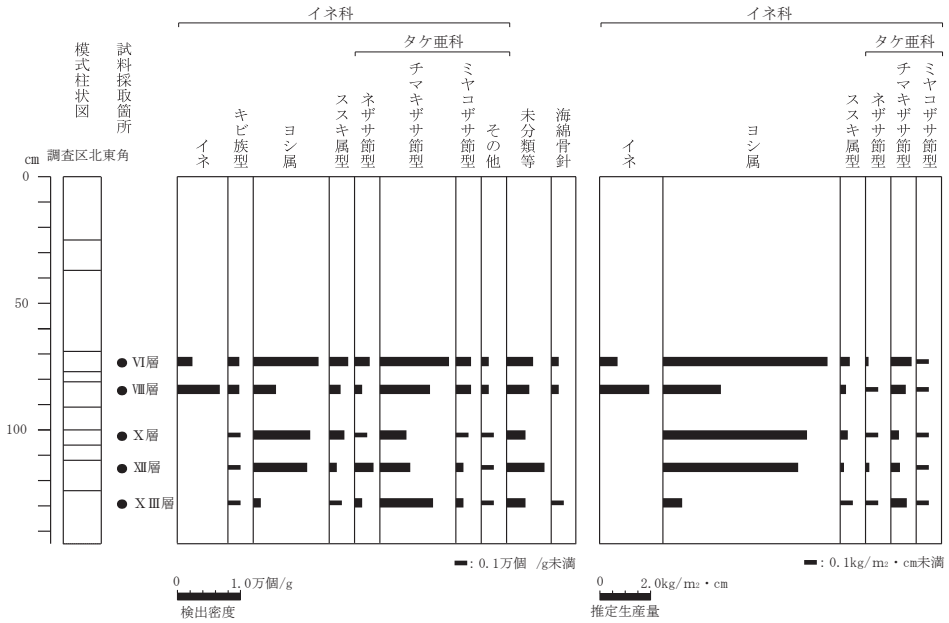
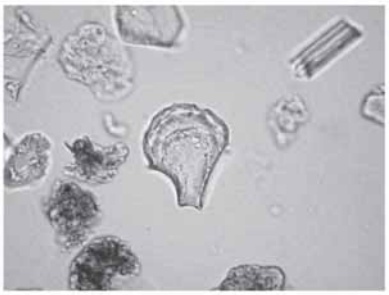


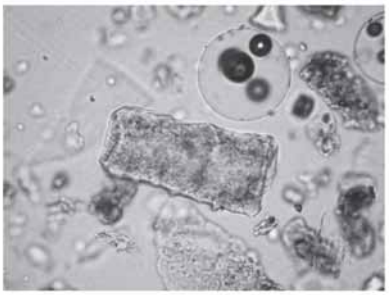
図１　新田遺跡第107次調査のプラント・オパール分析結果

新田遺跡第107次調査のプラント・オパール

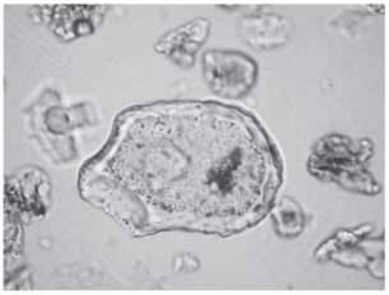


イネ（Ⅵ層）

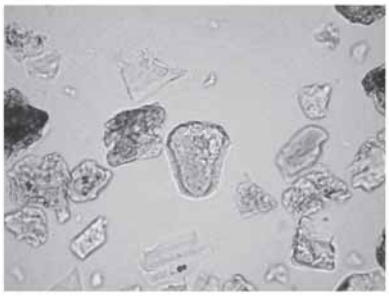
イネ（Ⅷ層）



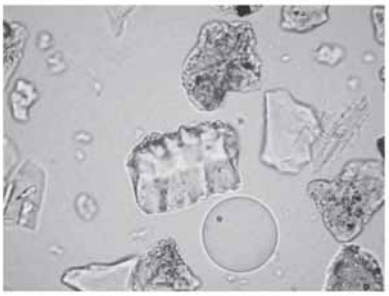
キビ族型（Ⅷ層）



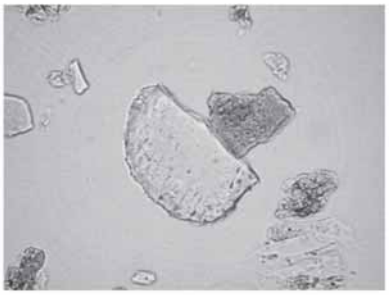
ヨシ属（Ⅵ層）



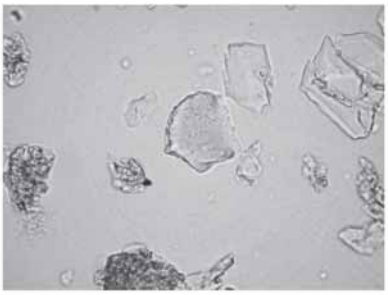
ススキ属型（Ⅹ層）



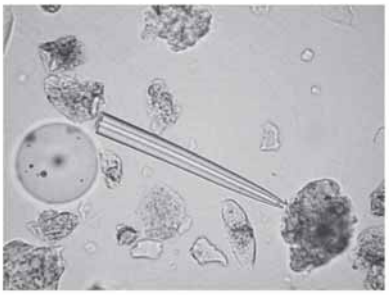
ネザサ節型（Ⅻ層）



チマキザサ節型（ⅩⅢ層）



ミヤコザサ節型（Ⅷ層）



海綿骨針（Ⅵ層）

50μm

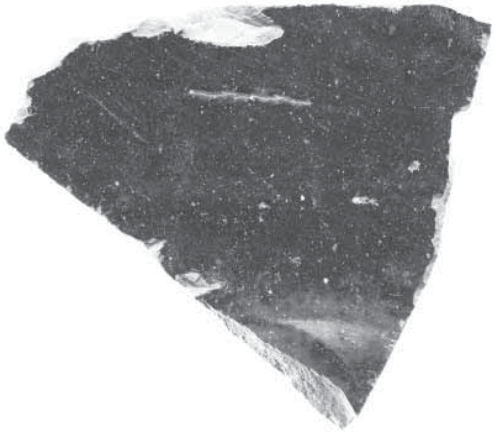
調査区全景（北より）

ＳＤ2123・2124・2125完掘状況

ＳＤ2128完掘状況（西より）

ＳＤ2128断面図（西より）

ＳＤ2129完掘状況（東より）



ＳＤ2182出土
中国産褐釉陶器壺片

土層堆積状況（調査区北東角）

報告書抄録

ふりがな	たかさきいせきほか
書名	高崎遺跡ほか
副書名	高崎遺跡第102次　山王遺跡第150次　山王遺跡第152次　留ヶ谷遺跡第８次 新田遺跡第107次
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第128集
編著者名	島田敬、熊谷満、畠山未津留
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873　宮城県多賀城市中央二丁目27－１　TEL：022-368-0134
発行年月日	西暦2016年３月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
高崎遺跡（たかさきいせき）（第102次）	宮城県多賀城市（みやぎけんたがじょうし）高崎（たかさき）１丁目103番１	04209	18018	38度18分01秒	141度00分07秒	20150407～20150629	1,730㎡	宅地造成
山王遺跡（さんのういせき）（第150次）	宮城県多賀城市（みやぎけんたがじょうし）山王字掃下し（さんのうあざはけおろ）2番8,2番24,2番27	04209	18013	38度17分58秒	140度58分18秒	20150818～20151009	289㎡	集合住宅建設
山王遺跡（さんのういせき）（第152次）	宮城県多賀城市（みやぎけんたがじょうし）南宮字八幡（なんぐうあざはちまん）143-2	04209	18013	38度18分02秒	140度58分47秒	20150827～20151027	80㎡	共同住宅建設
留ヶ谷遺跡（とめがやいせき）（第8次）	宮城県多賀城市（みやぎけんたがじょうし）留ヶ谷（とめがや）一丁目353-1	04209	18047	38度18分06秒	141度00分18秒	20151116～20151221	980㎡	集合住宅建設
新田遺跡（にいだいせき）（第107次）	宮城県多賀城市（みやぎけんたがじょうし）新田字北（にいだあざきた）14,14-1,15,15-1,16,16-3	04209	18012	38度17分50秒	140度57分45秒	20151124～20160121	487㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高崎遺跡（第102次）	集落・屋敷	古代	竪穴住居跡、溝跡	土師器・須恵器・瓦	
山王遺跡（第150次）	集落・屋敷	古墳時代	水田跡	なし	
山王遺跡（第152次）	集落・都市	古代	小溝群	土師器・須恵器	
留ヶ谷遺跡（第8次）	集落・都市	古代・中世以降	柱跡・溝跡・土壙	土師器・陶器	
新田遺跡（第107次）	集落	古代・中世以降	溝跡	陶器	

要約	高崎遺跡第102次調査では、古代の竪穴住居跡、溝跡、掘立柱建物跡を発見した。
	山王遺跡第150次調査では、古墳時代の水田跡を発見した。
	山王遺跡第152次調査では、古代の道路跡、掘立柱建物跡を発見した。
	留ケ谷遺跡第８次調査では、古代の溝跡、中世以降の溝跡を発見した。
	新田遺跡第107次調査では、古代の小溝群、中世の溝跡を発見した。

多賀城市文化財調査報告書第128集

高崎遺跡ほか

―高崎遺跡第102次 山王遺跡第150次 山王遺跡第152次
留ヶ谷遺跡第８次 新田遺跡第107次―

平成28年３月31日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
宮城県多賀城市中央二丁目27番１号
電 話（０２２）３６８－０１３４

発行 多賀城市教育委員会
宮城県多賀城市中央二丁目１番１号
電 話（０２２）３６８－１１４１

印刷 株式会社 工陽社
宮城県塩竈市尾島町８番５号
電 話（０２２）３６５－１１５１

VEGETABLE OIL INK
この印刷物は、環境にやさしい
「植物油インキ」を使用しています。